令和元年度
自己点検・評価「年次報告書」

長崎女子短期大学
自己点検評価室

【目次】

部　署　名	職　名	氏　名	頁
学長	学長	玉島　健二	1
栄養士コース	コース長	橋口　亮	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濵口　なぎさ	5
幼児教育学科	学科長	織田　芳人	7
学生部	部長	光武　きよみ	9
図書館	館長	森　弘行	11
自己点検評価室	室長	武藤　玲路	13
入試広報室	室長	髙井　達司	15
キャリア支援センター	センター長	原田　実輝	17
ＦＤ・ＳＤ委員会	委員長	武藤　玲路	19
ＩＲ推進室	室長	森　弘行	21
教職課程委員会	委員長	織田　芳人	23
募集・広報委員会	委員長	髙井　達司	25
紀要・図書委員会	委員長	中村　浩美	27
教務委員会	委員長	山口　ゆかり	29
学生委員会	委員長	古賀　克彦	31
障がい学生支援委員会	委員長	光武　きよみ	33
学生相談室	室長	福井　謙一郎	35
食品加工研究センター	センター長	橋口　亮	37
地域連携推進センター	センター長	荒木　正平	39
地域子育て支援センター	センター長	本村　弥寿子	41
寮務委員会	委員長	本村　弥寿子	43
事務局	局長	前田　功	45

職　名	氏　名	頁
学長	玉島　健二	47
教授	橋口　亮	48
	森　弘行	49
	織田　芳人	50
	中澤　伸元	51
	松尾　公則	52
	長尾　久美子	53
	白石　景一	54
准教授	武藤　玲路	55
	濵口　なぎさ	56
	山口　ゆかり	57
	島田　幸一郎	58
講師	古賀　克彦	59
	中村　浩美	60
	本村　弥寿子	61
	荒木　正平	62
	福井　謙一郎	63
	光武　きよみ	64
	蛯原　正貴	65
	江頭　万里子	66

職　名	氏　名	頁
助教	船勢　肇	67
	桑原　倫子	68
	桑原　真美	69
実習助手	守山　優美	70
	黒田　真衣	71
	内山　美保	72
事務局長	前田　功	73
入試広報室長	髙井　達司	74
キャリア支援センター長	原田　実輝	75
事務（会計）	宮﨑　伸一郎	76
〃　（会計）	一瀬　章子	77
〃　（教務）	林田　翔太郎	78
〃　（入試広報・庶務）	藤田　紫織	79
司書	伊藤　理恵子	80
寮（寮監長）	海保　佐知子	81
〃（副寮監）	海保　都惠子	82
〃（副寮監）	大場　恵美	83

令和元年度

「部署別報告書」

令和元年度　「学長・運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（学長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．今年度受審する３回目の認証評価（第三者評価）への準備、対応

２．入試・運営委員会における協議や学科・コースの取組を通じた本学の特色化、活性化の推進

３．積極的な募集活動による定員充足率の向上、きめ細かな対応による学生満足度の向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　自己点検・評価室委員及び自己点検・評価報告書執筆委員を中心として、全学的・組織的な対応により、６月末までに関係資料の作成・送付、９月に予定される訪問調査の準備・対応を行う。

２．　学科長・コース長に対し、活性化・特色化に向けた取組や協議を推進させる。
私立大学等改革総合支援事業への応募・申請を行い、外部資金獲得に努める。

３．　学長自らが可能な限り、高校訪問や進学ガイダンスに出向き、学生募集に繋げる。
きめ細かい相談体制、教職員の連携、施設設備の改修等により、学生満足度を向上させる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
予定通り、６月下旬に自己点検評価・評価報告書及び関係資料の送付、９月に訪問調査を受け、１２月下旬に機関別評価結果（案）が送付されてきた。３月には正式に評価結果が送付され、「適格」の評価を受けた。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学科・コースの特色化推進については、栄養士コースとビジネス医療秘書コースは、ある程度形が見えたが、幼児教育学科については形にならなかった。私立大学等改革総合支援事業については、タイプ１及びタイプ３ともに採択された。これで３年連続で採択されたことになる。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
学生募集については、前年比マイナス３０名と大きな落ち込みとなり、言い訳ができない状況であった。
施設設備の充実については、プロジェクト会議の協議結果を受け、２号館ロビーの机・椅子の増設、ロッカー室の移動に着手できた。また、情報演習室のパソコン整備、２号館トイレの洋式化を次年度に実施するための予算化を行った。学生満足度の向上については、全学科・コースとも概ね良い評価を得た。ただし、施設設備や教職員の対応、時間割等に関する要望・意見については、次年度に改善していく必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度は、学習成果の６項目を中心に評価指標の策定などを行う。

２．学科・コースの特色化については、引き続き協議を進めていく。私立大学等改革総合支援事業は次年度もチャレンジしていく。

３．学生の満足度向上については、アンケート結果を踏まえ、学内に設置したプロジェクト会議を中心に、何を、どうすれば、満足度アップに繋がるのかについて、引き続き協議する。卒業時調査での要望・意見については、真摯に耳を傾け改善に努めていく。

令和元年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1．今年度に受審する認証評価への準備・対応
2．入試・運営委員会における協議や学科・コースの取組を通じた本学の特色化、活性化の推進
3．積極的な募集活動による定員充足率の向上、きめ細かな対応による学生満足度の向上

Do 実行

1．自己点検・評価委員等を中心として、資料作成、訪問調査に対応する。
2．学科長・コース長に活性化・特色化に向けた協議を推進させる。私立大学等改革総合支援事業に申請し、外部資金を獲得する。
3．高校訪問、進学ガイダンスに出向き、学生募集に繋げる。きめ細かい相談体制、教職員の連携、施設等の改修等により満足度を上げる。

Check 検証

1．6月下旬に自己点検・評価報告書及び関係資料を送付、9月に訪問調査を受け、12月に機関別評価結果案が送付され、適格の評価の見込みとなった。
2．特色化推進プロジェクト会議を設置し、栄養士コースとビジネス医療秘書コースについては形が見えてきた。私立大学等改革総合支援事業については、タイプ１・３ともに採択された。これで３年連続の採択となった。
3．学生募集は前年度比－30名と大幅な落ち込みとなったが、これを契機にプロジェクト会議を立ち上げ、改革に取り組んだ。学生満足度の向上については、前年度より良かった。

Act 改善

1．次年度は学修成果の6項目を中心に評価指標の策定に取り組む。

2．学科・コースの特色化については、引き続き協議を継続し、見える形にする。私立大学等改革総合支援事業については、次年度もチャレンジしていく。

3．学生募集についてはチャレンジあるのみ。学生の満足度向上については、プロジェクト会議を中心に、どうすれば満足度アップに繋がるのかについて、引き続き協議する。

令和元年度　「栄養士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・委員会等　・事務局等　・教職員個人　・その他（　　）

氏名：橋口　亮（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．報告・連絡・相談、期限厳守、今すぐ実行を意識して取組める組織づくり。
２．学生と教職員が取組むコース独自の行事の実施。
３．学生及び教職員の「長崎食育学」に取組む意識の向上。
４．栄養士実力認定試験のＡ認定70%以上を目標とした取組。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．情報の流れを良くするため。学生、スタッフ間の触れ合いを深める。
２．「長崎食育学」、卒業研究を活用し、「卓袱料理試食会」を開催する。
３．実習科目を中心に、長崎の食文化を取り入れた授業を行い、学生および教職員に「長崎食育学」に取組む意識を高める。
４．２年次後期に「栄養士スキルアップ講座」を開催する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

コースにおける報告、連絡、相談の意識は、高まっているとはいえない。スタッフから情報が上がらないことがあり、ラインとスタッフの関係が途切れる場面があった。また、今すぐ実行に関しても、共通認識としてコースで共有されていないと感じることがあった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

「長崎食育学」の一環として卒業研究で「卓袱料理試食会」を開催できた。残念なことは、これまでの試食会では見られたマスコミ取材が１社もなかったことである。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

実習科目を中心に「長崎食育学」を取り入れた授業を行い、スタッフや学生に地域の食文化を伝承する意識を高めることでスタートしたが、卒業研究、授業科目を含め、一部の取り組みに終わった。特に、調理系の実習での取り組みが薄かったのは残念である。

４．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

令和元年度の結果は、表のとおりである。認定Ａは、50%を切り、認定Ｂより少ない。85問中43問（50.5%）

認定Ａ	認定Ｂ	認定Ｃ
12名（４５%）	13名（４８8%）	２名（7%）

正解できない学生が過半数である。目標とした認定Ａ70%以上は不可能な目標でなない。そこに至らない原因は、学生の意識だけでなく、教育支援する側の組織的な問題がある。ラインとスタッフの意識的な活動や教育支援に関する共通認識の構築が必要である。なお、本学の平均点は、42.3点、短大の平均は42.2点、全国平均（管理栄養士課程を含む）47.2点であった。短大平均を0.1点上回った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

退官のため、記載しない。

令和元年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1．報告・連絡・相談、期限厳守、今すぐ実行を意識して取組める組織づくり。

2．学生と教職員が取組むコース独自の行事の実施。

3．学生及び教職員の「長崎食育学」に取組む意識の向上。

4．栄養士実力認定試験のＡ認定70%以上を目標とした取組。

Do 実行

1．情報の流れを良くするため。学生、スタッフ間の触れ合いを深める。

2．「長崎食育学」、卒業研究を活用し、「卓袱料理試食会」を開催する。

3．実習科目を中心に、長崎の食文化を取り入れた授業を行い、学生および教職員に「長崎食育学」に取組む意識を高める。

4．2年次後期に「栄養士スキルアップ講座」を開催する。

Check 検証

1．最低限の情報の共有はできたが、情報の流れは充分であったとはいえない。

2．「卓袱料理試食会」が卒業研究の一環として実施できた。残念なのは、マスコミ関係の取材が全くなかったことである。

3．一部での取り組みに終わった。栄養士コースの教育支援の特徴として「長崎食育学」を卒業研究や授業に取り入れる意識の構築ができなかった。

4．認定A70%以上の目標は、達成できなかった。認定A45%、認定B48%、認定C７％であり、取り組みの甘さを感じた。認定A70%以上は、達成できない目標ではない。至らない原因の見極め、改善が求められる。

Act 改善

退官のため、記載しない。

令和元年度　「ビジネス・医療秘書コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：濵口　なぎさ（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）

２．多くの学生が入学時に希望している資格・検定の取得をサポートし、卒業時の満足度アップを図る（創造）

３．在学中の２年間を通して、「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけ、学生の実践力の向上を図り、卒業までの就職内定を支援する（実践）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．健康上の理由で欠席が多い等配慮が必要な学生、欠席が多く勉学意欲が乏しい学生については、チューター及び各科目担当者が連携し、必要に応じて保護者と連絡を取り合いながら個別に対応した。

２．授業及び対策講座だけでなく、上位級へ挑戦する学生に対しては担当教員による個別指導を行った。

３．１年次のプレゼミナール、２年次のゼミナールにおいて、地域の課題解決に取り組み、特に公的機関や地域の方々との交流を深めた。キャリアアップセミナーにおいては、企業交流会を各学年３回ずつ実施し、中小企業家同友会会員による模擬面接も各学年で実施した。また、１年生は短大フォーラムに参加し、他短大の学生たちと交流を図った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度入学生３１名のうち、前期当初の段階で残念ながら２名が退学し、１名が休学となった。また、１年生に健康上の理由で長期欠席を余儀なくされた学生が２名、２年生に欠席が多く勉学意欲の低い学生がおり単位取得が危ぶまれたが、チューターを中心にコース内で連携し、各科目担当者や保護者と情報共有を図るなどきめ細やかな対応を行うことで、卒業の目途を立てることができた。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
２年生については、例年に比べて検定試験へ挑戦する意欲が乏しく、目標としていた日商 PC 検定（文書作成）３級及び秘書検定２級全員合格には届かず、取得率はそれぞれ 61.5%（前年度 89.3%）と 38.5%（前年度 78.6%）であった。一方で、意欲がある学生に対する指導によって、初めてビジネス文書検定１級や登録販売者の合格者を出すことができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
ゼミナール・プレゼミナールやキャリアアップセミナーを中心に、地域の方々と交流する機会を多く設けることができているが、実践力の向上を図る活動に関してはまだ不十分なところがある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度に引き続き、合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）

２．学生が入学時に希望している資格・検定の取得の意欲を継続するための方策を立て、卒業時の満足度アップを図る（創造）

３．「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけるとともに、学生の実践力が向上するような指導を心掛ける。（実践）

令和元年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）

2. 多くの学生が入学時に希望している資格・検定の取得をサポートし、卒業時の満足度アップを図る（創造）

3. 在学中の2年間を通して、「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけ、学生の実践力の向上を図り、卒業までの就職内定を支援する（実践）

Do 実行

1. 健康上の理由で欠席が多い等配慮が必要な学生、欠席が多く勉学意欲が乏しい学生については、チューター及び各科目担当者が連携し、必要に応じて保護者と連絡を取り合いながら個別に対応した。

2. 授業及び対策講座だけでなく、上位級へ挑戦する学生に対しては担当教員による個別指導を行った。

3. 1年次のプレゼミナール、2年次のゼミナールにおいて、地域の課題解決に取り組み、特に公的機関や地域の方々との交流を深めた。キャリアアップセミナーにおいては、企業交流会を各学年3回ずつ実施し、中小企業家同友会会員による模擬面接も各学年で実施した。また、1年生は短大フォーラムに参加し、他短大の学生たちと交流を図った。

Check 検証

1. 配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生については、チューターを中心にコース内で連携し、各科目担当者や保護者と情報共有を図るなどきめ細やかな対応を行うことで、卒業の目途を立てることができた。
2. 2年生は、例年に比べて検定試験へ挑戦する意欲が乏しく、目標としていた日商PC検定（文書作成）3級及び秘書検定2級全員合格には届かず、取得率はそれぞれ61.5%（前年度89.3%）と38.5%（前年度78.6%）であった。一方で、意欲がある学生に対する指導によって、初めてビジネス文書検定1級や登録販売者の合格者を出すことができた。
3. ゼミナール・プレゼミナールやキャリアアップセミナーを中心に、地域の方々と交流する機会を多く設けることができているが、実践力の向上を図る活動に関してはまだ不十分なところがある。

Act 改善

1. 今年度に引き続き、合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）

2. 学生が入学時に希望している資格・検定の取得の意欲を継続するための方策を立て、卒業時の満足度アップを図る（創造）

3. 「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけるとともに、学生の実践力が向上するような指導を心掛ける。（実践）

令和元年度　「幼児教育学科」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：織田　芳人（学科長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　新カリキュラムにおける科目名の変更とともに開講時期が変更されたので、各担当者でそれぞれ授業の教育効果等を検討する。

２．　ピアノレッスンの３班分けによるさまざまな弊害が生じてきているので、担当者で２班分けへの改善を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　次年度のシラバス・時間割等の作成時に、各担当者でそれぞれ、新カリキュラムの授業の教育効果等から開講時期等を検討していく。

２．　ピアノレッスンを３班分けから２班分けへ変更するにあたって、障壁となる事案を具体的に洗い出して整理する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
領域の内容に関する科目と指導法の科目とが同一学期に開講されているため、それぞれの授業を進めにくい結果となった科目があった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
２ 班分けを実施するにあたり、時間割そのものも変更する必要があるが、非常勤講師の可能な勤務曜日・時間帯に自由度がほとんどないので、現状では２班分けへの変更が困難であった。また、２班分けを実施した場合は学生の学びを補うため、電子ピアノ等の学修環境の整備が必要であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．令和２年度から、「子どもと健康（体育）」及び「子どもと環境」を前期開講にして、後期の「領域『健康』の指導法」及び「領域『環境』の指導法」へスムーズに接続させることによって、それぞれの領域の教育効果が上がるようにする。

２．令和３年度から、ピアノレッスンを３班分けから２班分けへ変更することを目標にして、引き続き検討を進める。

３．体育関係の授業おいても３班分けから２班分けへの変更を検討する。

４．パソコン関係の授業については、パソコン台数が52台に増えることになったので、令和２年度から３班分けから２班分けへ変更する。

令和元年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1．新カリキュラムに基づく授業の実施

・新カリキュラムにおける科目名の変更とともに開講時期が変更されたので、各担当者でそれぞれ授業の教育効果等を検討する。

2．ピアノレッスンの実施方法の検討

・3班分けによるさまざまな弊害が生じてきているので、担当者で2班分けへの改善を検討する。

Do 実行

1．新カリキュラムに基づく授業の実施

・次年度のシラバス・時間割等の作成時に、各担当者でそれぞれ、新カリキュラムの授業の教育効果等から開講時期等を検討していく。

2．ピアノレッスンの実施方法の検討

・ 3班分けから2班分けへ変更するにあたって、障壁となる事案を具体的に洗い出して整理する。

Check 検証

1．新カリキュラムに基づく授業の実施

・領域の内容に関する科目と指導法の科目とが同一学期に開講されているため、それぞれの授業を進めにくい結果となった科目があった。

2．ピアノレッスンの実施方法の検討

・非常勤講師の可能な勤務曜日・時間帯に自由度がほとんどなく、 2班分けへの変更が困難であった。

・ 2班分けによる学生の学びを補うため、電子ピアノ等の学修環境の整備が必要となった。

Act 改善

1．令和2年度から、領域の内容を前期、指導法を後期に開講して教育効果を上げる。

2．ピアノレッスン、及び、体育関係の授業の3班分けから2班分けへの変更を検討する。

3．パソコン台数が52台に増えることになったので、パソコン関係の授業については令和2年度から3班分けから2班分けへ変更する。

令和元年度　「学生部」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：光武　きよみ（学生部長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。

２．寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。

３．学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．会議やアッセンブリ、行事等にも積極的に参加し、できる範囲での助言や運営委員会への報告を行った。

２．寮務委員会に参加しながら、毎日日誌のチェックを行い、寮生に問題がある場合は、寮務委員長に面談を依頼した。また、時々寮監長とも情報交換を行った。

３．学科コース等の先生方や学生から情報が得られるよう、先生方には協力を依頼し、学生には日ごろから言葉かけを行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　全ての行事等についても、少しずつアドバイスはできた。また各委員会での協議事項を運営委員会で報告したが、詳細についての説明ができない場合があったが、運営について支障はなかった。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　後期に入り２年生数名に生活の乱れが生じたが、大きな問題はなかった。日誌に上がってくる学生については寮務委員長から指導を行ってもらったが、なかなか改善が見られなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　学内および学科内の情報共有や協力体制が取れないため、休退学者が非常に多かった。しかし、学生からの情報はきちんと吸いあげ、面談等で対応できたと考える。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、協議内容を把握して両委員会の円滑な運営に努める。

２．寮における危機管理体制の構築に努め、寮則違反を減少させる。

３．学生に関する情報共有を積極的に行い、休退学者の減少に努める。

令和元年度 学生部 年次報告

Plan　計画

１．教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、両委員会の円滑な運営に努める。

２．寮務委員会の一員として、寮における危機管理体制の構築に努める。

３．学生に関する情報共有を積極的に行い、問題行動の防止に努める。

Do　実行

１．会議やアッセンブリ、行事等にも積極的に参加し、できる範囲での助言や運営委員会への報告を行った。

２．寮務委員会に参加しながら、毎日日誌のチェックを行い、寮生に問題がある場合は、寮務委員長に面談を
　依頼した。また、時々寮監長とも情報交換を行った。
３．学科コース等の先生方や学生から情報が得られるよう、先生方には協力を依頼し、学生には日ごろから言葉かけを行った。

Check　検証

１．全ての行事等についても、少しずつアドバイスはできた。また各委員会での協議事項を運営委員会で報告したが、詳細についての説明ができない場合があったが、運営について支障はなかった。

２．後期に入り2年生数名に生活の乱れが生じたが、大きな問題はなかった。日誌に上がってくる学生については寮務委員長から指導を行ってもらったが、なかなか改善が見られなかった。

３．学内および学科内の情報共有や協力体制が取れないため、休退学者が非常に多かった。しかし、学生からの情報はきちんと吸いあげ、面談等で対応できたと考える。

Act　改善

１．教務委員会、学生委員会と緊密に連携し、協議内容を把握して両委員会の円滑な運営に努める。

２．寮における危機管理体制の構築に努め、寮則違反を減少させる。

３．学生に関する情報共有を積極的に行い、休退学者の減少に努める。

令和元年度　「図書館」年次報告書
区分：　学科専攻　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：森　弘行（図書館長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1.　蔵書・雑誌等の見直し、未利用の古い図書の除籍 2.　「情報館」クラウドのコンテンツ整備、館内 PC の更新 3.　図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
1.　未利用の古い図書の除籍 福祉関連雑誌の見直し 2.　クラウド版情報館への移行に伴いサーバーを廃止、Windows 7 のサポート停止に伴い PC を更新 3.　九州地区、長崎県の大学図書館協議会研修会他、読み聞かせイベント等への参加 学生選定図書の展示 ライブラリーラバーズのクイズラリー実施
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 1.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 除籍図書を長崎県立図書館へ寄贈 福祉系雑誌（幼児教育学科関連を除く）の停止 2.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 問題なく移行完了 3.　自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生１人当たりの図書館利用回数は微減であったが、貸し出し冊数は減少傾向 4/18 九州地区私立短期大学図書館協議会総会（北九州市） 7/19 長崎県大学図書館協議会研修会、３月は中止 8/23 九州地区私立短期大学図書館協議会研修会（福岡市） 障がい者施設や認知症カフェ・高齢者サロンなどでお話会を開催。（伊藤司書 5 回）
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1.　図書館内サービスの改善、利用規定の見直し 2.　図書館ウェブサイトのコンテンツ整備 3.　図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）

令和元年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 蔵書・雑誌等の見直し、未利用の古い図書の除籍
2. 「情報館」クラウドのコンテンツ整備、館内PCの更新
3. 図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）

Do 実行

1. 未利用の古い図書の除籍
   福祉関連雑誌の見直し
2. クラウド版情報館への移行に伴いサーバーを廃止、Windows 7のサポート停止に伴いPCを更新
3. 九州地区、長崎県の大学図書館協議会研修会他、読み聞かせイベント等への参加
   学生選定図書の展示
   ライブラリーラバーズのクイズラリー実施

Check 検証

1. 除籍図書を長崎県立図書館へ寄贈
   福祉系雑誌（幼児教育学科関連を除く）の停止
2. 「情報館」システムのクラウド化、移行完了
3. 学生1人当たりの図書館利用回数は微減であったが、貸し出し冊数は減少傾向
   4/18九州地区私立短期大学図書館協議会総会（北九州市）
   7/19長崎県大学図書館協議会研修会、3月は中止
   8/23九州地区私立短期大学図書館協議会研修会（福岡市）
   障がい者施設や認知症カフェ・高齢者サロンなどでお話会を開催（伊藤司書 5回）

Act 改善

1. 図書館内サービスの改善、利用規定の見直し
2. 図書館ウェブサイトのコンテンツ整備
3. 図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会、長崎県大学図書館協議会と連携）

令和元年度　「自己点検評価室」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．教育の内部質保証と教学マネジメント体制の構築に向けて、各種ＰＤＣＡサイクルの構築、３つの方針の妥当性の検証、学修成果のレベル別（学生個人レベル、授業科目レベル、教育課程レベル、短大機関レベル）の成果検証を実施する。
　また、今年度受審する短大基準協会の認証評価（書面・訪問調査）で適格の評価を得る。

２．学修成果の６つの評価項目を見直し、評価指標や評価基準、ルーブリックなどのアセスメント・ポリシーについて検討する。

３．学務システム機能を追加修正し、学修成果を可視化したディプロマ・サプリメントや学修ポートフォリオの構築について検討する。
　また、IR データを活用したエンロールメント・マネジメント体制を構築する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．６種類のＰＤＣＡサイクルの構築、３つの方針の妥当性の検証、４つの学修成果のレベル別の成果検証を行った。また、認証評価に向けて、自己点検・評価報告書と提出・備付の根拠資料を作成した。

２．学内の FD 研修会を実施し、学修成果の６つの評価項目とアセスメント・ポリシーについて検討した。

３．学務システム機能について、データの入力と学修成果の出力に関する機能を追加修正した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$ ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教育の内部質保証と教学マネジメント体制に関する根拠資料を作成することができ、今年度受審した短大基準協会の認証評価において適格の評価を受けた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・ $\boxed{\text{B}}$ ・Ｃ・Ｄ 」
　学修成果の６つの評価項目とアセスメント・ポリシーについて、2 回の学内 FD 研修会で見直しを開始することができたが、具体的な提案までには至らなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ $\boxed{\text{C}}$ ・Ｄ 」
　IR 推進室と連携して、学修成果を可視化したディプロマ・サプリメントや学修ポートフォリオの構築について具体的に検討することができなかった。また、IR データを活用したエンロールメント・マネジメント体制の構築についても具体的に検討することができなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．本学独自の教学マネジメントのフローチャートを作成し、教学マネジメント体制の実質化と効率化を目指す。

２．学修成果の到達度や学生支援の満足度を評価する各種のルーブリックを開発し、アセスメント・ポリシーの構築を目指す。

３．教務・IR 推進室と連携して、ディプロマ・サプリメントと学修ポートフォリオによる、エンロールメント・マネジメント体制の構築を目指す。

令和元年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1．教育の内部質保証と教学マネジメント体制の構築に向けて、各種ＰＤＣＡサイクルの構築、３つの方針の妥当性の検証、学修成果のレベル別（学生個人レベル、授業科目レベル、教育課程レベル、短大機関レベル）の成果検証を実施する。

また、今年度受審する短大基準協会の認証評価（書面・訪問調査）で適格の評価を得る。

2．学修成果の６つの評価項目を見直し、評価指標や評価基準、ルーブリックなどのアセスメント・ポリシーについて検討する。

3．学務システム機能を追加修正し、学修成果を可視化したディプロマ・サプリメントや学修ポートフォリオの構築について検討する。また、IRデータを活用したエンロールメント・マネジメント体制を構築する。

Do 実行

1．６種類のＰＤＣＡサイクルの構築、３つの方針の妥当性の検証、４つの学修成果のレベル別の成果検証を行った。また、認証評価に向けて、自己点検・評価報告書と提出・備付の根拠資料を作成した。

2．学内のFD研修会を実施し、学修成果の６つの評価項目とアセスメント・ポリシーについて検討した。

3．学務システム機能について、データの入力と学修成果の出力に関する機能を追加修正した。

Check 検証

1．自己評価「S」

教育の内部質保証と教学マネジメント体制に関する根拠資料を作成することができ、今年度受審した短大基準協会の認証評価において適格の評価を受けた。

2．自己評価「B」

学修成果の6つの評価項目とアセスメント・ポリシーについて、2回の学内FD研修会で見直しを開始することができたが、具体的な提案までには至らなかった。

3．自己評価「C」

IR推進室と連携して、学修成果を可視化したディプロマ・サプリメントや学修ポートフォリオの構築について具体的に検討することができなかった。また、IRデータを活用したエンロールメント・マネジメント体制の構築についても具体的に検討することができなかった。

Act 改善

1．本学独自の教学マネジメントのフローチャートを作成し、教学マネジメント体制の実質化と効率化を目指す。

2．学修成果の到達度や学生支援の満足度を評価する各種のルーブリックを開発し、アセスメント・ポリシーの構築を目指す。

3．教務・IR推進室と連携して、ディプロマ・サプリメントと学修ポートフォリオによる、エンロールメント・マネジメント体制の構築を目指す。

令和元年度　「入試広報室・入試委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．定員未充足を続ける生活創造学科の入学者数を回復させる。

２．長崎女子高等学校との連携を深め、入学者数減少傾向に歯止めをかける。

３．進学説明会への積極的参加と、高校生の入学意欲を高めるプレゼンに努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．あらゆる機会を通じ、本学科の特長と奨学事業の採用枠を周知徹底した。
２．進路指導部との面談は７回を数えた。専門学校から本学科への進路変更を強く要請したが、積極的対応は見られなかった。
３．進学説明会に前年以上の参加申込み（延べ 84 会場）を行ったが、年度末の新型コロナウイルス感染症問題に伴い、計 18 会場が中止となった。短大や専門学校がこの時期を新３年生への最も重要な広報時期として位置づけているだけに、大きな痛手となった。本年度推薦出願者の８割強が、当該説明会に参加していることから、本事業の重要性が如何に大きいかを改めて認識する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
本学科のみならず幼児教育学科の志願者数も大幅減少となり、結果、定員割れに繋がった。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
定例４回の訪問を超え、数多くの交流を重ねてきたが、最も依存する当校からの志願者数が大きく減少した。在籍数の多い学年であったが故に影響が大きかった。くらし・しごと両系列と本学生活創造学科の連携が機能していない懸念がある。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
募集広報委員の協力を得ながら、「分野別進学説明会」へ 29 校参加した（前年比△2 校）。入学後の学生生活や、卒業後の自身の姿がイメージ出来るような、興味関心を惹く分かり易いプレゼンに努めた。
昨年に続き、依頼のあった殆どの高校に参加したことで、県内私大の中で説明会への露出は非常に高かった。然しながら前述の通り最も大切な新３年生への情報発信が出来なかったことは大きな課題である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．ビジネス・医療秘書コースに「観光ビジネス系授業」の導入を、栄養士コースには「卓袱試食会」以外の各種イベントを立ち上げ、コースの魅力化を積極発信していくようプロジェクト会議に提言した。
２．長崎女子高３系列と本学３コースの連携強化を図るため、高大連携事業を体系化し、計画的に事業を実行していくとともに、各授業担当者同士の綿密な協議を持つこととした。全ての連携事業において最も大きな募集効果を実現できるよう、教職員の共通意識を醸成したい。
３．エリア外（佐世保市・県外）への参加も、最小限度の範囲内で実施を検討したい。併せて社会人学生募集を推進する方策に着手したい。（ハローワークとの連携等）

令和元年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

1．定員未充足を続ける生活創造学科の入学者数を回復させる。
2．長崎女子高等学校との連携を深め、入学者数減少傾向に歯止めをかける。
3．進学説明会への積極的参加と、高校生の入学意欲を高めるプレゼンに努める。

Do 実行

1．あらゆる機会を通じ、本学科の特長と奨学事業の採用枠を周知徹底した。
2．進路指導部との面談は7回を数えた。専門学校から本学科への進路変更を強く要請したが、積極的対応は見られなかった。
3．進学説明会に前年以上の参加申込み（延べ84会場）を行ったが、年度末の新型コロナウイルス感染症問題に伴い、計18会場が中止となった。短大や専門学校がこの時期を新3年生への最も重要な広報時期として位置づけているだけに、大きな痛手となった。本年度推薦出願者の8割強が、当該説明会に参加していることから、本事業の重要性が如何に大きいかを改めて認識する。

Check 検証

1．本学科のみならず幼児教育学科の志願者数も大幅減少となり、結果、定員割れに繋がった。
2.最も依存する当校からの志願者数が大きく減少した。在籍数の多い学年であったが故に影響が大きかった。くらし・しごと両系列と本学生活創造学科の連携が機能していない懸念がある。
3.入学後の学生生活や、卒業後の自身の姿がイメージ出来るような、興味関心を惹く分かり易いプレゼンに努めた。
昨年に続き、依頼のあった殆どの高校に参加したことで、県内私大の中で説明会への露出は非常に高かった。

Act 改善

1．ビジネス・医療秘書コースに「観光ビジネス系授業」の導入を、栄養士コースには「卓袱試食会」以外の各種イベントを立ち上げ、コースの魅力化を積極発信していくようプロジェクト会議に提言した。
2．長崎女子高３系列と本学３コースの連携強化を図るため、高大連携事業を体系化し、計画的に事業を実行していくとともに、各授業担当者同士の綿密な協議を持つこととした。全ての連携事業において最も大きな募集効果を実現できるよう、教職員の共通意識を醸成したい。
3．エリア外（佐世保市・県外）への参加も、最小限度の範囲内で実施を検討したい。併せて社会人学生募集を推進する方策に着手したい。（ハローワークとの連携等）

令和元年度　「キャリア支援センター」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：原田　実輝（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　就職率100%を目指す。

２．　学生の満足度を上げる、丁寧な就職支援を目標とする。

３．就職支援体制を見直し、システム化できるものは学務システムに移行する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　各学科・コースの年間計画に基づき、ガイダンス、二者・三者面談、模擬面接、企業交流会、就職活動体験報告会、事業主との交流会、卒業生の講話等を行い、学生の就職意識を高める支援を行った。

２．　動きの遅い学生に関しては、学科・コース担当者やチューター、キャリア支援センターと連携して学生の状況を把握し、適切なタイミングで声をかけるように努めた。

３．　キャリア支援センターでは、証明書作成、就職状況総合分析作成、学生の就職活動履歴においてシステムを運用した。また学生には今まで用紙を提出させていた「進路内定届」を直接システムに入力させた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

R2.3.15 現在の全体の就職率は 96.7%で、昨年同期比 0.4 ポイント減である。
S は全員専門就職、Y の資格取得者は全員専門就職であった。
現時点で就職率が昨年比を下回っているのは、Y に資格未取得で一般職希望者が 3 名おり、後期試験終了後から活動し始めているからである。
未就職者は L2 名、Y3 名の計 5 名で、全員が 5 月までに決定するよう支援していく。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

動きの遅い学生への支援は、その学生の状況をよく観察しながら適宜行った。特に動きの遅い学生や、内定取り消しにあった学生への支援等、一人一人の状況に寄り添う支援を心掛けたが、卒業時アンケートの就職に関連する満足度を見ると、全体では昨年度より 0.5 ポイント下がっていた。特に L の満足度が 3.7 と低かったのは、この時点での未就職者数が反映したのではと考えられる。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

システムの開発が遅れた為、初回ガイダンスで学生に説明することができなかった。
その為 L の学生のみ、紙ベースで提出していた「進路内定届」を学務システム上に入力させてみたが、
学生は何度も促さないと入力せず、月末の月別内定者数がシステム上では把握できなかった。
証明書発行に関しては、システムの運用により、かなり時間短縮できた。
学生の面談記録、就職活動履歴などの入力が不十分で、全体的にみると未だ十分にシステムを活用できていない。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　来年度も引き続き就職率100%を目指す。

2.　学務システムの活用や、学科・コース担当者との業務分担を含めた、就職支援体制を見直す。

3　就職先調査の方法を検討する。

令和元年度 キャリア支援 年次報告

Plan 計画

1. 就職率100%を目指す

2. 学生の満足度を上げる、丁寧な就職支援を目標とする。

3. 就職支援体制を見直し、システム化できるものは学務システムに移行する。

Do 実行

1. ・二者・三者面談・履歴書・ESの書き方指導、添削指導
・模擬面接　・企業交流会・面談会の実施・卒業生講演会
・就職活動体験報告会　・就職先訪問　・事業主との交流
・卒業生の集い

2. 動きの遅い学生に関しては、センター、学科コース担当者、チューターと連携して学生個人の状況を把握し、適切なタイミングで声をかけるように努めた。

3.証明書作成、就職状況総合分析、就職活動履歴、進路内定届などはシステムに移行し活用した。

Check 検証

1. 3月15日現在の就職率は96.7%と、前年同期比0.4ポイント減であった。引き続き未決定者5名の支援を行っていく。

2. 一人ひとりに合った支援を行ったが、卒業時アンケートによる就職の満足度は、全体では昨年度より0.5ポイント減。特にLの満足度が3.7と低かったのは、調査時点での内定率が関係していると思われる。

3. システムの開発が遅れた為、学生に活用させるまでには至らなかった。Lの学生にのみ「進路内定届」を入力させてみたが、何度も促さないと入力せず、月別内定者数の把握ができなかった。証明書発行に関しては、かなり時間短縮できた。

Act 改善

1. 次年度も引き続き就職率100%を目指す。

2. 学務システムの活用や、学科・コース担当者との業務分担を含めた就職支援体制を見直す。

3.卒業生調査の方法について検討する。

令和元年度　「ＦＤ・ＳＤ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．【FD 活動について】
①第１回臨時 FD 研修会を 12 月下旬に実施し、
「人材育成構想と学習成果６項目」について検討する。
②第２回定例 FD 研修会を３月中旬に実施し、
「学習成果６項目、アクティブラーニング、アセスメントポリシー、カリキュラムマネジメント体制」について検討する。

２．【SD 活動について】
①第１回定例 FD・SD 研修会を８月下旬に実施し、
認証評価の平成 30 年度「自己点検・評価報告書」について、質疑応答を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．【FD 活動について】
①第１回臨時 FD 研修会を 12 月 23 日（金）10:00～12:00 に実施し、人材育成構想と学習成果６項目について、講演会と討論会を実施した。
②第２回定例 FD 研修会を３月 17 日（火）9:30～12:10 に実施し、「学習成果６項目、アクティブラーニング、アセスメントポリシー、カリキュラムマネジメント体制」について、講演会と討論会を実施した。

２．【SD 活動について】
①第１回定例 FD・SD 研修会を８月 30（金）9:30～14:30 に実施し、認証評価の平成 30 年度「自己点検・評価報告書」について、質疑応答を行った。具体的には、基準Ⅰの建学の精神と教育の効果、基準Ⅱの教育課程と学生支援、基準Ⅲの教育資源と財的資源、基準Ⅳのリーダーシップとガバナンス、について検討した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
【FD 活動について】
ほとんどの教員が２回の FD 研修会に参加し、各学科・コースの教育方針に関する意見交換を活発に行っていた。グループ討議の記録や研修会後のアンケートにも今回のテーマに関する有効で発展的な意見が多く見られた。しかし、実際の問題解決や向上・充実には、今後の日常的で継続的・主体的な各部署での FD 活動が必要であると思われる。

２．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
【SD 活動について】
ほとんどの教職員が SD 研修会に参加し、認証評価の短大評価基準に関する本学の取組の成果や課題について、情報共有と意思統一をすることができたと思う。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．【FD 活動について】
今後は、授業評価アンケートや卒業時アンケートの集計結果を用いた研修会、代表の在学生や就職先の採用担当者等を交えた合同の FD 研修会の開催についても検討していきたい。

２．【SD 活動について】
今後は、技術革新による 2030 年頃の第５次産業革命 Society5.0 を見据えた、新たな短大教育の方向性について検討していくことが、本学の社会的な使命と価値のアピールと生き残りにとって、大変重要である思う。

令和元年度 FD・SD委員会 年次報告

Plan 計画

１．【FD活動について】
①第１回臨時FD研修会を12月下旬に実施し、
「人材育成構想と学習成果６項目」について検討する。
②第2回定例FD研修会を3月中旬に実施し、
「学習成果６項目、アクティブラーニング、アセスメントポリシー、カリキュラムマネジメント体制」について検討する。

２．【SD活動について】
①第1回定例FD・SD研修会を8月下旬に実施し、
認証評価の平成30年度「自己点検・評価報告書」について、質疑応答を行う。

Do 実行

１．【FD活動について】
①第1回臨時FD研修会を12月23日（金）10:00～12:00に実施し、人材育成構想と学習成果６項目について、講演会と討論会を実施した。
②第2回定例FD研修会を3月17日（火）9:30～12:10に実施し、「学習成果６項目、アクティブラーニング、アセスメントポリシー、カリキュラムマネジメント体制」について、講演会と討論会を実施した。
２．【SD活動について】
①第1回定例FD・SD研修会を8月30（金）9:30～14:30に実施し、認証評価の平成30年度「自己点検・評価報告書」について、質疑応答を行った。具体的には、基準Ⅰの建学の精神と教育の効果、基準Ⅱの教育課程と学生支援、基準Ⅲの教育資源と財的資源、基準Ⅳのリーダーシップとガバナンス、について検討した。

Check 検証

１．自己評価「Ａ」
【FD活動について】
ほとんどの教員が2回のFD研修会に参加し、各学科・コースの教育方針に関する意見交換を活発に行っていた。グループ討議の記録や研修会後のアンケートにも今回のテーマに関する有効で発展的な意見が多く見られた。しかし、実際の問題解決や向上・充実には、今後の日常的で継続的・主体的な各部署でのFD活動が必要であると思われる。

２．自己評価「Ｓ」
【SD活動について】
ほとんどの教職員がSD研修会に参加し、認証評価の短大評価基準に関する本学の取組の成果や課題について、情報共有と意思統一をすることができたと思う。

Act 改善

１．【FD活動について】
今後は、授業評価アンケートや卒業時アンケートの集計結果を用いた研修会、代表の在学生や就職先の採用担当者等を交えた合同のFD研修会の開催についても検討していきたい。

２．【SD活動について】
今後は、技術革新による2030年頃の第5次産業革命Society5.0を見据えた、新たな短大教育の方向性について検討していくことが、本学の社会的な使命と価値のアピールと生き残りにとって、大変重要である思う。

令和元年度　「ＩＲ推進室」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：森　弘行（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学務システムの整備と活用の推進 2. 各種アンケート等の Web 化推進 3. Wi-Fi 等の情報環境整備
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
1.　成績票への到達度チャート、GPA 推移グラフ表示など、機能の追加・改善 2.　4 月：入学時アンケート実施 8 月：キャリアステップ（社会人基礎力調査）実施 2 月：卒業時アンケート実施 3.　授業アンケート用無線 LAN アクセスポイント（5 か所）設置
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・B・C・D 」 機能は充実してきているが、操作性の改善などが必要。 学生の面談記録、就職活動履歴、高校訪問記録など、入力を促す必要がある。 2. 自己評価「S・A・B・C・D 」 問題なく実施できたが、スマートフォンの小さな画面では回答しづらいとの意見もあった。 3. 自己評価「S・A・B・C・D 」 無線 LAN アクセスポイントの導入決定時期が遅れ、前期授業アンケートの実施に間に合わなかった。 教室内の場所やスマートフォンの機種によって無線 LAN の通信が厳しい状態がある。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1.　学務システムの整備と活用の推進 2.　各種調査結果の活用 3.　情報環境整備

令和元年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

1. 学務システムの整備と活用の推進
2. 各種アンケート等のWeb化推進
3. Wi-Fi等の情報環境整備

Do 実行

1. 績票への到達度チャート、GPA推移グラフ表示など、機能の追加・改善
2. 4月：入学時アンケート実施
   8月：キャリアステップ（社会人基礎力調査）実施
   2月：卒業時アンケート実施
3. 授業アンケート用無線アクセスポイント（5か所）設置

Check 検証

1. 機能は充実してきているが、操作性の改善などが必要。学生の面談記録、就職活動履歴、高校訪問記録など、入力を促す必要がある。
2. Web調査は、問題なく実施できたが、スマートフォンの小さな画面では回答しづらいとの意見もあった。
3. 無線LANアクセスポイントの導入決定時期が遅れ、前期授業アンケートの実施に間に合わなかった。
   教室内の場所やスマートフォンの機種によって無線LANの通信が厳しい状態がある。

Act 改善

1. 学務システムの整備と活用の推進
2. 各種調査結果の活用
3. 情報環境整備

令和元年度　「教職課程委員会」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：織田　芳人（委員長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．文部科学省の再課程認定に伴う手続き等を円滑に進める。 ３．厚生労働省が今年度中に提示する新保育士養成課程のカリキュラム研究を進める。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．文部科学省の再課程認定に伴う諸証明書の様式変更等を円滑に進める。再課程認定に適応した教員採用を着実に進める。 ２．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報のため、全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得る。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ①「単位修得証明書（学力に関する証明書）」の様式変更等を適切に進めた。 ②後期授業において非常勤講師から担当辞退があったため、本学専任教員への変更を行った。再課程認定に必要な研究業績を整えるため、本学紀要を臨時に増刊する等の対応を行い、新規教員の採用を確実に行った。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ①全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得ることができた。 ②指定保育士養成施設の変更承認申請書を提出する必要が生じたので、申請書を作成して申請した。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．令和元年度から１年生に対して新カリキュラムが適用されたので、令和２年度以降、各担当者でそれぞれ見直した授業を評価して、いっそうの改善を図る。 ２．令和２年度において、必要に応じて、幼児教育学科の保育士資格履修細則新旧対照表に基づく授業科目名・単位数の変更を行う。

令和元年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

1．課程認定

文部科学省の再課程認定に伴う手続きを円滑に進める。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報

厚生労働省が今年度中に提示する新保育士養成課程のカリキュラム研究を進める。

Do 実行

1．文部科学省の再課程認定

再課程認定に伴う諸証明書の様式変更等を円滑に進める。
再課程認定に適応した教員採用を着実に進める。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報

全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得る。

Check 検証

1．文部科学省の再課程認定

①「単位修得証明書（学力に関する証明書）」の様式変更等を適切に進めた。
②後期授業において非常勤講師から担当辞退があったため、本学専任教員への変更を行った。再課程認定に必要な研究業績を整えるため、本学紀要を臨時に増刊する等の対応を行い、新規教員の採用を確実に行った。

2．厚生労働省の新保育士養成課程に関する情報

①全国保育士養成協議会の九州ブロック協議会への参加、保育士養成セミナーへの参加、等によって情報を得ることができた。
②指定保育士養成施設の変更承認申請書を提出する必要が生じたので、申請書を作成して申請した。

Act 改善

1．令和元年度から1年生に対して新カリキュラムが適用されたので、令和２年度以降、各担当者でそれぞれ見直した授業を評価して、いっそうの改善を図る。

2．令和２年度において、必要に応じて、幼児教育学科の保育士資格履修細則新旧対照表に基づく授業科目名・単位数の変更を行う。

令和元年度　「募集・広報委員会」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　オープンキャンパスの動員向上及び生徒、保護者への満足度を上昇させる。

２．SNS を利用した情報発信を開始することで、中高生への志願者囲い込み効果を狙う。

３．予算管理の徹底と、次年度以降の広報媒体の見直しを図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．全ての機会を通して高校、生徒、保護者への参加要請を徹底した。また実施に当たり、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を各コースに要請するとともに、学生スタッフにはホスピタリティーマインドの徹底を依頼した。

２．昨年度後半より教職員による Instagram を一部開始したが、学生目線の観点が必要と考え、急遽アンバサダーによる定期的な情報発信を依頼した。

３．3 月期に予定した「春のキャンパス見学会」を始め、18 会場にも及ぶ進学説明会が全て中止されたことにより、執行率が極めて低い実績となった。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　各項目において、その満足度は上昇したが、結果として動員向上には繋がることなく、全ての項目で参加者数が減少した（実数、延数等）。また本年度の資料請求者が全体的に減少していたが、これに対する事前の対応策を取れなかったことも要因の一つである。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学科ごとの情報発信に差異はあるが、学生の感じる本学の現状を効果的に発信できた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　厳しい節約態勢で臨み過ぎたこともあり、適正な資金投入とは言えなかった。予算の執行にメリハリをつける等次年度に活かしたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．常に資料請求者や、進学説明会参加者数の動向に注視することで、その都度分析・対応していくシステムを築きたい。また経費を伴うが、業者が有する高校生の個人データを取得し直接的な接触を図りたい。また急遽実施した長崎女子高校生からのアンケートより得た高校生の感想を、可能な範囲で取り入れたい。

２．発信すべき情報が浮かび上がってこないので、各コースとの連携を密にしたい。併せて、高校生目線を意識するため、SNS は学生との意見交換を定期的に実施したい。またスマホ版 HP の立ち上げは次年度予算で実施することとしたが、公式 HP 自体のリニューアルも併せて検討したい。

３．「会場型進学説明会」や「校内進路ガイダンス」は参加対象を厳選したので、次年度はこれを踏襲したい。新たな取組み（YouTube 広告）を始めることから、そのランニングコストには、費用対効果の面で細心の注意を払いたい。

令和元年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1．オープンキャンパスの動員向上及び生徒、保護者への満足度を上昇させる。
2．SNSを利用した情報発信を開始することで、中高生への志願者囲い込み効果を狙う。
3．予算管理の徹底と次年度以降の広報媒体の見直しを図る。

Do 実行

1．実施に当たり、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を各コースに要請するとともに、学生スタッフにはホスピタリティーマインドの徹底を依頼した。
2．昨年度後半より教職員によるInstagramを一部開始したが、学生目線の観点が必要と考え、急遽学生による定期的な情報発信を依頼した。

3月期に予定した「春のキャンパス見学会」を始め、18会場にも及ぶ進学説明会が全て中止されたことにより、執行率が極めて低い実績となった。

Check 検証

1．満足度は上昇したが動員向上には繋がることなく、全ての項目で参加者数が減少した。また本年度の資料請求者が全体的に減少していたが、これに対する事前の対応策を取れなかったことも要因の一つである。
2．学科ごとの情報発信に差異はあるが、学生の感じる本学の現状を効果的に発信できた。
3．厳しい節約態勢で臨み過ぎたこともあり、適正な資金投入とは言えなかった。予算の執行にメリハリをつける等次年度に活かしたい。

Act 改善

1．常に資料請求者数等の動向に注視することで、その都度分析・対応したい。また業者が有する高校生の個人データを取得し直接的な接触を図りたい。
2．高校生目線を意識するため、SNSは学生との意見交換を定期的に実施したい。またスマホ版HPの立ち上げは次年度予算で実施することとしたが、公式HP自体のリニューアルも併せて検討したい。
3．新たな取組み（YouTube広告）を始めることから、そのランニングコストには、費用対効果の面で細心の注意を払いたい。

令和元年度　「紀要・図書委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：中村　浩美（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．昨年度さらに減少した図書館利用者の増加をめざす。取り組みとしてスタンプカードを作成し、ポイントが溜まった場合に品物と変換する。また、授業の一環で学生が利用できる取り組みを教員に協力してもらう。

２．紀要について、掲載内容・執筆要綱と電子公開などについて平成 30 年度同様とする。発行のタイムスケジュールも平成 30 年度と同様とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．運営委員会および教授会において、授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうようお願いする。また、学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。

２．教員へはメールにて投稿を呼びかけ、６月頃に教授会等で周知し、10 月頃投稿を希望する教員を調査し、12 月頃に業者へ見積もりを依頼する。１月の初旬頃に投稿１回目を締め切り、3 月初旬に完成予定

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

＊今年度の図書入館者数→学生 7294 名、教職員 1180 名、学外 280 名
＊今年度の貸し出し数→学生 2975 冊、教職員 690 冊、学外 20 冊
上記の数は昨年度より少しではあるが減少している。
理由としては介護福祉コースが閉じられたため、入館者数も貸し出し数も減少思われる。
また、入館者数を増やすためと、読書離れした学生が本に親しむきっかけ作りのスタンプリレーのプランを実行できず、新しい試みで学生の興味をひくことができなかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

今年度も紀要は例年通りの時期に加えて再課程認定が関係し、夏季に第 44 号を作成する事となった。投稿数は 6 件であった。第 45 号となった紀要は、投稿者の提出期限が守られなかった事、業者の都合で 2 月末日発行の予定が 3 月上旬になった事が問題点であった。他の問題が見られなかったのは、教職員の協力があったことによると思われる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　入館者数の増加対策を実施する。具体的には①授業での図書館利用の推進、②学生が図書館を利用するシステム作り、③図書館利用者増へのイベント実施などを実施する。

２．　投稿の呼びかけと、提出期限厳守、執筆に注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

令和元年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

〇学生の図書への興味や専門書での学習意識を高め、利用者数を増やす。
〇授業内でもりようできる取り組みを教員にも強力して
もらう。
〇紀要の円滑な発行を目指す。執筆要綱と電子公開　　のルールついては平成30年度同様とする。また、紀要発行のタイムスケジュールについても平成30年度と同様とする。

Do 実行

1. 授業関係で図書館での学びも取り入れてもらうよう教授会等でお願いする。学内の電子掲示板で、月ごとに図書館からのお知らせや、新刊案内を掲載し利用者数増加の成果をねらう。

2. 教員へは教授会およびメールにて投稿を呼びかける。1月の中旬連休明けに投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

Check 検証

1. 2018年度と比較して少し減少してしまった。理由として介護福祉コースが閉じられた事で学生数、教員数共に減った事や、学生の本離れがさらに増えてきた事と思われる。
2. また、図書館の利用者数と貸し出し数の増加に繋がるための、新たな試みを行う事ができなかった。
3. 2019年度第44号紀要は6件、第45号紀要は18件合わせて24件と、昨年の25件とあまり変わらなかった。紀要の編集に関しては、提出期日の問題や業者に対しての問題はあったが、他には特に問題は見られなかった。これは教職員の協力があったことによると思われる。

Act

1. 入館者数の増加対策を実施する。具体的には下記の内容を実施する。
   1. 授業での図書館利用の推進
   2. 学生が図書館を利用するシステム作り
   3. 図書館利用者増へのイベント実施などの実施

2. 投稿の呼びかけと、提出期限、執筆に注意・喚起を促す。執筆要綱、電子公開については本年同様とする。

令和元年度　「教務委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：山口　ゆかり（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生による授業評価アンケートの実施方法（Ｗｅｂ調査）を再検討する。
２．履修状況とシラバスを参考に、基礎科目を見直す。
３．シラバスの更なる充実とチェックの徹底を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．４月の教務委員会において実施要項(案)を検討し、５月の教授会に諮る。また、後期は、前期の実施状況を振り返り、必要に応じて改善を行う。
２．６月の教務委員会において開講科目を検証し、必要があれば運営委員会に検討(案)を上程する。
（ただし、幼児教育学科は、カリキュラム変更の申請時期が前年度９月となっているため、７月の教授会に諮る必要がある。）
見直しにあたり、教務課は、５月 10 日までに過去５年間の履修状況を一覧表にまとめ、教務委員に報告する。また、教務委員は、一覧表を基に学科・コースの意見をまとめ、教務委員会に備える。
３．シラバスの作成要領は、2019 年度私立大学等改革総合支援事業調査票（タイプ１）を基に改訂し、10 月の教授会に諮る。また、シラバスは、スケジュールに沿って作成・チェック・修正を行い、３月中旬には本学のＷｅｂサイトで公開する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
Ｗｅｂ方式による授業評価アンケートは、実施要項を５月の教授会に諮り、前期より実施した。学科・コース別の回答率は表１のとおりで、その平均は、前期 98.8%、後期 98.7%であった。大きなトラブルなく実施できたのは、授業時の趣旨説明、終業ガイダンスでの呼びかけ、無線ＬＡＮアクセスポイントの整備などが影響したと考える。年度末の会議において、調査期限は追・再試験最終日が適しており、教職員からの呼びかけが欠かせないことを確認した。また、今後は、個人の授業評価報告書作成に加えて、学生の学修意識の向上と教員の授業改善に向けた組織的な結果分析が必要であると感じた。

表１　令和元年度・Ｗｅｂ方式による授業評価アンケートの回答率　　(%)

	栄養士コース		ビジネス・医療秘書コース		幼児教育学科	
	１年生	２年生	１年生	２年生	１年生	２年生
前期	100	97	99	100	98	99
後期	100	100	99	98	96	99

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
カリキュラムの見直しについては、認証評価後の特色化推進プロジェクト会議立ち上げとともに検討が進み、授業科目表の決定が 12 月の教授会にずれ込んだ。基礎科目ついては、幼児教育学科（令和２年度生）に５つの未開講科目があるため、次年度は生活創造学科の開講科目を含め、早期の検討が必要となる。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度のタイプ１には、シラバス作成に関する新規事項がなかったため、作成要領は２点（①授業区分の追加、②実務家教員用にも受講生へのメッセージを追加）のみ変更し、３月中旬頃のＷｅｂ公開を目標にスケジュールを組んだ（10 月教授会で承認）。各学科・コースともカリキュラムの見直しに時間を要した関係から、作成依頼が１月上旬にずれ込んだが、作成、チェック、訂正期間の短縮により、例年どおりの日程で公開が可能となった。なお、シラバスチェックでは、新設科目と複数担当科目の訂正が目立った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．ＦＤ活動の中で、組織的な結果分析を行うとともに、結果の公開方法を検討する。
２．基礎科目について、開講科目の見直しを早期に実施する。
３．新設科目と複数担当科目のシラバスは、学科・コースで協議のうえ、要領に準じて作成する。

令和元年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

1．学生による授業評価アンケート実施方法（Ｗｅｂ調査）を再検討する。

2．履修状況とシラバスを参考に、基礎科目を見直す。

3．シラバスの更なる充実とチェックの徹底を目指す。

Do 実行

1．４月の教務委員会において実施要項を検討し、５月の教授会に諮る。
後期は、前期を振り返り、必要に応じて改善を行う。

2．６月の教務委員会において開講科目を検証する。
教務課は、過去５年間の履修状況一覧を作成する。
教務委員は、学科・コースの意見をまとめる。

3．タイプ１の調査票を基に作成要領を改訂する。
スケジュールに沿って業務を遂行し、３月中旬のＷｅｂ公開を目標とする。

Check 検証

1．実施要項は、５月の教授会で承認を受け、前期よりＷｅｂ調査を実施した。
回答率は、前期98.8%、後期98.7%であった。
調査期限は追・再試験最終日とし、呼びかけが欠かせない。

2．カリキュラムの見直しは、特色化推進プロジェクト会議の立ち上げと共に進み、授業科目表の決定が遅れた（12月教授会）。
幼児教育学科（令和２年度生）の基礎科目に、５つの未開講科目があるため、開講科目を精査した方が良い。

3．タイプ１に新規事項はなかった。
要領の変更点：①授業区分の追加
②実務家教員用にメッセージを追加
作成依頼が１月上旬にずれ込んだものの、情報公開は例年どおり実施できた。
新設科目と複数担当科目の訂正が目立った。

Act 改善

1．ＦＤ活動の中で、組織的な結果分析を行い、学生の学修意識の向上と教員の授業改善に役立てる。

2．基礎科目について、開講科目の見直しを早期に実施する。

3．新設科目と複数担当科目のシラバスは、学科・コースで協議のうえ、要領に準じて作成する。

令和元年度　「学生委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：古賀　克彦（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。
2. 学友自治会活動に関する指導･援助は、教職員全員が学友自治会行事に関わることができるように配慮する。
3. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。
4. アッセンブリは「学友自治会活動の時間」ということを徹底し、学科コース行事と重ならない配慮を各主任に要請する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 入学記念パーティ、総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙については、各担当に分かれて学生の主体性を尊重し実施した。卒業記念パーティに関しては新型コロナウイルス流行の影響で残念ながら実施できなかったが、中止が決まる直前まで準備を行った。
2. 教職員に対しては、スポーツフェスタや弥生祭への参加依頼を事務局掲示板・教授会・メール等で積極的に行い、多くの方に参加してもらった。
3. 学友自治会役員から担当教員への報告・連絡・相談については、できない役員が存在した。また、学友自治会役員内のコミュニケーション不足があり、学生委員教職員が指導を行うこともあった。
4. 各学科・コースでアセンブリの時間を学友自治会の活動として確保を行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
各行事の準備や実施に関して、学友自治会内での学生の連携・連絡が不足している事態が存在したが、学生委員の教職員の指導や援助があり本番は問題なく実施できた。学生主体で学友自治会行事を実施・運営させるためには、学友自治会学生に対する教職員の指導方法を見直す必要があると思われた。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
ほとんどの行事において多くの教職員に参加して頂いた。今後はこの状態を続けていくために、引き続き教職員に対し学友自治会活動の説明や参加依頼を行っていきたい。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ⓒ・Ｄ 」
今年度の学友自治会はまとまりに欠ける部分が見られた。初期の段階でチームワークを醸成する働きかけがもっと必要であった。次年度に向けては、11 月の役員選挙を見直し、学科コースの人数配分の見直しをおこなった。今後も新役員の指導や定例的なミーティングを実施していきたい。

４．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
アッセンブリの時間は学友自治会活動の為に適切に利用された。今後もこの状態が続くように、教職員や学生の為に依頼を行っていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学友自治会役員やその他学生が自主的に行動できる指導方法を考え実践する。
２．役員学生や一般学生が主体的に学友自治会活動をするための方策を考え、説明・指導を行う。
３．学友自治会内のチームワークや、教職員とのコミュニケーション能力を高める。
４．学友自治会活動の重要性を継続的に教職員に伝えていく

令和元年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。
2. 学友自治会活動に関する指導・援助は、教職員全員が行事に関わることが出来るように配慮する。
3. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。
4. アッセンブリは「学友自治会活動の時間」ということを徹底し、学科コース行事と重ならない配慮を各主任に要請する。

Do 実行

1. 入学記念パーティ、総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙については、各担当に分かれて学生の主体性を尊重し実施した。
2. 教職員に対しては、スポーツフェスタや弥生祭への参加依頼を事務局掲示板・教授会・メール等で積極的に行い、多くの方に参加してもらった。
3. 学友自治会役員から担当教員への報告・連絡・相談については、できない役員が存在した。
4. 各学科・コースでアセンブリの時間を学友自治会の活動として確保を行った。

Check 検証

1. 各行事の準備や実施に関して、学友自治会内での学生の連携・連絡が不足している事態が存在したが、学生委員の教職員の指導や援助があり本番は問題なく実施できた。
2. ほとんどの行事において多くの教職員に参加して頂いた。
3. 今年度の学友自治会はまとまりに欠ける部分が見られた。初期の段階でチームワークを醸成する働きかけがもっと必要であった。次年度に向けては、11月の役員選挙を見直し、学科コースの人数配分の見直しをおこなった。
4. アッセンブリの時間は学友自治会活動の為に適切に利用された。今後もこの状態が続くように、教職員や学生の為に依頼を行っていきたい

Act 改善

1. 学友自治会役員やその他学生が自主的に行動できる指導方法を考え実践する。
2. 役員学生や一般学生が主体的に学友自治会活動をするための方策を考え、説明・指導を行う。
3. 学友自治会内のチームワークや、教職員とのコミュニケーション能力を高める。
4. 学友自治会活動の重要性を継続的に教職員に伝えていく。

令和元年度　「障がい学生支援委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：光武　きよみ（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　合理的配慮事項申請書の提出後、配慮が必要な学生を選別して各学科コースへの情報提供に努める。

２．　それぞれの配慮事項を把握して対応が行えているか、また他に気になる学生がいないか確認し、配慮事項の追加などを随時行っていく。

３．学生に問題が生じた場合は、各学科・コースなど関係教職員で対応し、後日委員会で報告を行うよう努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．年度初めに回収した合理的配慮申請書を早目に整理し、委員会を通して各学科コースに一覧表での配布を行った。情報と配慮事項の共有に努めた。
２．できる範囲での配慮が行えているか、定期会議にて確認を行った。また新規に配慮が必要な学生が出た場合は、その学生の疾患や障がいの種類、配慮事項などの報告をお願いした。
３．休学・退学等問題が発生し緊急を要する場合は、学科コースで対応してもらい、その後報告をお願いする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
年度当初、配慮事項の確認と面談を行い、中旬には一覧表を作成して各学科コースに配布した。その後「授業で配慮が必要な学生について」のお願いということで、非常勤の先生方とも情報共有や配慮ができた。しかし、年度当初の申請書の回収が１度では済まず、数回の呼びかけが必要であった。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
年間４回の会議予定であったが、認証評価の関係で３回の会議となった。やはり、申請をしていない障害を抱えた学生が数名いたが、会議の中で情報共有はできた。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度の休退学者は申請 33 名中３名。２名はアレルギー性疾患、１名は適応障害であった。問題がある学生は学科コースで対応していただき、報告等も行っていただいた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　新１年生の場合は、入学前の課題郵送の際に同封して、入学前に情報の整理ができ、年度当初に学生の情報共有ができるよう努める。(２年生は４月初め)
２．　申請をしていない障害を抱えた学生を早期に把握し、委員会メンバーで情報の共有を行い学生生活に配慮できるよう努める。
３．障害を抱えた学生の配慮を行い、休退学者の減少に努める。

令和元年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1．合理的配慮事項申請書の提出後、配慮が必要な学生を選別して各学科コースへの情報提供に努める。

2．それぞれの配慮事項を把握して対応が行えているか、また他に気になる学生がいないか確認し、配慮事項の追加などを随時行っていく。

3．学生に問題が生じた場合は、各学科・コースなど関係教職員で対応し、後日委員会で報告を行うよう努める。

Do 実行

1．年度初めに回収した合理的配慮申請書を早目に整理し、委員会を通して各学科コースに一覧表での配布を行った。情報と配慮事項の共有に努めた。
2．できる範囲での配慮が行えているか、定期会議にて確認を行う。また新規に配慮が必要な学生が出た場合は、その学生の疾患や障がいの種類、配慮事項などの報告を行う。
3．休学・退学等問題が発生し緊急を要する場合は、学科コースで対応してもらい、その後報告をお願いする。

Check 検証

1．年度当初、配慮事項の確認と面談を行い、中旬には一覧表を作成して各学科コースに配布した。その後「授業で配慮が必要な学生について」のお願いということで、非常勤の先生方とも情報共有や配慮ができた。しかし、年度当初の申請書の回収が1度では済まず、数回の呼びかけが必要であった。

2．年間4回の会議予定であったが、認証評価の関係で3回の会議となった。やはり、申請をしていない障害を持った学生が数名いたが、会議の中で情報共有はできた。申請はないが配慮が必要な学生については、どのようにしていったらよいのか今後の課題とする。

3．今年度の休退学者は申請33名中3名。2名はアレルギー性疾患、1名は適応障害であった。問題がある学生は学科コースで対応していただき、報告等も行っていただいた。

Act 改善

1　新1年生の場合は入学前の課題郵送に同封して入学前に情報の整理ができ、年度当初に学生の情報共有ができるよう努める。（2年生は4月初め）

2．申請をしていない障害を抱えた学生を早期に把握し、委員会メンバーで情報の共有を行い学生生活に配慮できるよう努める。

3．障害を抱えた学生の配慮が行えて、休退学者の減少に努める。

令和元年度　「学生相談室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：福井　謙一郎（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．　各学科コースとの情報共有を充実させる ２．　学生相談室の広報を充実させる
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　各学科コースからは適宜必要な情報を障がい学生支援委員会にて共有した。 ２．　オリエンテーション時の説明内容を改善した。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 障がい学生支援委員会の存在により、各学科コースとの連携や情報共有が非常にスムーズに執り行うことができ、また対策も立てやすかった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 オリエンテーション時の説明内容を、作成しなおしたMAP等を活用して改善したが、学生の意識がどの程度高まったのかは不明である。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　配慮を要する学生の情報共有と支援の在り方の話し合いをスムーズに行う。 ２．　学生相談室の広報用パンフレットを作成する。

令和元年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

1． 各学科コースとの情報共有を充実させる

2． 学生相談室の広報を充実させる

Do 実行

1． 各学科コースからは適宜必要な情報を障がい学生支援委員会にて共有した。

2． オリエンテーション時の説明内容を改善した。

Check 検証

1． 自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
障がい学生支援委員会の存在により、各学科コースとの連携や情報共有が非常にスムーズに執り行うことができ、また対策も立てやすかった。

2． 自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
オリエンテーション時の説明内容を、作成しなおしたMAP等を活用して改善したが、学生の意識がどの程度高まったのかは不明である。

Act 改善

1． 配慮を要する学生の情報共有と支援の在り方の話し合いをスムーズに行う。

2． 学生相談室の広報用パンフレットを作成する。

令和元年度　「食品加工研究センター」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：橋口　亮（センター長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．食品加工センターとして何ができるか検討する。 ２．卒業研究において加工食品に関するテーマを入れ、学生と共にできることを検討する。 ３．学校行事や授業などで加工食品を提供する。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．食品加工センターに期待されていることやできることを考える。 ２．長崎県産の農水畜産物を原料とした加工食品を検討する。 ３．オープンキャンパス、公開講座、長崎食育学などで加工食品を提供する。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 加工センターに期待されていることが明確ではなく、目的が不明なため、取り組みを具現化することができなかった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 卒業研究において、少し手を加えたカステラの検討ができた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 公開講座、関係高校連絡協議会などでカステラを提供できた。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
退官のため、記載しない。

令和元年度 食品加工研究センター　年次報告

Plan 計画

1.　食品加工センターとして何ができるか検討する。

2．卒業研究において加工食品に関するテーマを入れ、学生と共にできることを検討する。

3．学校行事や授業などで加工食品を提供する。

Do 実行

1．食品加工センターに期待されていることやできることを考える。

2．長崎県産の農水畜産物を原料とした加工食品を検討する。

3．オープンキャンパス、公開講座、長崎食育学などで加工食品を提供する。

Check 検証

1. 加工センターに期待されていることが明確ではなく、目的が不明なため、取り組みを具現化することができなかった。

2．卒業研究において少し手を加えたカステラの検討ができた。

3．公開講座、関係高校連絡協議会においてカステラの提供ができた。

Act 改善

退官のため、記載しない。

令和元年度　「地域連携推進センター」年次報告書
区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）
氏名：荒木　正平（センター長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．公開講座については、地域のニーズを把握し、講座内容や広報の改善を図り、参加者増につなげる。 ２．各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業等が円滑に実施されるよう、学内全体としての取り組みを推進する。 ３．ボランティア担当委員を配置し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を整える。
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．各種媒体を活用し効果的な広報活動が実施できた。平均参加率も前年度より上昇しており、地域ニーズの把握の結果が効果的に活用されたものと考える。 ２．学内全体での取り組みの推進に向けた実践として、PC 上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備を進めることができた。 ３．担当委員の配置により、受付対応・学生への呼びかけ用についてもこれまで以上にスムーズな体制での実施ができたと考える。
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各講座の報告書からは、参加者の満足度の高さがうかがえる。前年度までと同様、地域からの信頼も得られており、地域に貢献できる短大運営に資することができていると考える。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 公開講座の満足度の高さにもみられる通り各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業の内容については、充実したものとなっている。取組推進のための体制づくりと定着が課題となる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 募集団体側の事情や天候の影響、学内の日程調整上の理由などにより、学生のボランティア参加が難しい企画がいくつかあった。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　地域のニーズ把握の精緻化と、講座間の参加人数のばらつきへの対応を今後の課題として挙げておきたい。 ２．上述の通り、課題としては、学内全体としての取組推進体制の定着である。関係教職員の協力を得つつ、各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業の内容については、地域のニーズに即した形で引き続き充実したものを提供できるよう取り組みたい。 ３．募集側の理由による企画中止等のやむを得ない事情を除いては、希望学生が可能な限り参加できるよう調整が可能な企画については調整を行いたい。また、学生の参加の呼びかけもより効果的な形があれば実施したい。

令和元年度 地域連携推進センター 年次報告

Plan 計画

１．公開講座については、地域のニーズを把握し、講座内容や広報の改善を図り、参加者増につなげる。

２．各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業等が円滑に実施されるよう、学内全体としての取り組みを推進する。

３．ボランティア担当委員を配置し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を整える。

Do 実行

１．各種媒体を活用し効果的な広報活動が実施できた。平均参加率も前年度より上昇しており、地域ニーズの把握の結果が効果的に活用されたものと考える。

２．学内全体での取り組みの推進に向けた実践として、PC上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備を進めることができた。

３．担当委員の配置により、受付対応・学生への呼びかけ用についてもこれまで以上にスムーズな体制での実施ができた。

Check 検証

１．自己評価　A
各講座の報告書からは、参加者の満足度の高さがうかがえる。前年度までと同様、地域からの信頼も得られており、地域に貢献できる短大運営に資することができていると考える。

２．自己評価　A
公開講座の満足度の高さにもみられる通り各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業の内容については、充実したものとなっている。取組推進のための体制づくりと定着が課題となる。

３．自己評価　A
募集団体側の事情や天候の影響、学内の日程調整上の理由などにより、学生のボランティア参加が難しい企画がいくつかあった。

Act 改善

１．地域のニーズ把握の精緻化と、講座間の参加人数のばらつきへの対応を今後の課題として挙げておく。

２．課題は、学内全体としての取組推進体制の定着である。関係教職員の協力を得つつ、各学科・コースの特色を生かした地域連携活動やプラットフォーム事業の内容については、地域のニーズに即した形で引き続き充実したものを提供できるよう取り組みたい。

３．募集側の理由による企画中止等のやむを得ない事情を除いては、希望学生が可能な限り参加できるよう調整が可能な企画については調整を行いたい。また、学生の参加の呼びかけもより効果的な形があれば実施したい。

令和元年度　「地域子育て支援センター」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　公開講座の内容の見直しを図り、充実した親子の触れ合いの場づくりに努める。

２．　他大学とも連携を図り、「親育ち講座」の内容の充実を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．９月は、前年度と 同じ講座内容で提示方法を変え（紙芝居形式）、２月はSNS と子育ての内容を取り入れてみた。また、親子遊びも新たな遊び（タオルを使ったもの）を取り入れるなど試みた。

２．　親育ち講座を立ち上げた当初にかかわっていた、長崎短期大学の滝川講師が開講することにより、他大学と連携をとる機会を設けた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　参加者のアンケートに「何度聞いてもよい」「改めて考える機会となった」などの記述が見られた。講座のやり方を変更したり内容を新たなものにしたりすることで、複数回参加している親子にとっても得るものの大きい講座になったと思われる。様々な内容の要望が見られたので、それらを取り入れることが必要であると思われる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　受講者アンケートから、今年度も非常に好評だったことが分かった。他大学の講師の参加により受講者は新たな刺激を得られる。内容理解も進むと思われる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　アンケートから、子育て中の保護者の求めるものを把握し、楽しくためになる講座内容を模索する。

２．　講座内容の一層の充実を図る。

令和元年度 地域子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

１．公開講座の内容の見直しを図り、充実した親子の触れ合いの場づくりに努める。

２．他大学とも連携を図り、「親育ち講座」の内容の充実を図る。

Do 実行

１．9月は、前年度と同じ講座内容で提示方法を変え（紙芝居形式）、2月はSNSと子育ての内容を取り入れてみた。また、親子遊びも新たな遊び（タオルを使ったもの）を取り入れるなど試みた。

２．親育ち講座を立ち上げた当初にかかわっていた、長崎短期大学の滝川講師が開講することにより、他大学と連携をとる機会を設けた。

Check 検証

１　参加者のアンケートに「何度聞いてもよい」「改めて考える機会となった」などの記述が見られた。講座のやり方を変更したり内容を新たなものにしたりすることで、複数回参加している親子にとっても得るものの大きい講座になったと思われる。様々な内容の要望が見られたので、それらを取り入れることが必要であると思われる。

２　受講者アンケートから、今年度も非常に好評だったことが分かった。他大学の講師の参加により受講者は新たな刺激を得られる。内容理解も進むと思われる。

Act 改善

１．アンケートから、子育て中の保護者の求めるものを把握し、楽しくためになる講座内容を模索する。

２．講座内容の一層の充実を図る。

令和元年度　「寮務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．安全・快適な寮生活の提供を図る。
２．　寮務委員及び関係教職員の情報共有を密にし、支援体制の充実を図る。
３．高大連携による寮運営の充実を図る。
４．寮内での省エネルギー推進に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．①設備改善：各階非常ロドアノブ取り付け・玄関内外及び食堂のLED化・トイレの水洗レバーからの水漏れにより部品交換・寮棟西側避難経路周辺樹木の伐採・ ロビー床張り替え・網戸外れの修正・浴室及び洗面所のタイル補修・大浴場シャワーホース取り換え・1・2Fコンセント修理等

②食事改善：6月よりパン1個追加で木はゆで卵付き、水の飯食時は納豆付き→10月より毎パン食時にゆで卵、毎飯食時に納豆又はふりかけ付きとなった。

③学生指導：他人と適切な距離がとれない、ルールが守られていない等の理由による学生からの相談に対し、当事者との個人面談を行った。さらに、前期終了時に各学年集会を開き、寮生活の再確認を行った。

２．毎日丁寧に記入された寮務日誌に、学長、事務局長、学生部長、寮務委員長が目を通して内容を確認し、支援が必要と考えられる場合に連絡を取り合って行動にあたった。

３．長崎女子高の林田教頭と三根事務長に可能な限り寮務委員会に出席してもらい、年度初めには女子高の女性教員に寮を見学してもらって、生徒の生活の様子を把握する機会を設けた。また、寮務日誌を毎日FAXで女子高に送り指導が必要な生徒に即対応できるようにした。一方、月一開催の学生による代表者会議に、後期から高校生の寮長・副寮長にも参加させ、互いの思いを直接伝えることができるようにした。

４．寮生全員に省エネへの協力を促し、特に寮費減免の寮生には、個人での毎月の取り組みを所定の用紙へ記入し寮監へ提出することを促した。また、寮のみの電気使用量が分かるよう、メーターを設置した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

①　設備の改善は予算の関係があるものの、細やかに対応していると思われる。ただ、施設の老朽化が進んでいるため対応してもすぐに次の不具合箇所が出てくる。来年度はトイレの洋式化が計画されているが、そのほかの部分で今後もこまめに対応が必要である。②食事はかなり改善が図られており、食費の値上げに伴い来年度さらに改善がなされると思われる。シダックスと密に連絡を取り、女子学生にとっておいしく健康的な食事をさらに模索したいと考える。③周囲の寮生から苦情が出たり、ルール違反が続く学生に関しては個別に指導を試みた。大きなトラブルや問題に発展することはなかったことからそれなりの効果があったと考える。しかし、不注意で門限を守れなかったり点呼・清掃に消極的であったりなどのルール違反はたびたび見られ、寮監からの注意や始末書提出も続いていた。特に執行部が交代した後期から2年生のルール違反がよく見られた（延べ18件）。執行部交代後に集会を開くなどして、学生の気を引き締める必要がある。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

寮務委員のみならず、チューター、学科・コースの他教員、短大職員等皆で寮生を支えるといった意識を持つことが大切と考える。日常的に寮生の生活の様子を学科・コースで把握するよう呼びかけたい。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

日誌を高校にFAXすることで高校寮生への指導が速やかに行われ生活の改善が見られていた。また、執行部だけでも短大と高校の寮生が顔を合わせることで、ただ不満を出すだけで終わらず互いにどう生活するべきかという話がなされていた。両者が一緒に生活しているという意識を持てるような機会を用意することが必要であると思われる。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」

学生の省エネに対する意識に差がある。具体的に電気使用量の月ごとの変化を伝えるなどして、学生の取り組みがどのような効果を生み出しているのか知らせることが必要ではなかろうか。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．寮務委員及び関係教職員の情報共有による支援体制を充実させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。
２．高大連携による寮運営の充実を図る。

令和元年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1．安全・快適な寮生活の提供を図る。
2．寮務委員及び関係教職員の情報共有を密にし、支援体制の充実を図る。
3．高大連携による寮運営の充実を図る。
4．寮内での省エネルギー推進に努める。

Do 実行

1，LED化等の設備改善、朝食の改善、迷惑行為ルール違反をした学生への指導を行った。
2，寮務日誌をもとにした教職員間の連携により、学生指導を行った。
3，高校へ寮務日誌をFAXしたり短大・高校寮生の代表者会議を行った。
4寮費減免生の省エネ取組報告の実施及び寮のみ，電気メーターの設置を行った。

Check 検証

1，設備の不具合、学生のルール違反等快適な集団生活に支障をきたすもの（こと）が浮上した場合、即対応を心がけた。こまめに続ける必要がある。
2，寮務委員以外の教職員が寮生や寮生活に関心が持てるようにすべきである。
3，高校での指導が速やかに行われている。高校生、短大生の距離を縮めることが大切である。
4，省エネへの取組の効果を学生に伝え、意識を高めることが必要である。

Act 改善

1，寮務委員及び関係教職員の情報共有による支援体制を充実させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。
2，高大連携による寮運営の充実を図る。
3，領内での省エネルギー推進に努める。

令和元年度　「事務局」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：前田　功（事務局長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．施設設備の充実 ２．教務システムの完成 ３．個々の事務適応能力の習得とそのレベル向上
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　年度の当初に、施設・設備の状況を把握し計画的に見直しを進めていくことと予期しない施設・設備の更新等に柔軟に対応していく ２．システム開発企業との連携を強化し、常に情報交換を行い早期のシステム完成をめざす ３．ＳＤ研修の計画的な実施を図るために、事務職員個々の知識習得と一人で複数の部署を担当できる能力の育成を図る
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 執行計画計上分については、計画通りの実行がなされた。また計上分以外のものにおいても、緊急度合に応じた予算の執行がなされ、新年度早々からの利用が可能となった。情報演習室ＩのＰＣ更新など。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 相変わらずシステム開発先のノウハウに問題なしとはしなかったが、少しずつではあるが本学の修正事項に即した対応が図られていた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 なかなかＳＤ研修会の計画的な実施までは届いていないが、要員の不足から一人二役をこなす体制づくりが進行しつつある。今後も進めていきたい。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．　計画通りの執行ができた。それ以外の計画に計上していなかった事案についても善処できたが、今後は可能な限り計画に計上していくこととする。 ２．教務システムの完成を目指していくことは無論のこと、システム再構築に向けた方向性の再検討を行うことも考えていく。 ３．事務職員のレベル向上は欠かせないので、一人二役体制の完成を目指すとともに、ＳＤ研修の計画的な実施を図っていく。

令和元年度 事務局 年次報告

Plan 計画

1．施設設備の充実

2．教務システムの完成

3．個々の事務適応能力の習得とそのレベル向上

Do 実行

1．年度の当初に、施設・設備の状況を把握し計画的に見直しを進めていくことと予期しない施設・設備の更新等に柔軟に対応していく

2．システム開発企業との連携を強化し、常に情報交換を行い早期のシステム完成をめざす

3．ＳＤ研修の計画的な実施を図るために、事務職員個々の知識習得と一人で複数の部署を担当できる能力の育成を図る

Check 検証

1．執行計画計上分については計画どおりの実行がなされた。また計上分以外のものにおいても、緊急度合に応じて予算の執行がなされ、新年度早々からの利用が可能になった。情報演習室Ｉのｐｃ更新など。

2．相変わらずシステム開発先のノウハウに問題がないわけではなかったが、少しずつではあるが本学の修正事項に走駆した対応が図られていた。

3．ＳＤ研修の計画的な実施を図るために、事務職員個々の知識習得と一人で複数の部署を担当できる能力の育成を図る

Act 改善

1．計画通りの執行ができた。それ以外の計画に計上していなかった事案についても善処できたが今後は可能な限り計画に計上していくこととする。

2．教務システムの完成を目指していくことは無論のこと、システム再構築に向けた方向性の再検討を行うことも考えていく。

3．事務職員のレベル向上は欠かせないので、一人二役体制の完成を目指すとともに、ＳＤ研修の計画的な実施を図っていく。

」

令和元年度

「個人別報告書」

令和元年度　「玉島　健二」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：大学運営	職名：学長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　2019 年度の学長運営方針における４つの努力目標について、実現に向けた取組を推進する。
２．「現代社会と女性」及び「生涯学習論」の授業を通して、学生の基礎学力・社会人基礎力等の向上を目指す。
３．学生募集につながる業務・取組等に積極的に関わり、2020 年度入学生 190 名を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学長運営方針の４項目の努力目標の実現
①運営委員会、入試委員会及び教授会における協議の徹底・情報の共有により、その実現を図る。
②各学科長・コース長に指示し、学科・コースの特色化、活性化について協議させる。
２．授業運営
「現代社会と女性」においては、学科・コース担当教員との協議や共通理解を図りながら、教材の準備・運営等を実施する。「生涯学習論」においては、可能な限り「長崎」をテーマにした授業を展開する。
３．　学生募集
進路ガイダンス、高校訪問、高校からの本学見学会等に積極的に関わり、本学の良さ・強み等をアピールする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
今年度は７年に１度の認証評価を受審した。学内の総力を結集して臨んだ結果、「適格」と認定された。学生募集については、前年度を大きく下回る結果〔139 名（充足率 69.5%〕となり、早急な対応が必要である。学科・コースの特色化については、栄養士コースとビジネス医療秘書コースにおいて一定の方向性を出すことができたことは成果である。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
「現代社会と女性」及び「生涯学習論」では予定通りに授業に取り組んだ。特に、「生涯学習論」では、今年度から「長崎」をテーマにした授業に取り組んだ。学生の社会人基礎力の定着に貢献できたかどうかは、データの分析を待ちたい。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
進学ガイダンス、高校訪問及びオープンキャンパスには可能な限り積極的に関わったが、上記１に記載のとおり、不十分な結果になった。ただし、このことがきっかけで、学内にプロジェクトチームを立ち上げ、様々な角度から協議し、施設設備や奨学金制度など、いくつか目に見える形が出せていることは成果として評価できる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学科・コースの特色を出す取組を促すために、次年度から学科長・コース長との定期的なヒヤリングや打ち合わせを行う。また、全専任教員との面談を実施し、意欲の喚起に努める。

２．　「生涯学習論」は令和２年度で終了し、令和３年度から「長崎観光入門」として開講する。開講に当たっての準備を令和２年度に行う。「現代社会と女性」では、内容を工夫しながら、社会人基礎力の定着につながるよう取り組んでいく。

３．　学生募集活動には引き続き、可能な限り積極的に対応する。学内で組織化した「特色化推進プロジェクト会議」は継続的に協議し、学生募集に繋がる取組とする。

令和元年度　「橋口　亮」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．組織への報告、連絡、相談の意識を高める。 ２．　期限厳守を心がける。 ３．　ラインとスタッフを意識した行動をする。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　情報を共有し、気持ちよい関係が構築できるよう、メール配信だけでなく直接顔を合わせ、スタッフとのコミュニケーションを図る。 ２．今すぐ実行を心がけ、素早い対応をする。 ３．　組織のラインを意識し、直接スタッフに対応しないよう心がける。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 コース長としてスタッフへの報告・連絡は意識して実施した。直接、顔を合わせて伝えるよう心掛けた。 ２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 今すぐ実行は、ほぼできていたと感じている。催促の連絡がある前に済ませる意識を持ち行動した。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生支援に関すること、行事の担当、役割などの情報は、コース会議を開催し、共通認識が得られるような対応を行った。ラインを無視し、直接スタッフに働きかけないような行動をした。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
退官するため記載しない。	

令和元年度　「森　弘行」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．学生データベースの機能強化と情報分析。 ２．学内情報システムに関する将来構想（情報演習室、ネットワーク分離）。 ３．学修成果をフィードバックする授業の試行。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．学生データベースの機能強化、学務システムとのデータ同期。 学生データベースの OS 変更、開発環境の変更に伴うプログラムの大幅書き換え。 学務システムへの到達度チャート、GPA 推移グラフの実装支援。 ２．Windows 7 サポート終了に伴う情報演習室設備更新計画。 無線 LAN アクセスポイント整備 ファイヤーウォール更新 ３．数的理解で課題の誤解答例を示し指導を試行。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 成績票への到達度チャート、GPA 推移グラフ表示など、機能の追加・改善。 学生データベースから学務システム学生情報へのリンク機能を追加。 ２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 情報演習室１は３月中に機器更新予定。 学生用の無線 LAN については、セキュリティ強化のため VLAN により教職員用ネットワークと分離。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[C]・Ｄ 」 算数の基本を十分理解できていない学生は、誤りを理解することも難しい。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．学生データベースの機能強化と情報分析 ２．学内情報システムに関する将来構想（情報演習室、ネットワーク分離） ３．学修成果をフィードバックする授業の試行	

令和元年度　「織田　芳人」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．平成 30 年度に発案・試作した教材の製作プロセスを画像とともにまとめる。

２．保育者養成校のカリキュラムにおけるメディア活用としてプログラミング教育の実践方法を検討する。

３．保育者養成における基礎学力としての漢字力不足を改善するための方策を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．発案・試作した教材をオープンキャンパス、高校内進路ガイダンス、保育士等キャリアアップ研修等における製作課題として活用して、製作プロセスをスライドとしてまとめた。

２．アンプラグド専用教材の代替として「ロジカルルートパズル」と称される知育玩具による体験学修をヴィジュアル・プログラミング学修の予備的段階として組み入れて、その有用性をアンケート調査によって検討した。ヴィジュアル・プログラミング学修には文部科学省が提供しているオンラインツール「プログラミン」を利用した。

３．2017 年 3 月改訂『幼稚園教育要領』の全文を Excel データ化して、分析対象とする語を名詞、及び、言い切りの形が「だ」で終わる形容動詞とし、計量テキスト分析ソフト KH Coder によって検討した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
スライドのテキスト、画像ともに説明不足の部分があった。配付資料の活用については検討不足があった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
アンケート調査結果を令和元年度の本学紀要に発表することができた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
計量テキスト分析ソフト KH Coder による分析結果「頻出 150 語」及び「共起ネットワーク」を令和元年度の本学紀要に発表することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．不足したスライドのテキスト及び画像を準備して補う。スライドとともに活用できるような配付資料を作成する。

２．ヴィジュアル・プログラミング学修の成果を数値化して、知育玩具による体験学修との関連性を検討する。

３．「頻出 150 語」と「共起ネットワーク」を組み合わせれば、漢字力向上のための学修資料として、どのような漢字あるいは漢字群を提供すればよいかの指標が得られるので、その資料作成を行う。

令和元年度　「中澤　伸元」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１　発声方法、表現方法、伝達方法などの実技の繰り返し徹底指導。

２．アクティブラーニングを通して
共同感覚を身に付け、グループによる技術方法、対策などを考える。
意見交換によるコミュニケーション力、音楽に対する興味と関心を持たせる。

３．実技指導に役立つ保育士としての普段使う技術は勿論のこと、言葉、イメージ、姿勢態度、テクニックの指導を徹底する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　割りばし、ストローなど小道具を使って、声に関心を持たせ、発声、共鳴、息の使い方、意識と繰り返し訓練で感覚を身に付ける。

２．　指導後グループに分かれて意見交換を行う。学生たちの力で、それぞれの感じ方の違いを参考により音楽に対する興味関心が深まるグループごとに意見発表をさせる。

３．保育士として、言葉、姿勢、態度によって園児が喜び、傷つくことを理解し、園児に対する言葉表現、姿勢、態度などを本心からの笑顔で誘導する信頼関係を身に付ける。どの子も育つ保育士次第！を理解する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

１年生は、歌うことは楽しいけれど深く学ぶことの習慣が身についていないため、割りばし、ペットボトルなど小道具を使って楽しんで発生する楽しさに興味関心を持たせることで成果を出した。仕事（保育士）を自覚して本気で取り組む学生３割楽しんでいる学生６割、コンプレックスがある学生が１割。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

１年生は自信はある。歌うことが楽しい、の意見で話し合いが進んでしまいがちであった。コンプレックス、消極的な学生の意見を取り入れる必要があった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ

１年生はまだ保育士の自覚がないため興味は持つが、幼稚園実習もなく感覚として腑に落ちていないので、その場の理解だけで終わってしまう。自宅復習がない。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．自宅での練習を取り入れる。

２．消極的な人の意見も取り入れる。

３．自宅での繰返し練習。

令和元年度　「松尾　公則」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授　　特専教授　　松尾公則

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「ヒトと生物」「栄養士の科学」は、現場で役立つ内容とし、興味関心を持たせる。

２．　卒研では環境教育が実践できるような人材の育成を目指す。

３．中庭庭園の池の管理を行い多様性を高めていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．毎時間、講義内容に関する資料やプリントを準備し、90 分間学生が集中できるようにした。

２．毎時間、自然と触れ合う内容を準備し実践した。野外活動や教育活動を重視した。

３．池の動物観察を実施したが、後半、アメリカザリガニの侵入により池の生態系が崩壊した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学生の関心も高く十分に達成できたと思う。ヒトと生物では本物やＤＶＤにより緊張感を保つことができたし、栄養士の科学では、問題演習により基礎知識の理解に努めた。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　幼稚園や保育園に勤務した場合も、生き物担当をできるような人材が育成できたと思う。今年の学生は生き物に関して興味関心が高かったので、成長は目覚ましいものであった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
　前期までは非常にいい状態であり、観察等も十分にできた。しかし、後期になると、誰かが投げ込んだアメリカザリガニによりすべての藻が食い尽くされ、汚い池となりつつある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．年によって学生の雰囲気が異なるので、学生のようすをよく観察し臨機応変に対応していきたい。

２．子どもと自然環境というゼミで、もっと満足感が得られるような内容を工夫していきたい。

３．今後の池の変化についてよく観察していきたい。

令和元年度　「長尾　久美子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：　人間教養教育	職名：特別専任教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．社会福祉・社会保障の意義 や仕組みが理解できるように、日常生活や社会状況と関連付けながら、学生が自ら考え、関心を持てるような授業を展開する。

２．社会福祉の専門職又は関連施設の専門職としての社会福祉・社会保障の知識、福祉的な対人援助の技術を修得できるような授業を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　社会の動きや出来事やDVDなどを積極的に取り入れ、事例を通じて、状況や仕組みが分かるようにする。
・必ず、関連の出来事、社会の動きなどを例に挙げ、説明した。
・DVD で、当事者の状況、当事者の話などを観ることにより、今まで知らなかったこと、経験していないことを知ることから始めた。

２．毎回、パワーポイントの資料（A4、白黒、両面、１枚）を配布し、ポイントが把握できるようにする

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生の授業評価は、全体的な満足度４．１であり、概ね、目標に達した。しかし、学習意欲については、３．９でやや低く、今後の課題である。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
成績評価は、Ｓ・Ａが５４．８％である反面、Ｃ評価が２９．０％と理解度の二極化が見られた。
熱心に受講し、主体的に参加する学生と、欠席が多く、関心を示さない学生がいた。
社会福祉について、基本的な知識を習得できるような配布資料や授業の工夫が必要である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．社会福祉関連施設の職員として社会福祉・社会保障の知識、福祉的な対人援助の技術を修得できるような授業を行う。

２．成績の二極化があり、成績低位学生の意欲・理解の促進を図る授業に努める。

令和元年度　「白石　景一」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：特別専任教授

ＰＬＡＮ（計画）：１．領域に関する専門的事項に関する科目「子どもと表現　（音楽）」（1 単位 15 回）については、平成 30 年度までは「幼児音楽指導法」（2 単位 30 回）において行ってきたがこれを半分の時間で指導するため、楽典と表現の専門的内容を同時に進めていくよう試みる。

２．　今年度も初心者にも楽しく学生自ら学ぶ姿勢を大切にしたい。

３．　今年度も学生の要望にできるだけ答えられるよう心掛けたい。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　乳幼児のおける表現のとらえ方や子どもにとっての音楽の概念などについてテキストをもとに身近な題材をもとに解説を試みた。

２．今年度も、ピアノの演奏が苦手な学生や初心者にも簡易な伴奏楽譜についてのアドバイスや、弾きやすいように編曲したりして楽しいレッスンになるよう心掛けた。

３．今年度も、学生の要望に応え、試験前など、出勤日ではない日に出勤し指導を行ったりした。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
　同じテキストで、長年授業を行っていることもあり少しマンネリかが否めないかもしれないがMやはり、テキストはあったほうが、位置づけがしっかりすると思う。コード伴奏法の授業との関連でスケールとカデンツの指導も行ったことは良かったのではないか。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
　一人ひとりの性格や進度に合った指導を心がけ、ピアノの演奏が苦手な学生や初心者にも簡易な伴奏楽譜についてのアドバイスや、弾きやすいように編曲したりして楽しいレッスンになるよう心掛けた結果、学生自ら質問にきたりレッスンの依頼に来たりした学生が多くいたことは良かったのではないかと思う。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」
　今年度は、個人的理由もあり、十分なプラスアルファ―の指導ができなかったことは、学生には申し訳ないと感じている。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

来年度は退職のため必要なし

令和元年度　「武藤　玲路」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．【学習支援について】
担当科目の学生の到達度と満足度が、80%以上「4 と 5」の評価になることを目標とする。

２．【進路支援について】
Ｌの就職率が 90%以上になることを目標とする。

３．【研究活動について】
短期大学のキャリア教育に関して、紀要や学会等で 3 本以上発表することを目標とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．【学修支援について】
アクティブラーニングを目的として、心理学の講義科目では毎回の授業の最後に理解度と感想を確認するミニレポートの提出を求め、さらに、授業の冒頭では前回の授業に関する質問をして、授業への関心を高めた。また、エクセルの演習科目では応用問題や自由課題を与えて、主体性や問題解決能力、学修意欲の育成に努めた。

２．【進路支援について】
１・２年生合同の就活ピュアサポート活動を年４回実施し、就職未決定者に対する働き掛けや指導を強化した。

３．【研究活動について】
職業・キャリア教育における学習成果の可視化と体系化をテーマとした研究活動を行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生による授業評価アンケートの結果は、全体的に 5 段階評価の 4 以上であり、満足度は高い方ではあるが、アクティブラーニングによる、主体的な学び、対話的な学び、深い学びの修得は、十分であるとは言えない。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
卒業生 13 名中、1 名が家事手伝い、3 名が未就職である。就職希望者 12 名中、9 名全員が正社員として内定したが、就職率は 75%という低い結果となった。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
研究の本数は 3 本で妥当であると言えるが、研究のレベルが研究報告やノートであり、学術性に欠けている。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．【学修支援について】
今後は、アクティブラーニングの教授法や学修成果のフィードバックの手法を用いた授業を展開したい。
また、ゼミナールとプレゼミナールでは、コミュニティー・サービス・ラーニングを推進していきたい。
また、キャリアアップセミナーでは、企業との交流会や１・２年生の合同ピアサポートを推進していきたい。

２．【進路支援について】
今後は、就職状況の量的な面に留まらず、質的な面でも学生の満足度が高まるように支援していきたい。

３．【研究活動について】
今後は、職業・キャリア教育に関する先行研究や多次元の統計処理を踏まえた学術論文を執筆していきたい。

令和元年度　「濵口　なぎさ」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生の実践力の向上を図ることを目的として、検定試験の受験対策に力を入れるとともに、コース内で能動的に学習するような雰囲気を作る

２．心身に問題を抱える学生や基礎学力の低い学生の入学が見込まれており、コース内で協力して対応できるよう心がける

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．登録販売者受験対策講座の充実を図るために実施回数を増やした。また、日商PC検定（文書作成）受験希望者に対しては個別に受験指導を行った。

２．健康上の理由で欠席が多い等配慮が必要な学生、欠席が多く勉学意欲が乏しい学生については、必要に応じて保護者との情報共有を図るとともに、他の教員とも連携を図りきめ細かく対応した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
登録販売者受験対策講座については、最終的に４名が受験し、１名の合格者を出すことができた。日商PC検定については２級受験者を出すことができなかった。また、情報演習室の設備の問題があり、１年生は例年１月から２月にかけて大多数が３級を受験していたが、今年度は４月以降にずれ込むことになってしまった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
入院によって前期・後期とも長期にわたって欠席した学生に対して、保護者と密に連絡を取り合い、教職員間の連携や本人の努力により、補習や課題で対応できほとんどの科目で単位を取得することができ、卒業までの道筋をつけることができた。また、人間関係の悩みを抱える複数の学生に対して、個別に面談を行い問題解決を図るよう心掛けることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の実践力の向上を図ることを目的として、検定試験の受験対策に力を入れ、日商PC検定３級の全員合格と上位級への挑戦をサポートする。

２．配慮が必要な学生や基礎学力の低い学生に対して、コース内で協力して対応できるよう心がける

令和元年度　「山口　ゆかり」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース　　職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　栄養士実力認定試験において、担当科目の正解率を上げる努力をする。
２．　卓袱料理試食会において、主担当者として企画立案を行い、取り組みを成功に導く。

＊１，２とも前年度からの継続目標

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　栄養士実力認定試験のガイドラインを再度確認し、担当科目（給食経営管理論実習Ⅱ、学外実習総合演習）や後期対策講座の中で、学生の理解度を高める。
２．もてなす側（２年生）の役割分担を見直し、28 名で運営する体制を作る。また、新助手との連携強化に努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

栄養士実力認定試験における本学学生の「給食管理論」の結果は、短期大学平均と同じ値を示し、全国平均を下回っていた（表１）。短期大学平均を超えることができなかったのは、２点以下の者が７名（25.9%）存在し、昨年度（２点以下：14.3%）より低得点の者が 11.6%増加したためと考える（表２）。一方、５点以上の高得点を示した者（12 名、44.3%）は昨年度（23.8%）より 20.5%増加し、満点を取った者も１名（3.7%）存在したことから、授業のレベルは栄養士実力認定試験に対応できるものであり、６割弱の者（16 名、59.2%）が短期大学平均を上回るレベルに達していたことがわかった。栄養士コースのレベルが上がらない理由として、依頼心が強く、学習習慣が身についていない学生が増えたこと、単位認定のあり方などがあげられると思う。本科目を担当して 18 年、最後まで課題（理解度、学修意欲）を抱えた学生の底上げに貢献することはできなかった。しかし、今年度は調理学で作成した問題が食品学総論の分野に１問採用されており、配布した問題を確認して臨んだ学生の平均点アップには少し貢献できたように思う。最後に、昨年度より担当している調理学については、実践から学び取る内容が増えてきた状況を考えると、卒業までに開講する様々な調理系の実習をとおして、考える力を育み、科学的に理解する力を高めていく必要があると感じた。

表１　「給食管理論」の平均点および正解率

	本学（学校平均）		短期大学平均		全国平均	
	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)	平均	正解率(%)
令和元年度	3.9	55.7	3.9	55.7	4.3	61.4
平成 30 年度	3.7	52.4	3.5	49.4	3.8	53.7

表２ 本学学生の「給食管理論」における得点分布

		７点	６点	５点	４点	３点	２点	１点	０点
令和元年度 本学受験者数：27 名	人数（名）	1	5	6	4	4	5	1	1
	割合（%）	3.7	18.5	22.2	14.8	14.8	18.5	3.7	3.7
平成 30 年度 本学受験者数：42 名	人数（名）	0	3	7	12	14	5	1	0
	割合（%）	0	7.1	16.7	28.6	33.3	11.9	2.4	0

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

本試食会は、長崎食育学と卒業研究の時間（日程調整有り）を使って、７月 26 日（金）に実施した。昨年より 14 名少ない運営体制で臨んだが、ほぼ計画どおりに大きな負担もなく終了した。終了直後に実施したアンケートでは、もてなす側の 85.7%が達成感や連帯感を十分に感じており、もてなされる側も８割以上（85.7%）が十分満足していた。以上の結果から、本試食会は、食文化継承のための取り組みとして成功したといえる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

退職のため省略する。

令和元年度　「島田　幸一郎」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．ビデオ視聴、グループ協議・発表、講義・まとめを効率的に行いアクティブ・ラーニングの充実を図る。

２．学生の進路希望に即した保育実習Ⅲの実習先の選定と実習指導の一層の充実に努める。

３．保育・教育現場における「合理的配慮」の実践研究に取り組む。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「障がい児保育」の導入時でテーマに沿った映像を視聴させる。その内容についてのグループ協議及び発表をとおして障がいの理解や支援の必要性にについて考えさせる。授業で学んだことをA4プリント１枚に記入させ、授業後に提出させる。

２．施設保育士を希望する学生の思いを重視し、個々の学生の進路実現に沿った実習指導の内容展開と施設実習を具現化する。

３．学生の実習後アンケートをもとに、幼稚園と保育所における「合理的配慮」（特別な配慮）のとり組み状況を把握し、成果と課題を検証する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

定期的なグループ編成、発表者への評価加点、プリント記入の工夫等をとおして、ある程度アクティブ・ラーニングを進めることができた。学生の学修意欲や習熟度に差がみられ、一部学生のグループ学習への参加が低調なので改善に努めたい。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

２名の学生が受講し、１名は児童養護施設への進路意思が明確で実習した施設に就職した。実習指導や施設実習にも意欲的取り組んだ。１名は実習指導や施設実習に真面目に取り組んだが、当初から進路に迷いがあり最終的には保育所に就職することになった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

「合理的配慮」（特別な配慮）の具体的な記述を求めた学生アンケートを実施・集約したが、分析等の整理までには至らなかった。次年度に過去のデータを含め論文としてまとめる予定である。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　グループ協議・発表、プリント記入等を工夫し、アクティブ・ラーニングを更に充実する。

２．進路希望に即した保育実習Ⅲの実習先の選定と実習指導に努め、施設保育士としての進路実現を図る。

３．　過去５年間の学生アンケートデータを整理し、保育・教育現場での「合理的配慮」の実状をまとめる。

令和元年度　「古賀　克彦」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
   - 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し、解説を実施
   - 授業において頻出分野の解説強化
   - 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用

2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上
   - 学外実習総合演習での指導強化
   - 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
   - 学外実習担当助手との連携強化

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

令和元年度栄養士実力認定試験の結果は昨年度よりわずかに向上し、臨床栄養学は短大平均と同じ点数、栄養指導論は短大平均を上回る結果となった。成績が昨年度より向上した理由として普段の授業や定期試験において栄養士実力認定試験に取り組む機会を増やし、多くの問題を溶かしたためだと思われる。次年度は全国平均を超える成績を目指し、今年度の対策に加え、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。

科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)
臨床栄養学（6 点満点）	3.2 点（53.3%）	2.7 点（45.0%）	2.7 点（45.0%）
栄養指導論（6 点満点）	3.9 点（78.7%）	3.5 点（58.3%）	3.8 点（63.3%）
全体（85 点満点）	47.2 点（55.5%）	42.2 点（49.6%）	42.3 点（49.8%）

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。学外実習先からきび石井評価を受ける学生が減少したため、学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱでは昨年度より A 評価の割合が増加した。来年度は B 評価の学生を減らし、S 評価、A 評価を増やせるように、評価が低くなりそうなグループの指導にも注力していきたい。

	S	A	B	C
学外実習総合演習	4 名(14.8%)	19 名(70.4%)	10 名(11.1%)	1 名(3.7%)
学外実習Ⅰ	3 名(11.1%)	17 名(63.0%)	6 名(22.2%)	1 名(3.7%)
学外実習Ⅱ	5 名(18.5%)	15 名(55.5%)	7 名(25.9%)	0 名(0.0%)

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 令和２年度は担当科目の得点を可能な限り全国平均に近づけるため、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、授業内容の理解度を上げていきたい。

2. 令和２年度の学外実習Ⅰ及び学外実習ⅡではＣ評価を減らしＡ評価を増やすため、学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、評価が低くなりそうなグループの学生の成績向上の為、個々の特性に応じた指導を行っていきたい。

令和元年度　「中村　浩美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．ピアノ初心者及びそれに近い技術レベルの学生への対応と指導の在り方を研究し、進度や達成度を高める。
２．声や歌唱にコンプレックスを持っている学生、また声の出し方特にチェンジ音域の悩みや疑問を持ち自信がない学生への個別指導を行う。
３．保育者になる自覚と意識向上を常に持つための、学生が自ら積極的な取り組みを行える指導をする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．緊張感をほぐし信頼関係を築きながら、個人の性格を早く把握してレベルに沿った指導した。毎回のテストでは進度に重視をおく事よりも、学生自身の到達目標を聞きながらそれを補える指導をした。目標の到達度合を確認し合いながら次に向かう意欲を持たせた。試験前にはグループで発表会をしながら、それぞれの良い点・課題点を述べながらグループでも協力し合って上達するための方法も促すようにした。
２．声にも個性があって当たり前であることを気付かせ人前での声を出す羞恥心を少しずつ取り除くためのレッスンを試みた。声を出す事・歌う事に必要な要素を個々に見合った方法を工夫した。特にチェンジの声がそれぞれ違うため一音一音丁寧に直接体に触れながらの指導を強化した。
３．「先生」と言われる立場上人前に出ると言うことに対して何を意識してどう振舞うかを考えさせそれぞれに実践させた。学生オリジナルの手あそび歌をグループ活動で完成できるようポイント・アドバイスを行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
緊張感をほぐしながらピアノへの抵抗を少しずつ除去していく指導に神経をかなり使った。授業外でも教員と学生間のスケジュールを検討しながらレッスンを行った。テスト前にはグループごとに発表会を行いそれぞれの良い点・課題点の話し合いもできアクティブラーンニングにも繋がった。学生達もこの取り組みによって意欲が増されて目標意識が高くなっていた。進度状況を優先するより基本的な技術を重点的に指導した事は、2年次での授業に活かされると考える。
２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
自分の声や出し方にコンプレックスを持っている学生が多く、個人での練習ではその発声法が正しいかを確認できない事が歌う事の大きな問題点である。しかし担当学生のみならず自ら教えて欲しいと言う学生にも指導する事もできた。マンツーマンではなく学生３人が一組になってのレッスンによって、自分の声の出し方の良し悪しがお互い聞きあえて効果があった。地声・ミックスボイス・ファルセット、移行の仕方など、学生個人の癖を早く知ってあらゆる方法を考えトライし、継続的なレッスンをすると常に感じている。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
人の前に出て話す事が苦手な学生が殆どのため「先生」に成りきる授業を今年度も導入として取り組んだ。先生の子どもへの声掛けや表情、子どもから発せられると思われる言葉を想定して、何が良かったのか何が改善点なのかをお互いに知ることができ実習に少しでも生かせる事ができようだ。オリジナルの手あそび歌はグループ活動で基礎コードの復習から調や拍子の変化にもアドバイスを加えながら完成させ、発表においてはどのグループも工夫がありみんなで楽しめ達成感があったようだ。最後の授業では「うれしひなまつり」の曲のイメージ力を高め子どもが楽しめる気持ちを感じ取るために、誰がどの役になるかを決めてひな人形のセットになり合奏唱を行った。毎年ではあるが学生は皆子ども心になり、笑顔で合奏唱歌を楽しんでいた。しかし後期になっての子どもの歌の歌唱法の時間が僅かしか取れず授業進行の内容に課題として残った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．研究室でのレッスンはマンツーマンで行うため、緊張感を緩和させながらこれからも一層の丁寧なレッスン指導をし、学生と共に達成感や成長を感じながらレッスンの希望をたくさん受け入れる。
２．学生が自分の声に未知の発見や成長が少しずつでもあること、コンプレックスを解消できて楽しむ歌になる学生が増えるよう今までの指導の在り方を生かしつつ学生によっての工夫を強化する。
３．保育者になるための意識改革や実践に力をいれてきたが、授業内容や人の前に出ることには何が大切かを理解して積極的な受講の取り組みになるよう、教員としての配慮や導き方を丁寧に行う。

令和元年度　「本村　弥寿子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．保育のねらいと保育実践との関連性を理解できる授業内容及び方法を模索する。

２．領域「環境」に関する授業内容について工夫する。

３．幼児教育の重要性及び望ましい親子関係に関する内容の保護者教育について積極的に取り組む。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　具体的な活動をあげ、そこで子どもにどのような経験をしてほしいと考えるのか学生が考える機会を持った。さらに指導案作成では、子どもの姿を踏まえたうえで保育者が何を子どもに願うのか考えさせ、願いがねらいになることを実感できるようにした。

２．　自然・もの・人・文字・数字等と子どものかかわりの事例をできるだけ多く示し、保育者の配慮や言葉かけ、発達に応じた環境とのかかわりについて学生自身が考え、グループでそれらを出し合う機会を設けた。

３．公開講座、保護者向けの講話等の機会を大切にし、事例をもとに幼児教育について理解を進める話を行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　指導案のねらいを見ると、８割の学生が到達目標を書き込んでおり、保育ならではの方向目標は理解が難しいと感じられた。保育を経験した後の実習後に、ねらいと保育実践の関係性について考える機会を十分にとった方が理解が進むのではないだろうか。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教科書に記載された事例に加え、他文献や教員の経験した事例をプリントにしたことで、学生が多数の保育を模擬体験する機会となった。さらに、事例の解説から、教科教育とは異なる保育の独自性に触れることができ、附属幼稚園での体験学習での活動を考える際に、子どもにとってふさわしい保育の環境を考える手立てとなった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　公立保育園の保護者向け講話のほか、子育て支援員向けの講話の機会を得、支援員を介して保護者に幼児教育の大切さを伝える機会にもなったと思われた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　２年後期における授業で、ねらいを意識した振り返りを取り入れ、実習での学びを深めるよう工夫したい。

２．　附属幼稚園体験学習で自分が担当した学生のみならず、学生全体に領域「環境」での学びを生かしながら活動を取り入れる助言を増やすべきである。

３．子育て支援に関する公開講座の内容を工夫することで、早期教育ではない幼児教育の重要性をさらに伝える機会を持つ。

令和元年度　「荒木　正平」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上 ２．実習指導体制の確立と実習指導内容の充実 ３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図った。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう現場での支援を具体的に想定した資料を配付したり、DVD などの教材を効果的に活用した。演習系の授業では、学生がより能動的に考えるためのロールプレイなども取り入れた。レポート課題への取り組みも活用した。 ２．他の担当教員とも連携しながら、指導内容を検討し充実を図ることができた。個別での対応が必要な学生についても、適切に支援が実施できたと考える。 ３．前年度、共著にて論文化した「特別な支援が必要な幼児の教育・保育」をテーマに今年度は単著論文をまとめた。そこでは幼児教育学科における卒業研究での学生への指導効果についても併せて検証することができた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 昨年に引き続き、支援する／される双方の当事者やその関係者の思いに触れることができるよう映像資料を可能なかぎり用いることで、意欲的な取り組みにつなげることができた。演習形式での実践やロールプレイも取り入れたほか、時事課題についてのテーマ学習の実施により、学生自ら考える姿勢を促すことが出来た。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」 実習依頼施設の状況把握のための情報収集や、新規施設の開拓や、新型コロナ対応のための調整等もスムーズに行なうことが出来た。学内授業と実習の連動性を意識づけることもできたが、学生によっては十分な理解が難しく個別での対応を要するケースもあった。 ３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 研究成果の報告として、今年度は「特別な支援が必要な子どもの教育・保育」をテーマに、論文化した。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上 ２．施設実習担当の配置替えに伴う、学内外の連携体制の確認と学生指導の充実 ３．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う	

令和元年度　「福井　謙一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　個人研究の充実を図る（保育者養成課程に関する研究） ２．　授業内容の充実を図る（ICT 教材の活用）	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　今年度は広島大学の博士課程後期に入学するため、今までの研究内容をまとめなおした。 ２．　次年度に向けて、ネットでの授業配信等の準備を進めた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新規の研究はできなかったものの、今までの研究内容をまとめなおし、さらには展望まで見えたことにより、来年度の研究内容の充実が図れることとなった。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型肺炎の流行により、ICT を活用した授業の展開が余儀なくされたため、ネットでの配信計画を立てたことにより、来年度の授業対応がよりスムーズとなった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．従来研究を発展させた研究を行う（現場の保育者に質問紙を配布し回収する） ２．　ICT やネットワークを活用した授業を展開する。	

令和元年度　「光武　きよみ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科　　職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　保育者に必要な知識や技術について、興味や意欲を持ち、自主的に学べるような授業を展開する。

２．学生自らが考え、発言できるような授業の工夫を行う。

３．良好な人間関係の構築に努め、学生が相談しやすい環境を作る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．パワーポイントの資料に加え、視聴覚教材を使用して授業を行った。振り返りシート、課題などを通して自分で学習できるようにした。

２．　アクティブラーニングやグループワークからの発表や教員からの発問に対して考えを述べるような授業を展開した。

３．　授業内容の質問や短大生活での悩みを聞く機会を作りながら、相談しやすい環境を作った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
　非常に業務が忙しく、授業内容が物足りないものになっていたのかもしれない。全体的な満足度が 4.5 ほどであり反省すべき点である。また学生は自分で学習はできていたが、学生の学力差や意欲の問題も関係して、振り返りシートや課題のレポート内容に不足を感じる学生もいた。
２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
グループワークを多く取り入れ、その中での役割を変えながら発表までもっていったことは、意見や考えを述べる機会を与え、意見の集約を行うなどの経験ができた。
３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
質問や相談に来た学生にはきちんと時間を取り話はできた。しかし、他業務が忙しく、そのことが卒業研究の学生や他学生にも伝わっていたのではないかと考える。

科目名	対象学生	内容やレベル	教員の教え方	学習意欲	学生の理解度	全体的な満足度
乳児保育	19Y	4.5	4.6	4.5	4.5	4.5
卒業研究	18Y	4.2	4	4.1	4.4	4.3
子どもと健康（保健）（以上児）	19Y	4.5	4.5	4.5	4.6	4.5
子どもと健康（保健）（未満児）	19Y	4.4	4.5	4.6	4.5	4.5
子どもの保健Ⅱ	18Y	4.3	4.3	4	4.3	4.4

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．満足度を高めるために、学生の興味を引くような授業の工夫ができる。
２．さらに積極的に授業に参加し、自ら考え意見が述べられるような授業を展開する。

令和元年度　「蛯原　正貴」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．実践的な技術が現場で活用できるよう、現場を想定した模擬保育を効果的に授業に取り入れる。

２．技能テストに関して、技能習得のポイントを口頭で説明できるよう要点をまとめ、「コツ」と呼ばれる動きの感覚を身につける

３．アクティブラーニング形式の授業回数を増やし、学びを実践へとつなげられる授業内容とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「運動遊びの実践」及び「保育内容『健康』」の授業を中心として、模擬保育の重要性、必要性に関して詳細に説明を行うことができ、アクティブラーニングも充分に取り入れることが出来た。

２．「幼児体育」において、器械運動に関する内容を取り入れ、自身が感じている動きの感じを口頭で説明し、「コツ」がどのようなものなのかを言葉にできるよう、実践を行った。

３．　「子どもと健康」や「領域『健康』の指導法」において、アクティブラーニング形式の授業を増やし、課題解決が自分でできるような機会を増やした。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

模擬保育を効果的に取り入れることはできたかと思うが、授業の受講人数が多く、十分な振り返りができたとは言えなかった。受講人数を考慮した模擬保育の形式、もしくは、回数をさらに増やすなどの対策が今後の課題である。

２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

数十年ぶりに器械運動を行うという学生もおり、自身の現在の運動能力を把握する良い機会となったようであった。しかし、「コツ」を見つけられた学生と見つけられない学生の差が激しく、技能習得だけで終わってしまった学生もいた。課題設定のレベルを再検討し、授業内で達成できる課題を設定する必要がある。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

アクティブラーニングの機会そのものは増やすことができたが、実践へと学びがつながっているかどうかは懐疑的であった。アクティブラーニングを行った後の振り返りに力を入れ、成果の検証を行っていく必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　模擬保育の回数を増やし、実施者の振り返りが充実するよう、反省会の機会を準備する。

２．「コツ」を説明するまでの技能レベルに引き上げるためには、授業の回数が足りないため、技能習得を最低限のレベルとして設定し、互いに見合いながら技能向上を図れる機会を確保する。

３．　アクティブラーニングの機会はそのままに、振り返りの時間確保を検討する。そして、アクティブラーニングの成果を検証していく。

令和元年度　「江頭　万里子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：特別専任講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業改善　：授業内容の定着を図る授業法の検討。

２．研究活動　：効果的な授業法を検討するため、学生の敬語に対する意識と知識・運用力の調査を行う。

３．学生支援　：授業時など日常的に声かけをし、引き続き研究室を訪問しやすい環境づくりに努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．演習前の導入として、演習内容に関する教員からの問いに対して、学生にペア討議、クラス討議を行わせ、教員がコメントすることで、授業内容の定着を図り、学生が深く考える授業法を試みた。

２．調査当日出席した１年生全員に対して、敬語に関する意識、知識、運用力について調査を実施した。

３．授業の疑問点などがあれば研究室を気軽に訪問するように日常的に声かけをし、訪問しやすい環境づくりに努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
発表内容や自身の意見並びに討議内容を記入した提出物から、授業内容を深く考えた様子が窺え、演習前の導入として効果的であったと思われる。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
調査により、敬語の授業実施前の１年生の敬語に対する意識、敬語の知識・運用力を把握することができ、効果的な指導を展開するための基本情報を得ることができた。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
訪問者数は少なかったが、当該学生は複数回訪問しており、訪問しやすい環境づくりはできていたものと思われる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．授業改善　：　アクティブラーニングを効果的に用い、学生が主体的に学ぶ授業づくりを行う。

２．研究活動　：　本年度の調査結果を活かし、敬語の効果的な指導法を検討する。

３．学生支援　：　検定受験までのモチベーションの維持を図り、秘書検定の合格率の向上を目指す。

４．学生支援　：　授業時など日常的に声かけをし、引き続き研究室を訪問しやすい環境づくりに努める。

令和元年度　「船勢　肇」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．幼児教育学科における基礎的な各授業内容をつくりあげる。

２．アクティブラーニングを実践する。

３．広い社会的な観点から幼児教育について理解を深められるよう工夫する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　数種類のテキストの内容を分析しながら、毎回の授業の構成を考えた。

２．　部分保育の発表・グループ討論・リアクションペーパーを取り入れた。特に、部分保育については、人前で決まった時間で発表する難しさを体感してもらうよう心掛ける。

３．　待機児童問題・離職復職・貧困などをテーマとして取り上げた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
　年間を通した内容のまとまり、個別の授業のまとまりといった構成の面で工夫が仕切れなかった。また、学生に伝わるような説明が課題として残った。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
　特に、部分保育の発表は学生が意欲をもって取り組んでいる様子だった。グループ討論では学生間で理解が深められていた。リアクションペーパーは、学生の例を紹介し、適宜コメントすることで意欲を高められた。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　直接現場で役に立つ技術でなくとも、自身を取り巻く社会環境を理解することで、政治が保育者の人生設計にまで深く関係していることについて理解が得られた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．全体の計画をいま一度見直し、さらに学生自身が発表・表現できる機会を増やしたい。そのために、学生が無理なく取り組めるよう、事前の説明を丁寧におこなう。

２．インターネットもより活用し、より積極的に部分保育の実例を紹介しながら、学生の関心を喚起し、水準の高い発表を実現させる。講義は、一つ一つの説明をより懇切丁寧にし、多く学生が関心を持続できるよう準備をおこなう。

３．社会問題と幼児教育との関連をより体系的に理解できるよう、整理して説明できるように準備する。そのために、より具体例を提示し、それらが大きな背景と深く関連していることを示せるように心がける。

令和元年度　「桑原　倫子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：助教
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．学生が興味を持つ授業方法を模索する	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１． 『調理学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 前期の授業では、基礎的な調理技術の習得を目標とし授業を行った。後期の授業では基礎技術を高めると共に、食材や調理法についての知識を幅広く学ぶことを中心とし、授業を行った。 『子どもの食と栄養』 プリントやスライド等を多く使い、栄養学の基礎等を極力簡潔に学べるよう授業を行った。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 『調理学実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 前期は基礎的な調理技術の習得のみに重きを置いてしまい、単調な内容や技術の詰込みになりがちであった。また、より多くの知識・技術を伝えようとするあまり内容を詰め込み過ぎ、学生の余裕がない授業もあったように感じられた。そのため後期は内容を絞り込み、より理解しやすいよう時間をかけ授業を行った。また基礎はおさえつつも、学生が興味を持つような新しい料理の実習も行った。 『子どもの食と栄養』 幼児教育学科の学生にとって慣れない分野の教科であったようで、深い理解に結び付いたとは言えないと感じた。スライドやプリントはもちろん、動画や写真など学生が興味を持ちやすいような媒体をもっと利用し、ポイントを絞った授業を行う必要がある。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　媒体の利用や授業内容のボリュームの検討をし、学生が興味を持つ授業方法を模索する。 ２．　２年後の論文執筆のため、データ収集などの準備を行う。	

令和元年度　「桑原　真美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：助教
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　授業方法および授業内容の確立 ２．　栄養士コースのキャリア支援について、主担当者としてキャリア支援センターと連携を図りながら計画・実行する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　・授業で使用するパワーポイントおよび資料を作成する。 ・栄養士実力認定試験に出題されている問題を取り入れた授業内容を確立する。 ２．　・キャリア支援については、キャリア支援センター長と実施内容を相談の上計画を立案する。 ・キャリア支援センターとの就職活動状況等の情報共有を密に行う。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ・パワーポイントおよび資料の作成においては十分に行うことが出来た。毎回の授業後に学生が質問や要望等を自由に記載できるカードを配布・回収し、その都度授業改善を行った。 しかしながら、授業アンケートでは難易度および教え方に満足できなかった学生も存在したため、授業の配布資料をはじめ授業の進め方についても改善が必要であると考える。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ・キャリア支援については、就職講座の内容をキャリア支援センター長と協議し計画・実施することが出来た。就職活動状況についての情報共有については学生に報告・連絡・相談を徹底するよう指示したが不十分な部分があったため改善が必要である。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　来年度は授業内容および配布資料について難易度等の見直しを行う。 ２．　キャリア支援に関して、就職活動状況の情報共有については引き続き学生へ報告・連絡・相談を徹底するよう指示するとともに、キャリア支援担当教員とキャリア支援センターとの定期的な情報共有を図る。	

令和元年度　「守山　優美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．実習助手間での情報共有を密にし、学生の状況を細かに把握した上で臨機応変に対応する。

２．レポートや課題等の、未提出及び提出遅れがなくなるようにする。

３．授業が円滑に進むよう、内容を十分に把握・理解した上で準備・授業の補助を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業の様子・出欠状況から、気になる学生について随時報告し共通理解を図る。
　対応が必要な学生については専任教員等にも報告・相談をし、指示を仰ぐ。

２．提出日時の告知を確実に行い、授業等があればアナウンスをし意識付けを行う。
　未提出者には声かけを行い、次回提出時の改善を促す。

３．授業内容に不明な点があれば担当教員や前任の担当者に確認を行い、確実に把握したうえで事前準備を行う。
　授業中は周囲をよく観察し、教員や学生を補助できるようにする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　助手間での情報共有は徹底できていた。他２名の助手からの情報もあり学生の状況についても把握した上で対応することができていた。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　提出期限のアナウンスについては授業時の声掛けや、掲示板等を活用して行えた。担当科目のレポート提出についてはおおむねの学生が期日を守ることができていた。一部特定の学生のみ提出遅れが目立ったが、個人的な声掛け等を行い提出させることができた。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　不明な点についての確認は徹底し、授業をサポートすることができた。急遽変更があった際の臨機応変な対応や更にサポートするために自身の能力不足を実感することもあった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今後も助手間での意見交換をしやすい環境をつくり、情報共有の徹底を行っていく。

２．今年度実施したアナウンス、掲示板等の活用を継続しつつ、遅れがちな学生に対して個人の特性に合わせた声掛け等のアプローチ方法を模索していく。

３．１年間業務を経験してきたが、全ての科目において担当教員の変更があるため、一からの構築となることが予想される。新しい担当教員との打ち合わせを密に行い、報告・連絡・相談を徹底しスムーズに授業が行えるようサポートしていく。

令和元年度　「黒田　真衣」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　調理実習の効率化 ２．　コース教員、他の実習助手とのコミュニケーションの徹底	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．事前の準備についての細かい確認を担当教員と綿密に行なう。 ２．些細なことでも、忘れずに報告・連絡・相談するように心がける。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 調理実習の際、学生の前で示範を行うが、前期と比べて簡潔に進めることができたと感じる。ただ、その後の調理作業について、班によって人数にばらつきがあり、終了時間に差が出てしまうことにもつながるため、班編成の組み方の再検討、メリハリのついた時間配布の提示など、授業の進め方の見直しも必要と感じた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 共有すべき内容は声を掛け合いながら共有できている。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．班編成に関しては、学生への負担がかからないような配置にする。また、実習全体の流れをタイムスケジュールとして提示し、学生にもメリハリのついた行動をとってもらうようにする働きかけをする。（担当教員と要相談） ２．報告・連絡・相談の徹底を今後も続けていく。	

令和元年度　「内山　美保」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　実験科目の担当助手として、教員や学生のサポートに当たる。 ２．「報告・連絡・相談」を意識する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．まず、授業前の準備や内容の把握等を細かに行う。授業中は、実験の手順や使用器具の記録を確実に行うなど、次年度以降の授業も見越した行動をとる。また、化学実験室内の薬品や器具、機器の管理を並行して行っていく。 ２．業務中に生じた疑問点や変更点などは、教員や実習助手間で話し合い、連絡ミス等がないようにする。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」 主に実験の担当助手として１年間業務を行ってきた中で、授業前の準備や授業の記録は徹底して行うことができた。しかし自らの知識・経験不足等により、授業中の臨機応変な行動や学生の質問に対する適切な対処ができていない部分もあった。 ２．自己評価「　Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ　」 実習助手間では、「報告・連絡・相談」を意識して行うことができた。授業においては、提出物の遅れが目立つ学生もいたが、担当教員への連絡や学生に対する個人的な声掛けを行った。一方、「管理栄養士国家試験受験対策講座」の担当助手を行う中では、受講希望者数の連絡等において担当教員に報告漏れがあった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．１年間の経験を活かし、次年度の実験では先を見越して臨機応変に対応することを心掛けたい。また、専門分野の勉強にも力を入れたい。 ２．次年度も引き続き「報告・連絡・相談」を徹底していきたい。また、担当となる「管理栄養士国家試験受験対策講座」「栄養士実力認定試験」「キャリア支援」では、受講者募集期間や模擬試験前など業務の間が空く期間にも担当教員への報告を心掛けたい。	

令和元年度　「前田　功」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務局長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．円滑な事務局運営に向けた各取組の推進 ２．　教務システムの完成 ３．ＳＤ研修の計画的実施と朝礼の利用	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　円滑な事務手続きの実施に向けて各職員の仕事内容を精査し、担当替えの可能性を模索する ２．システム開発先と連携を強化し、常に情報交換等を行いシステムの完成をめざす ３．課題に向けたＳＤ研修会を実施するために、朝礼での情報交換を強化し、個々の事務職員のレベルアップにつなげる	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 事務局員２名が産休・育休のために場を離れ、１名のみの補充という中で業務を行った。各職員の業務内容の精査と担当替えの検討まではいかないまま、現状を維持することに専念していた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 システム開発先との連絡を密に行い取り組んできたが、相手先の対応が遅いなど問題点を抱える中では少しずつではあるが本学の修正事項への対応やシステムの完成に向けて前進しているように思われる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 事務局職員相互の連絡体制については朝礼における連絡の徹底など情報交換を行うことである程度相互理解が図られてきた。ただ計画的なSD研修会の実施までは至っていない。反省事項である。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．職員の体制を強化し、円滑な事務遂行のためにさらに情報交換等を密にしながら職員個々の力を向上させていく。 ２．システムの構築については少しずつではあるが、本来あるべきシステムが構築されつつある。いろいろな不備を一つずつ改善していくことで完成を目指していく。 ３．職員の個々のレベルアップのためにＳＤ研修会を実施することを最大の目標とし、取り組んでいく。その中で一人二役体制の構築を目指す。	

令和元年度　「髙井　達司」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：入試広報室長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．過去の経験を活かし、課題に直面した職員へのサポートを積極的に行う。

２．長崎女子高等学校（進路指導部）との連携を推進し、志願者増に繋げる。

３．オープンキャンパスや進路ガイダンス等を通して接触した全ての高校生に対し、誠意をもって個別の対応を行い、もって本学に入学させたい思いを増大させる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．事務局職員への目配りを心がけるとともに、教員からの相談も多いのでこれに丁寧に対応した。

２．進路指導部との情報共有を綿密に行ったほか、連携強化に向けた協議を学長とともに実施した。

３．常に高校生の側に立った助言に努めることで、信頼感を高めようと心掛けた。また推薦入試以降の全ての資料請求者に対し、個々の状況に応じた肉筆手紙を添えて対応した。また、短大見学を希望する生徒・保護者に対しては、希望する日程（土曜日）に沿って対応した。※3 年生 12 名（前年度 6 名）

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
特に認証評価に係る訪問調査には、過去の経験を通して助言を行った。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
次年度以降の連携講座を体系化し、早期の志願者囲い込みと継続的魅力発信を行うこととした。併せて連携講座の内容についても、高等学校のシラバスに準拠したものとするため、事前の担当者協議を行う仕組みを作った。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
推薦入試後の志願者 9 名の内 7 名はこれらの対応を行った者であった。個々への対応が如何に満足したものであったかを評価された。また短大見学（個別相談会）に参加した生徒 12 名の内 10 名が出願した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今後想定される会計検査院による実地調査に向け、事務局挙げての態勢作りが必要である。

２．今後 2 年間は漸減傾向にある当校への対応は、全体の募集結果に大きな影響を及ぼすことから、慎重且つ丁寧に行いたい。個々の事業が全て募集活動と位置づけられていることを、全ての教職員と共有したい。

３．次年度における県内在籍高校生の減少は大きい。個別相談会への参加者増を図るとともに、生徒一人ひとりに対し、これまで以上に懇切丁寧な対応に努めたい。

令和元年度　「原田　実輝」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．認証評価訪問調査に向けて、キャリア支援センター内の環境整備を行う。

２．学務システムの運用による業務の効率化を図る。

３．学生が相談しやすい雰囲気を作り、個々に合ったタイミングで支援を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１.訪問調査前に不要な冊子・書類の廃棄を徹底して行った。

２．各種証明書作成、学生の就職活動履歴、月別内定状況、就職活動状況総合分析、面談記録等でシステムを活用した。

３．学生が話したいタイミングを逃さず、可能な限り時間を割いて対応するよう努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

訪問調査前には用務員さん達の協力のもと、古い冊子・書類等を廃棄してかなりすっきりさせたが、書類棚の設置やファイリングシステムの変更等、時間をかけてじっくりと取り組まないと改善は難しい。

２.自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

証明書発行業務の関しては、システム化により時間の短縮を図ることができた。
日常業務に追われ、システムの不備、要望をこまめに業者に伝えることができなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

相談に来た学生に対しては、きちんと時間を取って丁寧な対応を行った。
なるべく学生が、自分の話したいタイミングで来た時にその場で対応できるように努めたが、今年度は来客が多く、学生を待たせてしまうことも多々あった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生が知りたい情報を学科・コース毎に見やすくまとめた資料を作成し、学生が自由に閲覧できるようにする。

２．ガイダンス等を通じた全体支援と共に、きめこまやかな個別支援を充実させる。

３．次年度は微調整を依頼しながら学務システムの完成を目指し、業務の効率化を図りたい。

令和元年度　「宮崎　伸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．会計課業務の計画的および正確・効率的な業務遂行。 ２．事務局内情報共有。関連担当部署だけでなく、事務局全体において業務分担や連携ができるよう体制の強化	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１.年・月・週毎の計画を立て確認する。 ２.事務職員の減員をカバーするため協力体制を確立する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・(Ａ)・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 現在個人として担当している会計業務については、スムーズかつ合理的に処理を行えたと感じている。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」 事務局内の情報共有が不十分と感じられ業務分担や連携が難しいと思われる。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．本年度の計画を継続し、実行・検証を行い、また事務局内における不具合の解消に努め、よりパフォーマンスを上げれるよう心掛けていく必要があると考える。	

令和元年度　「一瀬　章子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　会計業務(通常)について：ファイル整理を行う ２．　会計業務(監査･決算)について：・会計ソフトから出力できる資料を活用する ・月締めできるもの等の都度データ化に取り組む ３．事務分掌の作成をする	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　それぞれの綴りにタグをつけている(特に決算に関係するもの) 詳細が必要なものはファイルを別に設けているが、見やすさ･取り出しやすさに欠ける ２．会計ソフトからの出力される資料を活用している また随時入力を行っていることにより簡素化された部分がある ３．年に数回行われる業務については作成しているが、やや見にくい	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 毎月引落のものは通常払いと区別するとわかりやすい ２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学費関係は監査時に取りまとめることが多いが、月締め処理の必要性を感じる 分納､延納が年々増加し、把握しにくい ３．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 時期別､準備期間がわかるようなものが必要と考える	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　学費関係(煩雑になっている納入額等)の伝票作成について考える (入学金、入寮費、学費、寮費、食費等) ２．会計ソフトの活用 ３．年間カレンダーに準備期間を付記し、１冊のファイルにする	

令和元年度　「林田　翔太郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．他の課の業務の担当を視野に入れ、事務局内の業務への理解を広げる。 ２．効率的に業務遂行が可能となるよう事務処理方法等を見直す。 ３．学務システムについて、未対応分も含め、要望の整理と優先順位を決めながら改善を進める。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．学生課職員の休職に伴い、学生課の業務の一部を担当した。 ２．課内で業務の遂行スケジュール等の見直しを行った。 ３．学務システム開発元との定期的な打ち合わせを検討した。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 わずかではあるものの、学生課の業務の一部を担当することで他の課の業務への理解を深める機会になったのではないかと考える。次年度より始まる高等教育の修学支援新制度に向け、事務局内での情報共有や連携をより密に行う必要があるものと考える。 ２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 事務処理要領の見直しという点では成果が得られなかったが、課内で業務の遂行スケジュール等を見直し、業務を単身で請け負うこととなっても、問題なく業務の遂行が可能となったのではないかと考える。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 学務システム開発元との定期的な打ち合わせを検討し、先方と相談を進めていたのの、結果的に実現に至らなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．高等教育の修学支援新制度の対応に向け、事務局内での情報共有や連携をより密にして業務を遂行する。 ２．課内タスクや業務遂行スケジュールを必要に応じて見直し、計画的かつ円滑な業務の遂行を図る。 ３．学務システム開発元との定期的な打ち合わせの実現に向けて企画する。	

令和元年度　「藤田　紫織」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　SNS を上手く利用した広報活動、募集活動を行う。

２．　HP の内容を見直し、新着情報の更新頻度をあげる。

３．　自分の業務内容だけでなく、他部署の業務も把握しサポートを行い、他部署の人が休みでも対応できるよう事務局内の連携に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　高校生が多く利用しているインスタグラムで、高校生が知りたいであろう情報を発信する。

２．　パンフレットの内容やデザインに合わせて変更し、学内外でのイベントを新着情報に更新する。

３．　他部署が繁忙期になる際は、自分に出来ることがないか積極的声掛けを行いサポートする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　授業が行われている期間は、写真映えする授業などの紹介を行うことが出来た。しかし、長期休暇中は話題がなく、あまり更新することが出来なかった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」
　パンフレットの内容に合わせることは出来たが、活用できていないページや更新が出来ていないページがあった。また、新着情報については入試広報室からのお知らせは掲載することが出来たが、学科コースで行ったイベントの紹介はあまり出来なかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」
　自分の業務で精一杯で行事前等に協力して行う業務は出来たと思うが、他部署のフォローをするための積極的な声掛けは出来なった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　頻繁にインスタグラムが更新できるよう、学生アンバサダーに協力してもらい授業紹介や休み時間の過ごし方など毎週必ず更新するよう徹底する。

２．　ホームページのスマホ版製作に伴い、誰が見てもわかりやすいように内容・デザインの見直しを行う。

３．　入試制度・奨学金が新しくなったため、受験生に正確に説明できるよう出願方法や選考条件をしっかり把握する。

令和元年度　「伊藤　理恵子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：図書館	職名：司書

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生・教職員の読書活動および学習（実習）活動の支援を行う

２．保育園・幼稚園や高齢者サロンなどでのお話会や読み聞かせボランティアによって、地域貢献活動を行う

３．館内整備やイベントの開催などにより、学生・教職員の図書館利用促進に努める

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 学生および教職員に書店へ直接出向いて選書してもらう、学生選定図書（前後期各１回・学科コース２名ずつ）の実施。学生が読みたい本・教職員が薦める本を購入し、ＰＯＰを添えて展示した。

2. 茂木・小島地区地域包括センターの認知症カフェや高齢者サロン、保育園などでお話会を行った。(6/20、8/28、9/12、10/10、2/20　計５回)

3. 長崎件図書館協議会　ライブラリーラバーズ合同企画　参加型ゲームイベントの実施。10/24～11/18 まで参加者　24 名。
館内整備として、書庫内の古い寄贈本の洋書９８冊を除籍。除籍したものは、全て長崎県立図書館へ寄贈した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生選定図書で購入した本が貸し出される機会が多かった。学生からの購入リクエストも数件あり、読書に興味をもってもらう一助になっていると思われるので、来年度以降も実施していきたい。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度　計５回のお話会の実施により、高齢者や子どもたちに絵本や紙芝居などを通じて、楽しんでもらえたと思う。来年度以降も、地域貢献活動として行っていきたい。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
大きなイベントを年に１回では、その機会を逃すとなかなか来館のきっかけにつながらないのではないかと感じた。
古い洋書９８冊を除籍し、長崎県立図書館へ寄贈できたことはよかったが、古くて利用頻度がゼロに近い蔵書も多いため、引き続き館内整備を行っていきたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１. 学生・教職員のよりよい読書および学習活動を支援していくため、図書館規定や各学科コース向けの逐次刊行物（雑誌）のラインナップの見直しを図るなど、学生・教職員のニーズに合わせて現状にあった図書館サービスへの改善を行う。

２．保育園・幼稚園や高齢者サロンなどでの絵本や紙芝居を使ったお話会を開催し、地域貢献活動を行う。

３. 大きなイベントを年に１回ではなく、小さなイベントも複数回開催し、資料の除籍も含め館内整備を行って、学生・教職員がより来館しやすい図書館を目指す。

令和元年度　「海保　佐知子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：寮監長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　寮生の共同生活における日常の基本的な規則の重要性・自治能力の育成。

２．　役員に於けるリーダーシップの育成。

３．　短大・高校の教員と寮職員間の情報共有の徹底。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．寮務委員と連携を図りながら共同生活の在り方を振り返りさせ、自治能力の育成の為のミーティングを実施。規則違反を起こした寮生に対しては個別に指導、度重なる寮生に対しては更に学生部長、寮務委員長・チュウターに指導をお願いした。

２．月１回の役員との代表者会議に寮務委員長に出席頂き指導をお願いした。今年度は高校の寮長・副寮長も参加させ、夫々の立場での意見を出し合い、共通認識を持たせた。

３．短大・高校の寮務委員との会議を実施、情報交換を図った。更に今年度は寮務日誌を高校へFAXする事で寮生の動向を報告。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
指導を受けた寮生については少しづつではあるが成長が見られたが、全体的に指示待ちの傾向があるので一人一人の意識づけに苦慮した。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
指導を受けた事により長としての自覚が少しは芽生えたようだが、専攻・学科によっては、学業で一杯になっており思いとおりに成長させる事ができなかった。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
高校・短大の寮務委員の調整が難しく今年は合同での寮務委員会が１回のみに終わった。しかし、毎日の寮務日誌を高校へＦＡＸする事により、情報共有ができ素早い対応がなされた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．寮生にとっての共同生活に於ける基本的な規則の重要性・自治能力の育成の徹底。

２．役員のリーダーシップの育成。

３．短大・高校の教員と寮職員との情報共有の徹底。

令和元年度　「海保　都惠子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：副寮監

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　日常に於ける環境美化に対する意識づけの育成。

２．　寮生の共同生活に於ける規則遵守の意識づけの育成。

３．　日常生活に於いて環境に馴染めない寮生を把握して、積極的なコミニュケーションを図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１.日常の生活に於いて、不可欠な掃除の徹底ができるよう指導、サポートした。又、寮生が集うロビー・玄関先にお花を置き、女性としての完成を目覚めさせる事を図った。

２．　共同生活をとおし、規則遵守の重要さを認識できるよう、違反者に対しては軽度の違反であれば指導、罰当を科し、違反が度重なる寮生については学生部長・寮務委員長・チュウターに指導を依頼した。

３．入寮直後に速、把握。問題ある寮生に対しては逐一積極的に声掛けをして、相談しやすいよう、常にコミュニケーションを図り、信頼関係を構築していった。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」
家庭環境の違いからきちんとできる子、いい加減、しないの３パターンがあり現状では徹底できなかった。２年間をとおし根気強い指導が必要と感じた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
指導を受ける事に因り少しの改善はみられるが、違反をする寮生は大体、顔ぶれが決まっており、これについても根気強い指導が必要と感じた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
入寮してくる寮生の資質に波があり、今年度の入寮生は全体的に安定していたが、２年生の中に特出した寮生がおり対応に苦慮したが無事に卒業できたので、ある程度の成果はあったものと思われる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　日常に於ける環境美化に対する意識づけの育成。

２．　日常の共同生活に於ける規則遵守の重要性の意識づけの育成。

３．　コミュニケーションをとるのが苦手な寮生を把握して相談しやすいよう積極的な働きかけを行い信頼関係の構築を図る。

令和元年度　「大場　恵美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：寮	職名：副寮監
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　寮生の支援 ２．情報の共有化	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１.寮のルールを元に指導と、何かあった場合はすぐ学生部長や寮務委員長に相談、寮生の面談等をお願いし、寮生がルールを自ら守ることが出来るようにして行く。 ２．　引継ぎ書・寮務日誌、メモ等、忘れずに記入し、また口頭でも連絡する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・B・Ｃ・Ｄ 」 2 年生が寒い時期になると、点呼や掃除をさぼる子が出て来るが、各階にそういう子がいても、1 人では全部対応することが出来なかった。 ２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 引継書やメモを出来るだけ、詳しく記入しているが、年度末は新しい人の教育等で引継書等、詳細に記入出来なかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．寮生の役員と連携して、やっていきたいと思う。 ２．年度末と年度初めに向けて、早いうちから、計画を立てて行動していきたい。	

令和元年度

「研究活動報告書」

専任教員の研究活動状況表（役職順）

平成27年度（2015）～令和元年度（2019）（過去5年間）

氏名	職位	研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	備考	頁
		著作数	論文数	学会等発表数	その他				
橋口　亮（S）	教授	1	5	0	1	無	有		
森　弘行（L）	教授	0	1	0	0	無	有		
織田　芳人（Y）	教授	0	2	1	0	無	有		
中澤　伸元（Y）	教授	0	0	0	3	無	有		
松尾　公則（Y）	教授	2	8	2	0	無	有		
長尾　久美子	教授	0	4	0	2	無	有		
白石　景一（Y）	教授	0	2	0	1	無	有		
武藤　玲路（L）	准教授	1	13	6	0	無	有		
濵口　なぎさ（L）	准教授	0	7	1	2	無	有		
山口　ゆかり（S）	准教授	0	7	0	0	無	有		
島田　幸一郎（Y）	准教授	0	5	0	0	無	有		
古賀　克彦（S）	講師	0	6	0	0	無	有		
中村　浩美（Y）	講師	0	4	1	25	無	有		
本村　弥寿子（Y）	講師	0	8	2	0	無	有		
荒木　正平（Y）	講師	0	10	4	1	無	有		
福井　謙一郎（Y）	講師	1	5	0	0	無	有		
光武　きよみ（Y）	講師	3	14	1	6	無	有		
蛯原　正貴（Y）	講師	1	9	3	5	無	有		
江頭　万里子（L）	講師	1	7	1	0	無	有		
船勢　肇（Y）	助教	1	4	2	4	無	有		
桑原　倫子（S）	助教	0	1	0	0	無	有		
桑原　真美（S）	助教	0	1	0	0	無	有		

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】教授　　【氏名】橋口　亮

【研究の題目】トランスグルタミナーゼ製剤を添加したクジラ肉のソーセージについて

【研究の概要】

これまで、著者らはクジラの赤身肉を原料としたソーセージパテにトランスグルタミナーゼ（以下、TGase と略す）の添加が与える影響について検討してきた。その結果、TGase がクジラの赤身肉の結着力を高める効果を確認することができた。そこで今回、第４報に記載した方法でクジラ赤身肉のソーセージパテを調製し、羊腸詰にした後、燻煙処理をし、ソーセージを製造した。また、クジラの赤身肉だけのソーセージは、食感やうま味に欠けると考えられるので、第１報で試作したとおり豚の背脂を配合し、乳化の状態と TGase との作用について検討した。前報では、クジラ赤身肉の臭みの除去と硬さを強くする目的で、水晒しと坐りの工程を見直し、クジラ肉特有の臭みを除去し、低温で坐りを行った。その結果、ＴＧａse の効果がみられ、硬いソーセージパテを調製することができた。そこで今回、ソーセージの形状に加工した。結果は下記のとおりである。

（1）クジラのソーセージパテは、背脂を配合したパテでもＬ*が低く、ａ*はポークソーセージのパテより高く、ｂ*は低い値を示した。

表１　ソーセージパテの色調

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
L*	60.3	39.4	53.1
a*	5.9	6.5	6.7
b*	18.5	7.7	11.7

（2）クジラのソーセージの断面の色は、ポークソーセージよりＬ*が低く、ａ*が高く、ｂ*は低い値を示した。

表２　ソーセージの断面の色調

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
L*	68.4	51.1	54.3
a*	4.9	15.1	13.8
b*	9.0	6.5	7.0

（3）食感の測定のうち、弾力性と脆さは、ポークソーセージもクジラのソーセージも変わらなかった。

表３　ソーセージの硬さ、脆さおよび弾力性

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
硬さ (N)	13.4	29.5	18.5
脆さ	3.8	3.7	3.8
弾力性	9.2	9.2	9.1

（4）硬さは、クジラのソーセージのうち、赤身肉のソーセージが非常に高く、ポークソーセージの２倍以上の硬さであった。

（5）クジラの赤身肉に対するＴＧａse の効果はみられたが、豚の背脂を配合すると、ポークソーセージよりは高いものの、硬さが弱くなることわかった。

（6）官能検査の結果、赤身肉のソーセージは、かなり硬く、弾力性もあり、かなりの歯ごたえであった。

（7）豚の背脂を配合したクジラのソーセージは、硬さはよかったが、肉質にパサつきがあり、背脂との結着ができていないと感じられた。

（8）味覚は、クジラ肉特有の臭みは少なかったが、うま味に欠けるソーセージであり、課題を残す結果であった。

ポーク

クジラ赤身肉

クジラ赤身肉＋背脂

写真１～３　ソーセージの外観

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】教授　　【氏名】森　弘行

【研究の題目】情報処理教育に関する研究

【研究の概要】

・ 学修支援のためのデータベース構築

2013 年より、学生の学修支援のためのデータベース構築を継続している。整備が待ち望まれていた公式の学務システムは、2017 年度より運用が始まった。しかし、2016 年度以降の入学生データしか収録されておらず、現在もシステム自体の改修、開発作業が継続している。学務システムは、教職員が業務上使用する機能から順次開発されており、学生が利用できる機能は履修登録とその確認程度でまだ限定的である。

これに対し、本システムでは学生も自分の単位取得状況、成績、検定試験などの資格取得状況、就職活動等が確認できるようになっている。同時に全学的な学務システムの整備も行われているが、データや機能が未整備のものもあり、相互のデータ移行作業を行うことで、業務を補完するような形態で利用している。

本研究の最終的な目的は、学生の様々なデータをリンクし、横断的に分析、学生支援や教育改善に活用する IR（Institutional Research）の構築であり、本システム、学務システムとデータ分析システムとの連携、そしてそれを学生や教職員へフィードバックし、更なる教育の質の向上、学生の目標達成に貢献することである。

今年度は、本システムを稼働させていた OS を Ubuntu から CentOS 7 へ変更し、これに伴い Web サーバー、PHP を新バージョン 7.3 に移行した。また、開発が終了している MySQL は、後継の MariaDB 10.3.15 に移行した。このため、PHP の Excel や PDF のインターフェース、MariaDB のデータベース操作など、プログラムコードの大幅な書き換え作業を行った。

本システムは、Windows 2008 サーバー上の仮想計算機（Oracle Virtual Box）で運用しているが、Windows 2008 のサポートが 2020 年 1 月で終了しているため、早期に学務システムへの移行、もしくは本データベースシステムの新サーバーへの移行を検討する必要がある。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】織田　芳人

【研究の題目】

(1) 保育学生に対するプログラミング教材としての知育玩具の活用

(2) 保育で使われる漢字の収集と分析（共同研究）

(3) 対象物の長さの認知における視覚と触覚・運動感覚の協働に関する実験

【研究の概要】

(1) 2017年3月に「小学校学習指導要領」が改定され、2020年）4月から小学校にプログラミング教育が導入されることになった。また、小学校教育との円滑な接続を図ることが求められたので、近い将来、保育・幼児教育においてもプログラミング的思考を育成することが期待されてくると考えられる。結果として、保育学生に対するプログラミング教育の導入が必要になることは容易に推測される。しかし、本学幼児教育学科の学生を見る限り、PCを不得手とする学生が少なからず存在するので、プログラミング教育を導入するとしても、その教育方法は慎重に検討されなければならない。そこで、注目されるのがコンピュータを用いないアンプラグド・プログラミングである。本研究では、より円滑なプログラミング学修を実践するため、アンプラグド専用教材の代替として「ロジカルルートパズル」と称される知育玩具による体験学修をヴィジュアル・プログラミング学修の予備的段階として組み入れて、その有用性をアンケート調査によって検討した。ヴィジュアル・プログラミング学修には文部科学省が提供しているオンラインツール「プログラミン」を利用した。その結果、ヴィジュアル・プログラミング学修に対して好意的な結果が得られたと推測された。一方、ルートパズル体験学修とプログラミン体験学修との関連性に対する意識は高くないと推測された。2019年度長崎女子短期大学学長裁量経費の助成を受けた。

(2) 基礎学力としての漢字力の不足が実習先・就職先の幼稚園・保育園等の施設から指摘されることが増えてきた。本学幼児教育学科における2016年度生を対象とした就職先調査結果の自由記述においても指摘された。そのような状況を改善するため、保育で使われる漢字の収集と分析を行い、幼児教育学科として漢字力向上策を検討できる資料を作成することが本研究の目的である。2018年4月から『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』のいわゆる保育3法令が改訂された。そこで、『幼稚園教育要領』の全文をExcelデータ化して、分析対象とする語を名詞、及び、言い切りの形が「だ」で終わる形容動詞とし、計量テキスト分析ソフトKH Coderによって検討した。どのような語が多く出現しているかは「頻出150語」によって知ることができ、語と語の結びつきの強さは「共起ネットワーク」によって知ることができるので、「頻出150語」と「共起ネットワーク」を組み合わせれば、漢字力向上のための学修資料として、どのような漢字あるいは漢字群を提供すればよいかの指標が得られると考えられた。2019年度長崎女子短期大学学長裁量経費の助成を受けた。

(3) 造形という行為は、主として視覚と触覚・運動感覚の協働によってなされるといえる。また、見るということには、視覚だけでなく、触覚・運動感覚も係わっていると考えられている。より具体的にいえば、視覚は眼であり、触覚・運動感覚は運動を伴う手と考えられる。本研究では、視覚と触覚・運動感覚の協働がどの程度かを知る手がかりを探るため、対象物の長さを捉える実験を試みた。その結果、(1) 対象物の長さを捉えるには触覚・運動感覚よりも視覚を用いるほうがより正確に捉えることができる、(2) 対象物の長さを捉えて示すには同一の手の触覚・運動感覚を用いるほうがより正確に捉えて示すことができる、と推測された。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】中澤　伸元

【研究の題目】園児の可能性を引き出すために身に付けておかなければならない指導法と訓練

保育者としての可能性を引き出すためには、まず保育者と園児の信頼とお互いの貢献感の関係がどうあるべきかが最も重要だと考える。保育者の役割は、園児に自信と勇気をもたせてあげるために、ポジティブディシプリン、肯定的なしつけ教育に力を注ぐ必要がある。園児は家庭環境によって悩みや困難をたくさん抱えている。そのため、園児を勇気づけて支えてあげることが保育者の仕事である。

園児一人一人が保育者との信頼関係、園児同士の共感感覚を養ってあげることを第一の目的とする。
園児たちができないこと、努力しないことなどは園児の問題であって、保育者の問題ではない。園児の問題に対して保育者の価値観でガミガミ言うことなくじっくりと見守り、園児の立場に立ってやることが必要である。保育者の意見を通すのではなく、園児の問題として意見を聞き、園児の希望をかなえることでより活発な可能性が生まれてくる。

卒研授業では、いろいろな問題点は、全員の課題として取り組み解決してきた。学生達の間が、仲間とのつながり、お互いが敵ではなく、仲間であると言う信頼関係が生まれ、問題解決していく姿は感動するものがある。
私は学生たちを信じ、質問に対し応えるようにしてきた。私は信じ見守るだけで良いと考えている。学生を信じていれば学生はちゃんと課題の答えを出してくる。それがどんな答えになろうと、学生にとっては正解である。学生にとっては、体験することが最大の学びだからだ。結果として教員の予想を上回る感動的な結果を出してくることもある。コツやポイントを肌感覚で理解してくれているからこそ成果を出してくれているのだと考えている。一人一人の学生の状態にあったサポートさえすれば、学生たちは無限のパワーを発揮してくる。

【研究の概要】
卒研メンバーのテーマ
人間は、一人一人完全である。　誰でもやればできる。　興味関心あることに完全燃焼。
一人一人はエネルギーが違うことからそれぞれが自分の答えを持っている。したがって正解はなく、正しさがそれぞれ違う。
他人の意見、表現を否定せず受け入れる立場で相手の考えを理解する努力を大切にする。
問題解決、行事発表、個人の悩み解決には時間をかけて話し、理解しあった。
技術発声、歌については、息の使い方、共鳴のさせ方、喉の開閉、振動について学ぶ。
個々の悩みを話し合い助け合う。
ピアノについてはコードの使い方、アレンジ方法、拍子感覚、リズム感覚の選択についての質問とアドバイス。
表現については、イメージ、姿勢態度、行動、ゴール設定、声の選択、思い、声、身体表現の一体化など一つ一つについての研究。
研究成果をそれぞれ披露。
ネガティブ発言の禁止、ポジティブ言葉の研究

「訓練」として
一人一人鏡と向き合う。
自分が話したら鏡の自分がアドレナリンを引き出すポジティブな反応をする。
仲間と二人で向かい合い会話する。　・お互いが未来志向になるまでポジティブ会話訓練。
音楽表現それ自体がアクティブラーニングであると考えているので、能動的に学ぶ授業に取り組んでいると思う。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】松尾　公則

【研究の題目】

（１）　**子どもと自然環境という卒研ゼミでできること**

平成元年度紀要（長崎女子短期大学）第 45 号 p62-71

（２）　**長崎県に生息する 4 種のヤモリ属**

長崎県生物学会誌（長崎県生物学会）第 82 号 p33－37

（３）　**雲仙アザミ谷の人工池で確認した両生類**

長崎県生物学会誌（長崎県生物学会）第 82 号 p18-19

【研究の概要】

（１）　子どもと自然環境という卒研ゼミを担当し、学生が自然について少しでも興味関心を持つよう活動している。活動は次の 3 つの目標を立て実施してきた。

① 将来、幼児教育の教育者となるゼミ生自身が生き物や自然に親しむこと

② 何らかの動物（中心はカエル）を飼育することで動物とのかかわり方を学ぶこと

③ カエルの研究を通して学んだことを、特別支援学校や実習先で発表すること

3 つの項目についてそれぞれ報告したい。①については、近くの山に登山することや構内の自然を学ぶことで大きな成果を得ることができた。自然の楽しさを自らの体験で学ぶことができたと思う。②については、オタマジャクシの飼育を経験することで、生き物を飼育することの楽しさと難しさを学ばせることができた。飼育後、変態した幼体を自然に放すときの感動は大きなものがあったようだ。③については、長崎特別支援学校の小学部 4 年生でカエルの授業を実施できた。重度の障害を持つ子どもたちに、伝えたい内容をどのようにして伝えるかの実践は大きな学びになったと思う。また、各実習先の幼稚園では、最後の研究授業でカエルのことについて発表することとした。自分で飼育しているオタマジャクシについて発表し、各自工夫を凝らした内容は園児や園の先生方にも評判がよかった。

園児たちの自然に関する興味の欲求に応えられるような先生の育成を目指して今後も更なる工夫が必要であると思う。

（2）長崎県には 4 種のヤモリが生息している。30 年以上、島嶼を中心とした分布調査を実施しているが、その結果を、長崎県生物学会誌 84 号（2019 年 6 月 30 日発行）に投稿した。タイトルは「長崎県に生息する 4 種のヤモリ属」で、6 ページになる。簡単な内容は、長崎県に生息するニホンヤモリ、ニシヤモリ、ミナミヤモリ、ヤクヤモリの島嶼ごとの分布についてまとめたものである。長崎県全域に広く分布するニホンヤモリ、五島灘周辺の島嶼や本土部の海岸に分布するニシヤモリ、中通島とその近辺だけに分布するミナミヤモリ、長崎港沖に点在する 3 つの無人島だけに局所的に分布するヤクヤモリとなる。長崎県は島嶼が多く、島ごとに生物相が異なっている。ヤモリ属に限らず島ごとの生物相を調べることは、島の成り立ちや島の歴史にも関わることと思うので、今後も継続して調査を実施したい。

（3）雲仙アザミ谷には人口の小さな池が存在する。野鳥愛好家が野鳥のために作った水場である。2015 年、この池でニホンアカガエルの卵塊を発見した。その後、2019 年まで 4 年間にわたって調査を実施し、人口の池を利用して産卵する 3 種のカエルと産卵はしないが水場として利用する 2 種を確認した。水場の少ない雲仙山系において特殊な生態を有しているものと思われる。ちなみに、産卵するカエル 3 種は、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエル、タゴガエルである。偶然水場で目撃したカエル 2 種は、とのさまがえる、ツチガエルである。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】人間教養教育　　【職名】教授　　【氏名】長尾　久美子

【研究の題目】

学生の社会福祉に関する意識の向上を図るための教育の在り方について

【研究の概要】

１　目的

「児童家庭福祉」「社会福祉概論」の受講生について、社会福祉関連職場に就職する者として、また、社会人としても、社会福祉の基本を習得する必要があるため、社会福祉の理念や、社会福祉・社会保障制度、対人援助の在り方を理解を深め、社会福祉に対する意識の向上を図るための教育の在り方を研究する。

２　方法

① 保育士は、児童福祉法に基づく福祉の専門職であり、「児童家庭福祉」の授業を通して、求められる人間尊重の意義、保育士資格の制度的な位置づけ、児童福祉施設や子育て支援制度の仕組みなどの理解し、保育士として基本的な知識を身に着け、実践につなげることが必要である。
そのために、学生が興味を持てるように、DVD や、身近に起こっている児童虐待の事例、里親さんからの話などを取り入れ、主体的に考えられるような授業を工夫しながら進めた。

② 「社会福祉概論」を受講する栄養士コースの受講生は、この科目が資格取得の必須科目であり、また、ビジネス医療・秘書コースの受講生は、医療・福祉の事務的な職種として就労する場合があり、また、社会福祉主事任用資格取得のために必要な科目となっている。
この、「社会福祉概論」の受講生は、社会福祉を初めて学ぶところから、身近な生活と社会福祉の関係、実際に起こっている社会の出来事などをすぐに取り入れたり、DVD などを活用し、社会福祉の意味を理解できるように工夫した。また、栄養士実力試験の問題等を取り入れ、求められる知識の習得と成績の向上につなげるようにした。

３　結果

① このような取り組みにより、幼児教育学科の学生については、社会福祉に関する理解及び意識の向上を図ることはできたのではないかと考える。

② 一方、「社会福祉概論」の受講生については、わかりやすい授業に努めたが、「社会福祉概論」受講生の成績評価が、Ｓ・Ａが５４．８％である反面、C 評価が２９．０％と理解度の二極化が見られた。
熱心に受講し、主体的に参加する学生と、欠席が多く、関心を示さない学生がいた。

４　課題

「社会福祉概論」受講生の成績の二極化については、授業の在り方を改善することが必要である。
通常の授業を真面目に受講し、授業で配布したレジメ、過去問題を復習しておくことで、成績はＳ・Ａレベルに到達できるものであり、授業の全体的な進め方については、概ね、問題はないと考える。
しかし、C 評価が２９．０％の学生については、欠席が多かったり、授業で配布したレジメ、過去問題などの復習を全くせず、試験に臨んでいるものと思われる。
今後は、全体的なわかりやすい授業の方法のみでなく、一人一人の受講態度や、理解の程度を把握しながら、個別に質問したり、課題の与え方を改善したりして、個別の視点を取り入れた授業展開を研究していくことが課題である。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】特別専任教授　　【氏名】白石景一

【研究の題目】

１．音楽表現における感性・知性・理性・思想などの運動・音色感などとの関係について。
　研究概要：チェロ奏法・指導法およびアンサンブル法などによる。

２．保育者養成校の音楽教育における教材研究および指導法について。
　研究概要：（１）音楽教育におけるＤＴＭなどの利用について。
　　（２）保育者養成校における音楽初心者への基礎能力教育などについて。

【研究の概要】

１．チェロ奏法の研究については、一昨年の２月頃より、左手中指の「ばね指」の発症により、あまりできない状態が続いている。
　今後、楽曲のアナリーゼや編曲・作曲などに軸足を移していきたいと考えているが、現在のところ様々な楽曲のデータベース作成について検討中である。

２．（１）DTM などを利用したマルチメディアによる教育システムについてはハード、ソフトの両面において刻々と進化し続けており、何年かするとまた、格段と優れたシステムが開発され、システムごと変更しなくては追いつかないような状況になる可能性が高いため、導入は、非常に難しいようである。ノーテーターソフトの「シベリウス」(AVID)「フィナーレ」(Make Music)「スコアメーカー」(KAWAI)の利用についてそれぞれの汎用性、特徴、スキャン機能、ＤＡＷソフトとの相性などについて、実際に使用しながら、検討したが、現在のところアップル社向けのロジックについて検討中である。
（２）この一年間は、「子供と表現（音楽)」について、これまで３０時間での講義内容を１５時間で、いかに効果的に凝縮してあるいは割愛したりして、より効果的に教えることができるかを検討しながら授業に取り組んだ。
　やはり、音楽経験に大きな差がある学生が入学してくる現状から、どこに焦点を当てて教えるべきかが、先ず大きな課題である。このことに対しての対策の一つとして、なるべく個人個人の課題チェックを毎回の授業の中で行うことを心掛け、①読譜の基礎、②伴奏法の基礎、③保育内容領域「表現」の育成にかかる音楽的指導法の３本柱での凝縮を検討した。
　来年度は、新型コロナウイルス対策を十分検討し対応する必要がある。換気や消毒はもとより、まずは教室の広さに対して学生数がふさわしいかどうかの基準が必要ではないかと考える。もっと広い教室を検討する必要があるのではないか。授業の方法もなるべく接触を少なくすることや、マスクをするなど感染を確実に避ける方法を考える必要があると考える。それには、それ相応の施設設備の充実をしっかり行う必要があると考える。

以上

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】准教授　　【氏名】武藤　玲路
【研究の題目】女子短大生の学習意欲に関する研究
【研究の概要】

１．本研究の目的

これからの短期大学等の高等教育機関には、教育の質保証、質的転換、特色化が強く求められている。これらを実現するための教学マネジメント体制の構築やＰＤＣＡサイクルの確立には、上述した学習意欲の高揚が必要不可欠である。特に、アクティブラーニングが目指す「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」には、学習意欲が重要な原動力となっている。

そこで本研究は「女子短大生の学習意欲に関する研究」の第一段階として、学習意欲の規定要因に関する自由記述の質問紙による予備調査を実施し、後続の本調査に資する基礎データを収集することを目的とした。

２．「最もやる気が出た授業」について

⑴ 授業科目の名称

短大時代に「最もやる気が出た授業科目の名称」である。横棒グラフの並べ方は上から「ビジネス系」「秘書系」「コミュニケーション系」「その他」の領域別に並べている。最も多かった回答は「ビジネス文書作成」と「生涯スポーツ」であり、科目の領域に類似性はない。よって、学生のやる気と「授業科目の領域」には関連がないことが分かる。

⑵ 授業の到達目標

「最もやる気が出た授業の到達目標」である。最も多かった回答は「検定試験の合格」であり、その他のすべての回答が自分の将来のために役立つ知識や技能の習得である。よって、学生のやる気には「就職や将来の役に立つスキルアップ」が関連していることが示唆される。

⑶ 授業の内容や教え方

「最もやる気が出た授業の内容や教え方」である。最も多かった回答は「検定問題の回答と解説」であり、その他のすべての回答が演習や実習などの能動的で主体的な学習である。よって、学生のやる気には「アクティブラーニングの要素」が関連していることが分かる。

⑷ 授業の特色や魅力

「最もやる気が出た授業の特色や魅力」である。最も多かった回答は「実践的で将来の役に立つこと」であり、その他の回答は「分かりやすく理解しやすい」「先生が優しく教えてくれる」「授業が楽しい」など、すべて教員の教育力や人格の要素を含んでいる。よって、学生のやる気には「教員の教育力や人格」が関連していることが示唆される。

３．「最もやる気が出た活動やエピソード」について

⑴ 活動の名称や内容

短大時代に「最もやる気が出た活動の名称や内容」である。最も多かった回答は「アルバイト」である。よって、学生のやる気は「金銭的報酬を伴う労働」と関連していることが分かる。

⑵ 活動の魅力

「最もやる気が出た活動の魅力」である。最も多かった回答は「収入があり買物や娯楽や貯金ができる」であり、その他の回答は「働くことが楽しくやりがいや充実を感じる」「ここでの経験が自分の将来の役に立つ」「人との交流や感謝の言葉が嬉しい」「ストレスを発散してリフレッシュできる」など、すべて金銭的報酬や充実・向上・感謝などの心理的報酬の要素を含んでいる。よって、学生のやる気には「物理的報酬と心理的報酬の両方」が関連していることが示唆される。

⑶ 最もやる気が出た言葉や態度

「最もやる気が出た言葉や態度」である。これらの回答には、前述の先行研究で述べた「自己調整学習」の重要な心理的要因である「心理的報酬」「自己効力感」「自己決定」「達成動機」が含まれている。よって、学生のやる気の高揚には「自己調整学習の心理的要因」が有効であることが示唆される。

⑷ 最もやる気が出た状況

「最もやる気が出た状況」である。これらの回答には、表１と同様に「自己調整学習」の重要な心理的要因である「心理的報酬」「自己効力感」「自己決定」「達成動機」が含まれている。よって、学生のやる気の高揚には「自己調整学習の手法」が有効であることが示唆される。

以上が本稿の「学習意欲（やる気）」に関する予備調査の結果である。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】准教授　　【氏名】濵口　なぎさ

【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究

【研究の概要】

(1) 目的

担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法

①「ゼミナール」では 3 年連続で「長崎と猫」をテーマとし、猫に関わる地域の問題を解決する方法として、調査研究した結果をリーフレットとしてまとめた。

②「登録販売者試験」対策講座の実施

(3) 結果

①今年度のゼミナールでは、配属された学生達のモチベーションが低く、グループ内でのチームワークがうまくいかなかった。

一昨年度・昨年度の先輩たちが作成したリーフレット「にゃがさきまっぷ」は、追加配布を希望されるなど取材先での評価も高く、継続を望む声が多かったことから、バージョンアップ版を作成した。昨年度と同様、猫関連グッズを販売する店や看板ねこの紹介を掲載したが、台風の影響などもあり、十分な活動はできなかった。また、時間割上のゼミの時間での活動は、前期は連絡調整と進捗状況の確認が主となり、後期は取材内容の整理、リーフレットの編集が主となった。教員は授業のはじめに今日のポイント確認、終わりに次回までの活動内容の確認を行い、調査研究活動の軌道修正を主とし、学生が見落とした点の修正に徹したが、今年度の学生に対しては、もう少し具体的な指導を行ったほうが良かったと反省している。

学生達は自主的に役割分担を行ってはいたが、4 名中 2 名は他人任せのところがあり、他の 2 名もリーダーシップをとることができなかったため、分担内容に偏りができ不満を抱いた学生もいたようである。ゼミの最終回に実施した自己評価でもこのことは明らかであり「最後までやり抜いた達成感」は 2 人が 5 段階評価で 5、他の 2 人は 4 を付けており、総合評価でも前者の 2 人は 100 点満点で 80 点以上、後者の 2 人は 60 点台であった。

次年度は、年度当初に自己評価を行い、最終回で同じ項目の自己評価を行うことで、ゼミ活動によってどのような力が身に付いたのか学生・教員双方が確認できるような取り組みを実行してみたい。

②昨年度に引き続き「登録販売者試験」受験希望者を対象とした対策講座を実施した。当初は 1 年生 12 名が参加し、昨年度受講し、合格には至らなかった 4 名の 2 年生は今年度受講しなかった。

昨年度の紀要第 42 号および、今年度の第 43 号でも報告したとおり、自学自習の習慣がついていない学生には反転学習は効果的ではないと考え、導入時は試験区分ごとに講義形式で概要を解説した後、課題として模擬問題を渡し、次回答え合わせをしながら、要点を深く確認するという方法を取った。最終的に 4 名が受験し、1 名が合格した。

残念ながら不合格となった学生たちの自己採点の結果などから、最も分量の多い「主な医薬品とその作用」について重点的な指導が必要であると感じており、次年度はこの分野の指導法について準備を重ね、実施したいと考えている。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】准教授　　【氏名】山口　ゆかり
【研究の題目】トランスグルタミナーゼ製剤を添加したクジラ肉のソーセージについて
【研究の概要】

１．目的

これまで、著者らはクジラの赤身肉を原料としたソーセージパテにトランスグルタミナーゼ（以下、ＴGase と略す）の添加が与える影響について検討してきた。その結果、ＴGase にクジラ赤身肉の結着力を高める効果があることを確認した。前報では、クジラ赤身肉の臭みの除去と硬さを強くする目的で、水さらしと坐りの工程を見直し、硬いソーセージパテを調製することができた。今年度の研究では、第４報に記載した方法でクジラ赤身肉のソーセージパテを調製し、羊腸詰にした後、燻煙処理を行い、ソーセージを製造した。また、クジラ赤身肉のみのソーセージは、食感やうま味に欠けると考えられるため、第１報に準じて豚の背脂を配合し、乳化の状態とＴGase との作用を検討した。

２．結果

（1）クジラのソーセージパテは、背脂を配合したパテでもＬ*が低く、ａ*はポークソーセージのパテより高く、ｂ*は低い値を示した。

表１　ソーセージパテの色調

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
L*	60.3	39.4	53.1
a*	5.9	6.5	6.7
b*	18.5	7.7	11.7

（2）クジラのソーセージの断面の色は、ポークソーセージよりＬ*が低く、ａ*が高く、ｂ*は低い値を示した。

表２　ソーセージの断面の色調

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
L*	68.4	51.1	54.3
a*	4.9	15.1	13.8
b*	9.0	6.5	7.0

（3）食感の測定のうち、弾力性と脆さは、ポークソーセージもクジラのソーセージも変わらなかった。

表３　ソーセージの硬さ、脆さおよび弾力性

	ポーク	赤身肉	赤身肉＋背脂
硬さ（N）	13.4	29.5	18.5
脆さ	3.8	3.7	3.8
弾力性	9.2	9.2	9.1

（4）硬さは、クジラのソーセージのうち、赤身肉のソーセージが非常に高く、ポークソーセージの２倍以上の硬さであった。
（5）クジラの赤身肉に対するＴＧａse の効果はみられたが、豚の背脂を配合すると、ポークソーセージよりは高いものの、硬さが弱くなることわかった。
（6）官能検査の結果、赤身肉のソーセージは、とても硬く、弾力性もあり、かなりの歯ごたえであった。
（7）豚の背脂を配合したクジラのソーセージは、硬さはよかったが、肉質にパサつきがあり、背脂との結着ができていないと感じられた。
（8）味覚は、クジラ肉特有の臭みは少なかったが、うま味に欠けるソーセージであり、課題を残す結果であった。

今後は、水さらしの程度や背脂の配合など、条件を検討する必要があると思われるが、今年度末で退職するため、本研究はこれで終わりとしたい。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】准教授　　【氏名】島田　幸一郎

【研究の題目】　「障がい児保育」の学修充実を目指した取り組みについて
～学生による授業評価アンケートの結果から～

【研究の概要】

1. 目的

本学学生の大半は、障がい児と接した経験が乏しく、1 年次での施設実習でも成人者施設が多いために、保育や教育の視点で障がい児と関わる機会が少ない。そのために、映像教材の活用などを漸次取り入れてきたが、主体的な学びの場を構築できていない。学生の多様化が進む中、学修内容の定着を図るためには、アクティブ・ラーニングを踏まえた一層の授業改善が必要である。本年度前期の授業について、学生による授業評価アンケート結果の分析をとおして、今後の授業改善のあり方を考察する。

2. 方法と内容

(1) 方法

本学幼児教育学科 2 年生全員を対象に、映像教材の活用及びグループ協議等を実施した前期授業 13 回について、2019 年 7 月 29 日にアンケート調査を行った。113 名の在籍学生に対し、当日欠席した 6 名を除く 107 名から回答があつた。

(2) 内容

「授業構成」「映像教材の活用」「グループ協議・発表」「講義」「プリント記入・提出」の 5 項目について、適切であったかや理解に役立ったかなどを質問し、「◎そう思う」「〇大体思う」「□どちらでもない」「△あまり思わない」「×思わない」の 5 段階で評価させた。

3. 結果

(1) 授業構成については、肯定的評価が 96%で否定的評価が 2%である。アンケートの記述からも、テーマに沿った映像を最初に視聴し、グループ協議・発表、講義、プリント記入・提出へと続く流れが授業の理解に役立っていると受け止めていることが分かる。

(2) 映像教材の活用に関しては、99%の学生が肯定的評価をしている。言葉だけの説明より、視覚からの情報で学修内容の理解が深まったことが窺える。特に、遺伝病に関わる出生前検査の映像を自分自身の問題と捉えて考えたり、重度の知的障がい児の生活の様子から、これまでの障がい観を見つめ直す機会になったとの回答が多くあり、今後も同様な映像教材を活用することに心がけたい。

(3) グループ協議・発表については、肯定的評価が 45%で否定的評価が 28%であり、最も改善を要するところである。活発に意見交換するグループとそうでないグループがあり、意見発表も同様で、積極的に挙手し発表する学生がいる一方で、全く手を挙げない学生が多くいた。

(4) 講義については、94%の学生が肯定的評価をしている。プロジェクター機器やプリントを使用しての説明が分かりやすく、また障がい児教育現場での経験を元にした説明が具体的で理解しやすいとの回答が多かった。

(5) プリント記入・提出については、肯定的評価が 65%で否定的評価が 10%である。課題意識をもって授業に臨んでいる学生は記述内容が充実しているが、そうでない学生が一定数おりプリントの記述内容も不十分である。今後、グループ協議とともに改善を要する項目である。

4. まとめ

社会が多様化・複雑化していく中で、「他の価値観を認めつつ能動的で積極的に行動できる」人材が必要とされてきている。アクティブ・ラーニングは、このような社会的要請から生まれてきた学修姿勢である。一人ひとりの子どもの可能性に気づき発達を最大限に導く立場にある保育者は、「自ら考え行動する」力を身につけておくことが肝要であり、保育者を養成する者として常にそのことを目指して授業に臨んでいる。インクルーシブ保育・教育の進展とともに、多様な支援ニーズを要する子どもたちが在園するようになってきている。このような子どもたちに積極的に関わり、保育・教育支援ニーズに対し能動的かつ主体的に考え行動し、将来の社会参加と自立に向け的確に対応できる保育者の育成に今後も力を尽くしていきたい。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】講師　　【氏名】古賀　克彦

【研究の題目】

長崎の行事食に関する考察

【研究の概要】

日本には様々な年中行事があり、現在でも多くの行事が庶民の暮らしに根付いている。これの行事を行う際に調理しいただく料理のことを行事食と呼ぶ。日本は古来より日常の生活である「ケ（褻）」と、儀礼や祭りなどの年中行事である「ハレ（晴れ・霽れ）を区別してきた。食事に関しても「ハレ」の日は「ケ」の日と明確に区別され、古来より「ハレ」の日には普段とは違う特別なものを食してきた。

長崎は 1570 年に開港して以来海外への窓口として開かており、他の地域には見られない長崎特有の文化が形成された。この独特の文化は日本特有の行事にも影響を与え、長崎特有の文化や風習を形成した。この長崎特有の文化や風習は伝統となり現在の長崎にも引き継がれており、食に関しても長崎特有のものも多い。そこで今回、長崎の食文化について書籍や文献を用いて調査を行った。

長崎に伝わる行事食は、同じ行事でも全国に伝わる行事食とは差異が見られた。例えば節分では赤大根の鱠や、金頭の煮付け、鯨の百尋、尺八いかの煮付け等や食べたり、端午の節句ではもち米を唐灰汁の入った水に浸漬し、それを細長いさらし袋に入れ糸で口を縛り、唐灰汁（鹹水）を加えたたっぷりのお湯で煮た唐灰汁粽や、米の団子を笹の葉で三角系の形に包んだもので、中国の粽（粽子：ツオンツー）に近い角黍（あれい、かくしょ）と呼ばれる粽を食べたりしていた。また長崎独自のものも多く見られ、中国盆では什錦菜（せっきんさい）と呼ばれる 14 種類の精進料理を供えたり、長崎くんちの庭見せでは桃饅頭、栗、柿、海老糖、千代結び、ぬくめ細工、カステラ等を宗和台に載せ飾りつけ、期間中は小豆飯、鮪汁（ドジョウ汁）、煮しめ、ざくろなます、醴（あまざけ）等を食したりしていた。これらの料理は他の地域には見られない藻で長崎の街がたどった独自の歴史によるものが大きいと思われた。

そして古来より引き継がれてきた行事食は月の満ち欠けに基づいた旧暦（太陰暦）や、冬至や夏至、春分、秋分など太陽の動きに基づいた二十四節季に基づいたものが多く見られた。節分やお彼岸、夏至、冬至などは二十四節気に基づいて行われており、行事食を正しく理解するためには旧暦や二十四節季を理解することも重要であると思われた。

また、今回調査を行った行事食の中には井戸祭りや玄猪の祝いなど失われているものや、盆祭りや正月など過去の行事食と比較すると内容が簡略化されているものが多くあった。この理由としては核家族化の進行、マスコミによる全国の食文化の均一化、食の簡略化や外部化など多くの理由が考えられる。一度失われた行事やその行事食を取り戻すことは難しい。長崎独自の文化や食事を調査しそれを伝承することは、長崎の食文化を守り受け継ぐことにもなり、長崎で栄養士教育を行うものの務めであると思われた。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】中村　浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行をもとに、オペラを含むクラッシック楽曲とミュージカルの発声法を基盤とした歌唱法の同一点と相違点、及び音楽表現、演技法について
2. 保育者養成校の音楽教育における教材研究と指導法について

【研究の概要】

ソプラノからメゾ・ソプラノへの研究を継続しているが、今年度も昨年度とやはり同じ課題点があり、頭では理解しつつも、あらゆる筋肉の使い方や力の抜き方、響きのポジション、また、苦手な音域や母音によっては息の流れがスムーズにならず、滑らかな声と違い自分でも歌いにくかった。しかしながら息の流れがスムーズである時は柔らかな音色で浮遊するような声になり、楽曲を研究する事にも関連でき表現できた。

オペラアリアだけではなく歌曲を通しての研究はパートの移行に効果的であった。息の流れを重視することに最初から高音域にまでの修正課題を目的とせず、２点G（２点ト）を目安に徐々に音程を上げられる歌曲を今年度も選曲した。太く重い声にならず、常に息の流れと丹田を意識した腹筋と背筋、また顎を引いて眉間から前頭を使えるための練習を試みた。ソプラノで勉強していた歌曲を同様の響きで中声用に変えて練習した事で、メゾの響きでも重くはならなかった。曲によっては高声用のままで今の年齢も含めた上での声質を考えながら研究練習する事は今後もとても重要と考え研究していきたい。

年齢によっての変化で声が重たくなりがちだが、息の流れが自然でありポジションをさらに上げること、顎を引いて柔らかく丹田を意識した腹筋と背筋で理想の声となることは、当然ではあるがどの曲においても同様と言える。そのために今年度レッスンはもとより発声法の本、テレビで放映されたクラシックとは違う分野の発声法を参考に独自で発声法を考えトライしてみた。その発声法とは、丹田を意識した腹筋を使って、ブレス（息）で唇をブルブルと振動させながら顎を引いて低い音程から高い音程まで、ピアノで言うスケール奏法と同じく声を出してみる。結果は無意識に力で声を出す事なく、丹田を意識した腹筋と腰筋、背筋とブレスによって無理な声にならなかった。午前に行われるコンサート演奏での発声にはとても効果的であった。この発声法をゼミの授業にも用いて学生の歌唱の変化を見出す事ができ次年度も用いる事としている。また、言葉の重要性とそれによってのダイナミクスを含めた表現力で、歌詞の意味や内容だけではなく楽曲そのものが変化していく面白さを今年度も感じられる事ができた。息の流れによって声の道が見える（抽象的であるが）自分の声質や個性にあった楽曲を選曲しながらレパートリーの幅を広げていきたい。

7.8 年前より中間音域には安定が見られ、特に高音域に入る二点D・E・Fの響きは自然で通る声で出し易いが、高音域での発声に悩みを抱えていることは残念ながら継続中であるため、固執した考えやイメージを払拭しながら上記に述べている発声法を活用して 2 点Aから上の音域の楽曲にもトライしながら豊かな音楽性を表現したいと強く感じた１年であった。何度も述べているが、一番の課題となっている筋肉を使ってのブレス（息の流れ）によって自然体な声、そしてミックスヴォイスや地声をよく使うミュージカルやクラシック歌曲とオペラアリアとアンサンブル、また、クラシック楽曲とミュージカル双方の発声法の違いや役によっての発声法の同一点、音楽表現を確立しながら演技法にも繋げられる研究を今後も取り組んでいきたい。

2.　今年度も初心者が多く音楽基礎知識の理解も約８割がない状況のため、授業外でお互い余裕ある時間を都合し合ったことが多かった。個人レッスンは研究室で一対一の演習のため、まずは緊張状態を緩和させること、学生の性格を早く把握するように努めた。性格を早く知ることはその学生のピアノ技術の進度や音楽的な感受性をどのようにして引き出せるかにおいてとても重要である。これまでの経験によって今年度も性格を早く知り各学生の指導方法、内容、言葉かけに注意をはらった。学生の性格を知ることだけではなく学生と教員との信頼関係を構築した。メンタル面の強化も指導の一環として重要視した。ただ練習をするのではなく練習の仕方のノウハウを丁寧に、時に厳しく繰り返し指導していくことを継続した。今まで積み重ねて努力することが少ない学生には苦痛でもあったと思うが確実に上達していることを学生自身も感じることができていたようだ。どんなに厳しくとも、愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】本村　弥寿子

【研究の題目】(1) 保育実践力を身に着けるための授業内容の模索

(2) 保育における環境教育について

(3) 長崎における草創期の幼稚園教育

【研究の概要】

(1)　今年度より、領域ごとの保育内容に関する科目がそれぞれ講義と演習の二つに分かれ、演習では実践的な活動が取り入れられるようになった。「領域『表現』の指導法は、1 年次前期に開講される演習科目であることから、保育者としての学びが始まったばかりの学生でも自ら保育を構想し実践できるよう、授業を工夫し模擬保育を試みた。学生一人ひとりが役割を担えるよう、1 グループ 5 名で組むようにした。指導案の書き方に関する授業は受講できていない時期の取組であるため、計画案は“流れ”“環境（必要なもの・場を示したもの）”を書き込む簡単な形式とし、計画案作成に対し負担感がないよう配慮した。また、本来は“ねらい”を踏まえて保育を考えるものであるが、今回は学生の保育者としての育ちを考慮し、初めに活動を決め、その後活動の中で子どもにどのような経験をしてほしいかを考えてそれをねらいとする取り組みとした。

実践自体は学生にとって楽しい取り組みであるため意欲的な取り組みの様子が見られ、様々な活動を知らべたり協力して準備したりしていた。しかし、保育者としての動きや言葉のかけ方、設定している子どもの年齢に応じた活動であるかといった内容についてはまだ理解が十分でなく、学生間の意見交換も広がりが出にくかった。これらを改善に向けるには、授業者の発言や授業の進め方の工夫がさらに必要であると感じた。このような反省をもとに次年度の取り組みを進め、本授業でいかに学生に実践力を身に着けるべきか考察を進めたい。

(2)　大気汚染、マイクロプラスチックの問題、省エネルギー等、環境問題は身近なものから世界規模のものまで多岐にわたる。特に今年度、若い世代の環境活動家が地球温暖化問題について発信したことが回帰となり、世界規模での環境保全の取組に関心が向くようになってきた。

環境問題に対する意識は大人になって自然と沸き起こるものではない。幼い時期から身近な自然や物などと親しむ経験があってこそだろう。では、保育の中でどのように環境とかかわる経験が必要なのか。保育者はどの様なことに留意し保育をすべきなのか。ややもすると、環境教育と銘打った特別な活動を年に数回取り入れて満足している保育者も存在しているのではなかろうか。

昨年度からかかわっている県主催の環境活動指導者養成の取り組みをもとに、保育現場で行われている環境教育についてのアンケートを踏まえ、保育者が意識すべき“環境教育”を踏まえた保育について考察を深め提言をしているところである。次年度は、さらに現場の取り組みを掘り下げ、現場の保育者とともに“保育における環境教育”を模索したいと考える。

(3)　長崎市立認定こども園長崎幼稚園の園歌の作詞者が倉橋惣三であることに端を欲した研究であり、前田志津子教授（活水女子学大学）、山本尚史講師（筑紫女学園大学）とともに進めている。今年度は、1952（昭和 27）年 12 月刊行の『幼児の教育』に掲載された、当時、長崎市中心部の玉園幼稚園園長荒木義弘氏の「終戦前後の長崎保育界から－復興の現在概要－」より、また、当時保育を再開したいなさ幼稚園での聞き取り等より、終戦後の長崎市内幼稚園の復興の状況を紐解いていった。そこから、当時の幼児教育関係者の保育に対する思いが読み取れてきた。

今後さらに当時の幼稚園の状況を明確にし、幼児教育関係者の教育理念等から今日的課題を見出していきたいと考える。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】荒木　正平

【研究の題目】
多様な対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

（1）本年度の研究成果としては、本学紀要に発表した「障害のある子ども、気になる子ども、特別の支援を必要とする子どもの、教育・保育場面における“育ちあい”の支援に向けて」があげられる。

平成 29 年 3 月に文部科学省により告示された幼稚園教育要領における「第 1 章　総則」の「第 5　特別な配慮を必要とする幼児への指導」においては、「障害のある幼児などへの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする」と記されている。これを踏まえ、教育・保育現場においてその対応が急務とされておりかつ、実際にその数も増えてきていると指摘される、（発達障害を含む）障害のある子ども、気になる子ども、特別な配慮を必要とする子どもとのかかわりと、“育ちあい”の支援に向けた環境整備のための考察を行った。

今後の課題として、家族支援・家庭支援の意識がより重要性を増すことが考えられる。研究では、近い将来において幼児教育の担い手となる学生の意識についてのアンケート等を用いた検討と、教育現場の職員等への聞き取りを実施することができ、それぞれ非常に有意義な成果が得られた。これらの成果をさらに生かしていくためには、障害を抱える子どもの家族を構成する各主体、つまり保護者である母親・父親、また、きょうだいなどに、直接お話を伺う機会を得ることが必要となると考えている。

また、これに関連して、前年度、島田教員と連名で実施した、障害のある子ども・気になる子どもの在籍状況や、支援ニーズに即した必要な配慮の実施の有無と、配慮があった場合その内容についてのアンケート調査を行った結果についての分析について触れておきたい。そこでは、インクルーシブ教育・保育への要求の高まりと、具体的な実践の現場における取り組みの現実とをいかに結びつけていくかが重要となると指摘し、現場の教職員スタッフの思いについて話を聞くことを課題としていた。ここで上げた課題、すなわち教育・保育現場に直接かかわる職員の意識の把握については、すでに今年度より講習参加者へのアンケート調査や、個別のインタビュー調査等を実施し、その整理・分析作業を少しずつ進めている。今年度の報告としてまとめることはできなかったが、この課題への取り組みも引き続き継続し、より効果的な現場実践に寄与したいと考えている。

（2）前年度まで実施した、「子育ての社会化」と家族のあり方をテーマにした論文では、「ケアの社会化」をめぐる動きのうち、児童分野における動向に焦点を当て、まずはその現状と課題を概観したうえで、保育・幼児教育の実践者となることを目指す短期大学生の、「子育ての社会化」に関する意識の把握を試みていた。この研究テーマについては、意識調査の範囲を拡大し、社会的養護関連業務に現に関わっておられる実践者へのインタビュー調査を現在も継続的に実施している。この課題についても、次年度以降も継続的に取り組み、その成果をまとめていきたいと考えている。

（3）介護実践現場におけるコミュニケーションのあり方については、これまでに集積した研究の成果・課題やインタビュー・データをいかすべく、執筆を進める予定である。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】福井　謙一郎

テーマ：保育者養成校に在籍する学生への支援方法に関する研究
～子ども観と養育態度認知（養育行動）の関連～

１．問題

養育態度認知について

養育態度認知とは、親からのかかわりについての子どもの認知を指す。この点について鎌田ほか(2001)は親へのネガティブな養育態度認知が子どもが成長した後の否定的な子ども観（子どもに対する否定的なイメージ）につながっていることを示した。そして Howes(1998)は、「保護者－子ども」間に愛着が形成されるように、「保育者―園児」にも同様に愛着が形成されるとしており、これらのことから「保護者－子ども」と「保育者－園児」は類似した関係性を有すると仮定できる。つまり保育者・学生自身の子ども観は、彼らの親から受けた養育行動への認知(養育態度認知)に影響を受けていると考えられるだろう。

２．　本研究の目的

以上のことを踏まえ、保育者ならびに保育職志望学生を第二世代とし、その親を第一世代、子どもや園児を第三世代としたとき、図１のようなモデルが仮定されると言えよう。第一世代からの養育態度認知が第二世代の養育的行動や子ども観に影響を与えるものとし、これが保育者や学生(第二世代)の子ども観や子どもへのかかわり方にも同様の影響が発生すると仮定して、養育態度認知が子ども観にどのような影響を与えるのか、その具体的な内容を検討することを目的とする。

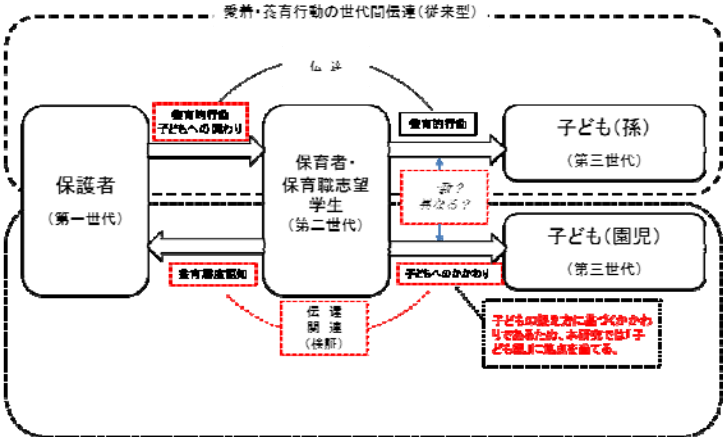


図１　本研究で扱う世代間伝達のモデル

３．本研究の意義

保育者養成校において実施される観察実習ならびに保育・教育実習を通し、子どもとの関わりに課題や悩みを抱える学生が存在する。抱える課題の内容は様々であるが、その中で、子どもに対し否定的な思いや感情（否定的子ども観）を持つ学生も存在し（福井・中島、2018）、また養成校側もその支援方法に課題を抱えているという現状がある。

本研究では、否定的子ども観を有する学生の実態と、そこに至るまでのプロセスを明らかにする。そして支援の方法（カリキュラム上の支援、心理的支援ならびにキャリア支援）を選択すれば良いか検討し、保育者養成校における学生支援を充実させることを本研究の意義とする。

４．方法

質問紙構成：用いる尺度を以下に示す。

Parker(1979)が開発した Parental Bonding Instrument(PBI)。『養育』『無関心』『過保護』『主体性』4 つの下位因子を持つ尺度である。

子ども観(子どもイメージ)；嘉数ら(1997)の 7 因子（『いとおしい存在』『個性的存在』『煩わしい存在』『未熟な存在』『親の所有物的存在』『尊重すべき存在』『教育すべき存在』）を抽出した子ども観尺度。

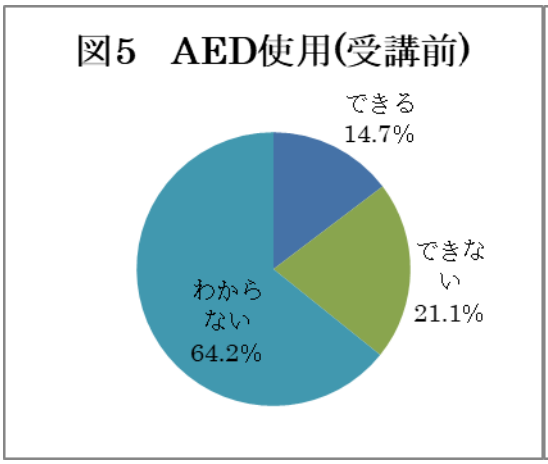
令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

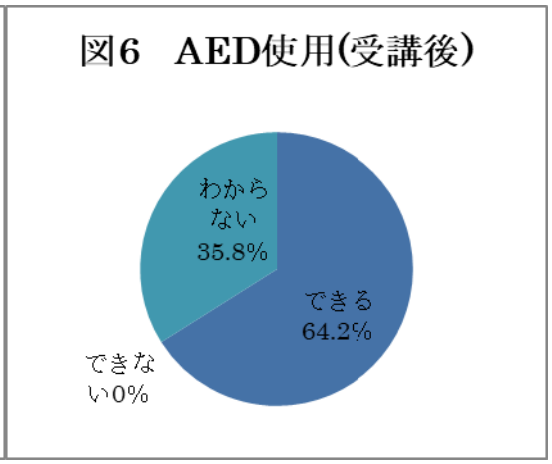
【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】光武　きよみ
【研究の題目】病児保育についての研究
【研究の概要】多職種連携の保育看護

今回見学した病児保育室では、看護師は医療面を担当し、保育士は検温(バイタルサイン)や症状観察、1日保育を担当しており、業務の仕分けが行われていた。保育内容は、保育士による症状別保育が行われており、病児の状態や心に寄り添う形で進められていた。保護者支援についても、書面での報告に工夫があり、保育士が記載して、看護師が確認した後、保護者へ手渡していた。お互いの専門性を理解しており、保育士の連絡報告により、看護師がその後の確認や処置を行っていたことから、連携はほぼ図られていると思われる。しかし、マニュアル等が作成されていない事により、二次感染や重大事故がおこる危険性が大きいのではないかと考える。そのため、インシデント・アクシデントレポートや感染症や事故防止マニュアル等を早急に作成して、施設内職員が共通認識を持つことが課題であると実感した。またそれが、危機管理意識の向上や多職種の更なる連携に繋がるものと思われる。

【研究の題目】リスクマネジメントに関する研究
【研究の概要】保育学生の救急救命に対する意識調査からの考察

保育者には、子どもたちの健康や安全を守るという責務がある。現在、各園で様々な工夫をしているが、重大事故はゼロにはなっていない。そのため、保育者は安全に対する知識と危機管理能力の向上を図る必要がある。今回のアンケート結果では、保育学生は安全に対する意識が若干低く、心肺蘇生や AED 使用について自信が持てないことが明らかになった。救急救命講習の受講後であっても、知識や手技が定着するまでには、年間に数回の反復練習が必要であると実感していた。それらの定着は個人の洞察力や判断能力を高めると同時に園内の連携強化につながっていくと考える。以上のことから、救命処置は保育者として必要な知識と技術であり、1 回の講習受講だけではなく、手技を反復させることが重要であると示唆された。





本編は、日本学校保健学会　第 66 回　学術大会にて口述発表を行った。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】講師　　【氏名】蛯原　正貴

【研究の題目】国内の体育授業における戦術学習研究の系統的レビュー

【研究の概要】

学習者主体の指導法として，イギリスでは Teaching Games for Understanding （TGfU）注 1)という理論が提唱されている（Bunker and Thorpe，1982）．TGfU は日本において「ゲーム理解のための指導法」として岡出（1998）や木原（1998）によって紹介されており，その特徴として１）各種目における戦術的内容を動作技術よりも先に教えるため，球技の種目区分を侵入型，ネット・壁型，打球・フィールディング型，的当て型の 4 つに分類したこと，２）ゲームの実施を通じて戦術的内容に気づき，自ら学ぶべき動作技術を見出し，自ら動作技術の練習課題を設定するという問題解決型の学習形態を提案したこと，３）TGfU 開発に関わった教員の成長が見られたこと，以上の 3 点が挙げられる（木原，1999）．これらの特徴をもつ TGfU の理論は日本の体育科教育にも大きな影響を与えており（土田ら，2010），2008 年に改訂された小学校学習指導要領においては，TGfU の理論を基に「ボールを持たないときの動き」といった戦術的学習内容が明記された．そして，今回の改訂によって示された体育科の目標においても，TGfU の理論が色濃く反映されており，戦術学習研究による成果はこれまで以上に求められていくことが予想される．

しかしながら，国内における戦術学習研究は，研究対象とする校種，教材とする種目，評価方法等が多岐にわたることから，どのように発展しており，今後どのような知見を積み重ねていくべきなのかということが不明瞭となっている．そのため，これまでの戦術学習を体系的に整理し，今後の研究課題を明らかにすることは，新たに改定された体育科の目標を達成するためにも必要不可欠であると考えられる．

そこで本研究では，国内における戦術学習研究の体系的なレビューを行い，今後の戦術学習における研究課題を明らかにすることとした．

本研究では伊藤（2017）の先行研究を参考に系統的レビューを用いた．伊藤（2017）は，国内のスポーツツーリズム研究に関して，①論文数，②出版年の動向，③掲載学術雑誌の分野，④研究対象としたスポーツツーリズムの種類，⑤研究対象の地域，⑥研究のアプローチ法，⑦研究手法，⑧研究テーマという 8 点の内容分析を行った上で系統的レビューをしており，これら 8 点の傾向やカテゴリー分布を把握することは，当該研究領域の現在の立ち位置や置かれている状況が確認できるとしている．そこで，本研究においては，伊藤（2017）の研究で用いられた内容分析を基に系統的レビューを行うこととした．

その結果，戦術学習研究は 2008 年の学習指導要領改訂から活発化しており，2017 年に改訂された新学習指導要領においても，より一層その成果が求められることが考えられた．また，研究対象とした校種は幅広かったものの，小学校と大学における実践が多数であることが明らかとなったため，今後は中学校，高校段階における知見の蓄積が求められるであろう．

教材として選択されていた種目に関しては，バスケットボールを中心としたゴール型が多数選択されていたが，これは学習指導要領上の位置づけに加え，ゴール型における戦術的構造の単純化を図る目的で種目の選択が行われている可能性が考えられた．一方，ベースボール型種目を教材として選択している研究は見当たらなかった．ベースボール型の種目については，基本的技能の習得程度が戦術学習に与える影響が大きく，単元における授業数で戦術的理解を図ることが難しいことから，戦術学習の教材としては選択されにくいことが考えられた．今回のレビューでは，戦術学習における教材としての種目に偏りがみられたことから，今後はネット型，ベースボール型に関する実践の蓄積が必要になると考えられた．

研究手法については質問紙調査とビデオ分析が半数以上の研究で用いられており，研究手法に関連して，形成的授業評価及び GPAI による学習評価が高い割合で用いられていた．形成的授業評価では認知的学習効果を評価し，GPAI ではパフォーマンス評価を行うという研究が多数であったが，GPAI による個人を単位としたパフォーマンス評価には限界があり，学校現場においても活用がしにくいことから，スキル評価については再検討すべきとの指摘もみられた（吉澤・土田，2016）．今後，戦術学習をより発展させるためには，これまでの評価方法についての知見を見直すとともに，新たな評価方法の構築が求められると考えられた．

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】特別専任講師　【氏名】江頭　万里子
【研究の題目】女子短期大学１年生の敬語に対する意識と運用力の調査について
【研究の概要】

敬語の効果的な指導を展開するための基本情報を得る手法の一つとして、敬語に関する授業開始前に敬語に対する意識と敬語の知識および運用力の調査を１年生全員（調査当日の欠席者を除く）に対して行った（生活創造学科は前期に、幼児教育学科は後期に実施）。意識調査は、向山（2011）の尺度を使用し、その他は筆者が作成した質問紙を使用した。

１．調査結果

１．１．敬語に対する意識調査

調査対象の学生は、敬語の使用に関して否定的な感じは持っておらず、敬語の使用に不慣れであるとの意識も薄い。実際の場面で適切な敬語がほぼ使えると感じているが、文法知識や正しい運用については、少し不安を感じている。また、改まった場での敬語使用は、社会人としてのマナーであり、それができなければ恥ずかしいことであるし、敬語を使えば頭が良く見られ、信用もされると考えている。仕事や就職で成功するためには、敬語を使うことが必要であると考えているという実態が明らかになった。

１．２．敬語の知識・運用力の調査

１．２．１．日常どの程度の丁寧さで話しているかを知ることを目的とした問

目上の人にどこに行くのかを尋ねるときに何と言うかを尋ねた結果は、レル敬語 64.8%、特定形 2.8%、ナル敬語 1.4%、文末を「です・ます」とした丁寧語 3.9%、その他は無答、又は誤答であった。尊敬語で話す場合、丁寧さはレル敬語程度であると思われる。

１．２．２．レル敬語、ナル敬語、謙譲語の一般形の知識

「読む」（和語）、「説明する」（漢語）を示し、その尊敬語を２つと謙譲語を尋ねた結果、「読まれる」（レル敬語）が、54.5%、「説明される、説明なさる」の延べ人数の割合は 46.9%、ナル敬語の「お読みになる」は 42.8%、「ご説明になる」は 4.1%、「ご説明なさる」は 6.1%、謙譲語の一般形「お（ご）～する」の正答率は、和語が 1.4%、漢語が 9.7%であった。

１．２．３．話者が恩恵を受ける場合の表現

「読んで（指導して）もらう」「読んで（指導して）くれる」を丁寧な表現にする場合、「もらう」を「いただく」に、「くれる」を「くださる」に変換したのが、45.5%～65.5%。「お読みくださる」「ご指導くださる」は、共に 1.4%、「ご指導いただく」は 3.4%であった。

１．２．４．ビジネスの場における言葉遣い

ビジネスの場における言葉遣いについて、間違った表現を提示し、訂正した方がよければ訂正するように指示した結果、９問中５問の正答率は 20%代、30%代が２問、60%代が２問、70%代が１問であった。

１．２．５．動詞の尊敬語と謙譲語の特定の語形について

正答率の平均は、尊敬語 31.2%（6.2%～57.9%）、謙譲語 24.1%（0%～67.6%）であった。

２．考察と今後の課題

調査結果から、本年度の入学生は、敬語の使用に関して否定的な感じは持っておらず、敬語の使用に不慣れであると余り感じてもいない。実際の場面で適切な敬語がほぼ使えると感じているが、文法知識や運用力については、少し不安を感じている。敬語に対して否定的な感情は持っていない。また、敬語を功利的に捉えてもいることがわかった。敬語の知識・運用力に関する調査からは、敬語の仕組みや特定形についての知識が少なく、敬語の運用力も高くないことが分かり、学生の敬語使用に関する意識・自信と知識及び運用力の実態に大きな乖離があることが窺えた。

筆者の担当する授業の中で、敬語の学びに当てられる時間は多くはない。その中で、学生が敬語の学びを深め、運用力を向上させるためには、まずは、敬語の仕組みを理解させ、特定形を覚えさせた上で、それを運用する場を作る必要があるだろう。今後は、今回の調査結果を基に、有効な指導法を検討していきたい。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】助教　　【氏名】船勢　肇
【研究の題目】「学問の自由」概念の思想史研究
【研究の概要】

科学研究費補助金基礎研究Ｂ「学問の自由の動態と再構築に関する国際比較研究－コモンローと制定法－」の共同研究として、資料や文献を調査し、研究会を重ねながら、近現代日本における「学問の自由」概念の再検討をおこなった。

明治末、戸水事件では「学問の自由」と「教育の自由」が分離され、前者のみの自由が唱えられた。これは、市民一般の自然権ではなく、国体概念との関係で限界があったこといわれてきた。しかし、このころは同時に、日比谷焼き討ち事件が生じ、大衆の騒擾が生じた時期であった。つまり、盛り上がった大衆の声も市民的自由への獲得には向かなかったと考えられる。

この大衆の観点はこれまで「学問の自由」については、あまり踏まえられてこなかった。しかし、昭和初期の「大学の転落」論争では、大衆向けの雑誌において大学批判が繰り返されていた。あまり知られていないが、１９６０年代をまたずして、大学の自治への批判は存在していた。それは特権・閉鎖性などを糾弾するものであった。高踏的な教養論を唱えた河合栄次郎はこうした現実の動きをみればこそ、自らの理想論を展開したのであった。つまり、大学バッシングが、逆説的にフンボルト的なるものを生み出していたのであった。この時の大学論争は、天皇大権と天皇機関説（大学自治を含む社会分業論）のせめぎ合いといった大日本帝国憲法下の問題と密接に関係する。

よって、論争では議会政治や国民の意思を含めた統治の正統性・合理性が論じられ、デモクラシーのあり方にかかわる問題が存在していた。そのため、戦後に問題になる「自治の担い手」などの論点は、戦前から持ち越されたものと考えるべきである。さらに、大衆の存在に着目するなら、「学問の自由が守られるにはそれを理解する市民が必要で、そうした市民が生まれるためには学問の自由が必要になる」という問題は、戦前戦後を貫くデモクラシーの問題として現代に存在していることが確認される。２０００年代の状況をみればなおさらに、自然権が規定された日本国憲法が、ただあるだけではなく、その意義を考察し続ける試みが重要だと再認識されてくるだろう。

また、国際比較研究としては、ドイツにおいても１９６０年代後半から大学批判が強まることで、フンボルト理念が後退しているなど、有益な知見がえられた。

これからの課題としては、戦前の大学批判の論理と大学擁護の論理をより詳細に分析し、戦後の議論に連続する部分と断絶する部分を検討し、国際比較をおこなうことである。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】助教　　【氏名】桑原　倫子

【研究の題目】病院給食調理従事者の疲労度と睡眠時間に関する考察

【研究の概要】

病院給食において常食や各種治療食に加えて個別対応食が増加すると、調理作業はいっそう複雑化・煩雑化し、調理従事者は多くの負担を担うことになると考える。病院給食における食事提供業務は、年間通して途切れることなく 1 日 3 食実施され、3 食提供のために早朝 6 時前から 18 時過ぎまで業務が続くため、交代勤務もしくは時差勤務が必要である。このため、日によって勤務時間が変更することから、睡眠時間が不規則になり、睡眠の時間や質の確保が困難になるケースが存在すると考えられる。また疲労が蓄積した状態で複雑化・煩雑化した調理作業を行うことは注意力や集中力の低下から、調理における重大な医療事故を起こす危険性がある。給食調理従事者の疲労に関する過去の報告によると、学校給食の調理従事者において腰や肩の局所に集中した負担が大きいことが報告されている。加えて、病院、福祉施設、学校および寮などの給食調理員の腰部障害や頸肩腕障害の発生要因検討では、平均給食数がそれらの障害発生に関連していることが報告されている。本研究では病院給食調理従事者に対して疲労の種別、疲労度、勤務時間帯、業務内容および睡眠時間を調査し、その関連及び課題を考察した。

対象は A 病院（病床数 874、診療科数 35）で給食の調理に従事している病院直営の調理師 13 名、栄養士 1 名（男性 10 名、女性 3 名）とした。調査期間は 2017 年 3 月 1 日から 3 月 7 日までの 7 日間とし、得られた延べ 63 名分の記録を解析対象とした。日本産業衛生協会産業疲労研究会の「自覚症状調べ」を用い、自記式質問紙調査を実施した。睡眠・勤務の調査は睡眠・勤務記録表　を用い、終業後に直近の睡眠時間、勤務時間および業務内容を調べた。

給食調理業務前後での疲労度の比較では、疲労領域「だるさ感」および「ぼやけ感」が就業後において有意に高値であった。「だるさ感」は質問項目「腕がだるい」「腰がいたい」「手や指がいたい」「足がだるい」「肩がこる」の 5 つから構成される。学校給食の調理従事者における過去の報告においても腰や肩の局所に集中した負担が大きいとされており、長時間にわたる調理作業と立ち仕事が中心となる病院給食調理従事者においても同様であることが明らかになった。

また、疲労領域「ぼやけ感」の就業後についても、就業前に比較して疲労度が有意に高値であった。とくに、6:45 出勤時は 5:30、8:45 出勤時と比べ、有意に疲労度が高かった。また、疲労領域「ぼやけ感」の就業後についても、就業前に比較して疲労度が有意に高値であった。とくに、6:45 出勤時は 5:30、8:45 出勤時と比べ、有意に疲労度が高かった。疲労領域「不安定感」において、就業前では 9:45 で 5:30、6:45、8:45 に比べ有意に疲労度が高かった。疲労領域「不安定感」において 6:45 終業後は 8:45 終業後に比べ、疲労度が高い傾向にあった。

平均睡眠時間において 6:45 出勤が 6.5 時間と 8:45 出勤時の 7.4 時間にくらべ短かった。睡眠時間の短かい出勤時 6:45 は十分な睡眠時間であった出勤時 8:45 に比べ疲労度が高くなる傾向がみられた。睡眠時間と疲労度は負の相関にあり、個人の生活習慣の見直しに加えて、労務管理者は勤務シフト作成の際に睡眠時間が確保しやすい勤務帯になるように配慮が必要と考える。

本研究は 1 施設のみの結果を解析したものであり、分析に用いたデータ数ものべ 63 人と少ない。今後は他施設での調査を含め、より多くのデータを分析し疲労と各種就業時間帯や業務内容について研究する必要がある。また、運動や趣味等労働者個人にとって好ましい生活活動を行う頻度が高いグループはそうでないグループに比べ、有意に疲労回復度が高くなるとの報告がある。このため勤務時間帯や業務内容といった労働場面に加え、勤務後や休日の過ごし方など生活場面も含めた総合的な疲労対策について検討する必要があると考える。

令和元年度（2019 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】助教　　【氏名】桑原　真美

【研究の題目】

衛生意識向上のための実験における教育効果の検証

【研究の概要】

1. 目的

栄養士養成課程の衛生意識向上のための衛生実験と教育効果の検証については先行研究が行われており、衛生意識向上への効果が認められているが、衛生管理の実践に結び付いているかの検証がなされている報告は少ない。また、栄養士養成施設毎に衛生教育の内容が異なるため、個々の教育効果の検証が必要になると考える。そこで、本研究では本学で実施している手指の衛生に関する実験と食器洗浄に関する実験が、学生の衛生意識および衛生管理の実践に与える効果について検証した。

2. 方法および対象者

衛生意識への効果の検証方法は授業前後の受講生へのアンケート調査とした。また、実験終了 1 か月後に食器洗浄度の再検査を実施し、衛生教育が実践に結びついているかの検証を行った。

対象者は食品衛生学実験の受講者は長崎女子短期大学生活創造学科栄養士コース 1 年生 28 名であった。アンケート調査については受講者 28 名中、記入不備を除いた 27 名を対象とした。実施期間は 2019 年 9 月～12 月とした。

3. 結果およびまとめ

身の回りの細菌検査については、ペンのグリップの一般生菌数が最も多く、次いで電卓、スマートフォンであった。筆記用具の細菌汚染が食中毒に直接関与するとは言いきれないものの、ペン使用後には手指洗浄を行うなどの対策が必要であると考える。また、調理中にスマートフォンを触ると答えた学生は実験前が 96.3％、実験後のアンケートでは、自宅での調理中にスマートフォンを触ると答えた者は 69.2％であり、実験前と比較して減少した。

手洗いにおける除菌効果の検証については、手洗いおよび消毒により菌数が減少したグループはみられず、手洗いの除菌効果が非常に分かりにくいものとなった。手洗いで菌数が減少しなかった原因として、手洗いが不十分または通過菌は除去できているが常在菌が露出したことが考えられる。手洗いにおける除菌効果の検証については、今後実験方法を改善する必要がある。手指表面上の細菌検査については、黄色ブドウ球菌とみられる細菌が分離された者が 5 名（17.9 ％）であった。

日常的な手洗いについては、「帰宅後」の手洗い方法、「トイレ使用後」の手洗い時間と手洗い方法、「食事前」の手洗いの実施と手洗い時間において、実験後に改善傾向がみられた。衛生的な手洗いについては、実験前、「調理中、肉・魚・卵を触った後」に手洗いをするものは 100％であったが、手洗い時間は 10 秒以下が 6 割であった。手洗いの方法ついては石鹸使用者は 81.5%、消毒を実施する者がわずか 4 ％であった。また、「調理時、盛り付け前」の手洗い実施者は 50%と低い値を示し、手洗い時間は 10 秒以下が約 6 割と最も多かった。石鹸を使用する者は 46.2％と低く、消毒を実施する者は認められなかった。実験後のアンケート結果では、「調理時、盛り付け前」の手洗い実施者は 85.2 ％と実験前と比較して増加した。「調理中、肉・魚・卵を触った後」および「調理時、盛り付け前」の手洗い時間についても増加がみられた。手洗いの方法は「調理時、盛り付け前」については石鹸使用が 87.3%まで増加した。

食器洗浄の簡易検査については、実験により普段学生が使用している食器の洗浄が不十分であったことが証明された。アンケート結果においては、洗浄不十分であった部分を念入りに洗うようになった等の回答が得られ、実験が印象に残ったと答えた学生が約半数であった。しかしながら、実験終了 1 か月後に実施した洗浄度の再検査の結果では、すべての検体にでんぷん残留物、脂肪性残留物が確認された。食器洗浄に対する意識の向上がみられても、実際に行動に移すことが出来るまでには至らなかったことが示唆された。

アンケート結果より、手指衛生に関する実験が、学生の意識を向上させ、学生の手洗いの実施、手洗い時間の増加、手洗い方法の改善に影響を及ぼしたことが示唆された。しかしながらすべての学生において衛生意識の向上や実践についての変化がみられたわけではなく、実験内容の見直しおよび実験科目外での教育も重要であると思われる。また、食器洗浄度の再検査においては、実験後の改善はみられず、授業での学びが実践に結びついているとは言い難い結果となり、衛生意識の向上がみられても、実際に行動に結びつけることは容易ではないことが示唆された。衛生実験以外においても繰り返し指導を行うことを視野に入れ、教育内容の改善をしていく必要があると考える。

KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896